
世界中天

稲垣優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界の中天

【Nコード】

N4911H

【作者名】

稲垣優

【あらすじ】

ある日突然異世界に召喚されちゃいました。この世界を救えとか言われたけど、勇者は一緒に連れてこられた親友だし。え、私は？しかも、何故か周りに居る人はイケメン男子ばっか。私、イケメン苦手なのに。これっぽっちもやる気が出ないけど、それでも私、この世界のために頑張ります！ギャグだったり、シリアスだったり、ラブ……だったり？

DATA:000 穴に落とされて（前書き）

只今、修正期間中です。

話の途中で突然書き方が変わったりするかもしれませんが、それは修正がまだなんだな、と温かい目で見守ってやってください……。あくまで予定ですが、すべての話を修正したいと思っています。

DATA..000 穴に落とされて

帰宅途中の、奇妙な浮遊感。

いつか、この生涯の内に貴方に会う事が出来たのなら。

その時、私は――――

*

「ルイちゃん！ 待ってよお！」

背後から飛んでくる、親友の切羽詰った声。荒く、弾んでいる呼吸。

それらに気付いて、私はせかせかと動かしていた足を止め、緩やかな坂のど真ん中でわざわざ振り返る。

ばたばたと騒がしい足音がその声と共に私に近づいてきて、よほど急いで私を追いかけてきたのだろうな、と予測。十中八九、その予想は当たってるだろうけどね。

「なんで待っててくれなかったの？ すぐに戻るって言ってたのに……」

唇を尖らせて私に抗議をしてくるのは、私の中学からの親友、御_み

井優梨^{ゆり}。

走って疲れているためか頬が赤く、何故か目も潤んでいる。くそ、この顔は反則だ！ 可愛すぎるだろ！

年齢より、三つも四つも若く見られがちな童顔。その童顔に合わせたような体型。制服を着ていても、とても高校生には見えないのが特徴な女の子。そして更に、万人受けする顔立ちで、人気はロリ好きの一部のマニアだけに留まらず。勿論高校でも大人気のアイドル。

そんな、容姿に関しては非の打ち所が無いのが、マイ・ベストフレンドだ。

しかも、茶色の瞳にクリーム色っぽいふわふわした髪の毛、なんという日本人離れた瞳と髪も持ち合わせていたりする。そこらのアイドルよりもよっぽど可愛いと、親友のこの私が太鼓判を押してあげよう。

「え、だって、どうせ告白だったんでしょ？ 告白だといっつも遅いから、もう先に帰っちゃおって思って」

「う……確かに、いつもは遅いけど……」

そうだね。今日は三十分かかっていたみたいだけでも。

「なんでゆりは付き合ったりしないの？ モテるんだから、一回くらい付き合ってみればいいのに」

「だって、別に好きじゃないし……。それに、私好きな人、いるし」

……………は？

「え、嘘、ちょっと何それ！ 聞いてないっ！ 誰、そいつ！」

「え？ あ、……ごめん！ 今の聞かなかったことにしてっ」

「無理！ さ、吐きなさい！」

「え、あ、や、駄目、」

「じゃ、あそこのクレープ屋でじっつくり話を聞くから!」

「えー! 拷問だぁ!」

「いいから、ほら、」

はやく、と続けようと思った言葉は、咽喉に引っかかったまま自然消滅してしまった。

ゆりの腕を掴み、クレープ屋まで一直線に向かおうと、右足を前に出したのが間違いだったのか。いや、左足を出したほうが正しかったと言いたい訳ではないよ?

不思議も不思議、右足の出した先には、地面が存在していなかった。落とし穴のようになっていて、黒い穴が開いている。広さで言えば、大体一畳くらいの大きさの円状の真っ黒な穴、らしきもの。

——なんて、呑気に状況を説明してる暇なんて無いっつの!

「ええええええ!」

「お、おち、……っいやああ!」

着地できなかった右足に導かれるように、私たち二人は謎の穴へ仲良くダイブ。

ええええええ! 何で? 何故? Why?

ええええええ、ちよっとちよっとと神様! なんで私、突然穴に落ちて、突然落下している訳?!

私はいたって真面目な、普通の女子高生でした! 問答無用で落下運動なんて、そんな仕打ちを受ける覚えはありません!

離れないように、ゆりの腕を力いっぱい掴みながらそんな事を思っていたところ、この穴のゴール、……即ち、地面が見えた。

じよ、冗談じゃない! もう上を見上げて私たちが落ちた穴が見えないんだよ?! そんな長い時間落ちつづけて、こんなスピー

ドのまま固い地面になんか落ちたら、ゆりとそろってぐちゃぐちゃだよ！

じ、地面が、近……………

あ、死んだ。

＊

帰宅途中の、奇妙な浮遊感の最中。

私はその時、決めたのだ。

嗚呼、神様。

いつか、きっと、この生涯の内に貴方に会う事が出来たのなら。

お前のその顔を、必ずグーで世界の果てまでふつとぼしてやる。

DATA..001 勇者と魔王

———ぽた、

私の頬に冷たい雫が降り落ちた。雨のように、ぽたりぽたりとしようばい涙が私の顔を打ち、重力にそって輪郭を伝って行く。何が起こっているのだろうかとそっと目を開ければ、そこにあったのはゆりの泣き顔。

ゆりが、泣いてる……？ どう、して？

「……ルイちゃん、起きてよお……」

悲痛なゆりの涙声。

ああ、そうか。私、あんな高い所から落ちたんだもんね。

ごめんね、私、死んじゃったんだね。泣かせちゃって、ごめん。

でもね、通学路にあんなに深い穴が開いてるなんて、誰も想像できないと思うの。それで落ちちゃって死ぬなんて………馬鹿みたいだね。ごめんね。

ゆりも気をつけるんだよ？ あの通学路、穴が開くから。家が近くて毎日一緒に帰ってるんだから、ゆりだってあそこ通るんだし………て、待てよ私。一人で勝手に話を進めるな私。

ゆりも、同じ高さから落ちたはずじゃ？

「……なんであんな生きてんの？」

「！！ ルイちゃん！」

ぱあ、と効果音がつきそうなくらい一気に表情を明るくしたゆり。涙なんて、もうどこかへ吹っ飛んでいったみたいだ。早いなあ……。……っていうか、あれ？ 私の言葉通じてる？ うっそだあ。だって

私、死んだはずだし。

え、もしかして、じつはゆりって……

「靈感あったの？」

「え？ 何したの、ルイちゃん！」

「だって、私と喋ゆうれいってるよ？」

「ルイちゃんだって生きてるよ！！」

ちょ、ゆり、耳元で叫ばないで。

うっそ、あれ？ 生きてる？ そう思って落ち着いてみると、痛みも全然無い。足だってあるし、どうやら、幽霊になったわけじゃ無い、らしい。

んじゃ、えっと、……誰か、説明。

「ルイちゃんと一緒に穴に落ちた所までは覚えてるんだけど……。それからすぐ気を失ったみたいで、気が付いたらここに居て……。…ねえ、ここどこ？」

「どこって……」

私は起き上がり、辺りをぐるりと見回す。ええっと、真っ白な壁が四方を囲んでいて、天井は……うわ、高い！ どう見ても、誰かの家というわけじゃ無さそうだ。どちらかといえば、教会に近い……かも。

うん、ここ何処？

「勇者様」

ふいに、背後から突然声がした。驚いて其方を見れば、何故か綺麗な女の人が私たちを少し遠くのほうから見ていた。

あれ？ なんて、私さっき気付かなかったの？ この人たち、ず

つと居たよね、多分。よく見れば、結構人が居る。ひーふーみー……うーん、十人くらい？

「いきなり呼び出してしまい、申し訳ありません」

「えっとー、何か知ってるようなので、説明、もらえます？」

「勿論です」

彼女は、にっこりと微笑んだ。

光るような金色の髪。頭のとっぺん近くで髪の三分の一くらいの量を結っていて、残りの三分の二は肩の後ろを流れている。ゆるいウェーブで、ふわふわとした印象を受ける髪だった。そして、端正なその顔立ち！

とにかく、その女の人はすごく美人な人だった。すごい綺麗。

これは男の人はもちろん、女の人からも好かれるタイプだな。大人向けの女性雑誌のモデルとかに居そうだもん。

「私の名前は、アミラ。この国で一番の召喚師であり、貴女方を異世界から呼び寄せた者です」

「異世界、ですか…？」

「ええ」

その後も、彼女は長々と説明をくれる。ええと、アミラさんの話をかいつまんで話すと、どうやら、此処は私たちが住んでいた世界とは全く違う世界らしい。いわゆる、異世界、と言う奴だ。

そして、今現在私たちが居る世界。つまり、アミラさんが住んでいるこの世界が崩壊してしまうと予言され、私たちが勇者として召喚されたらしい。

うっわ、ベタな話！

「理解はされましたか？」

すべて説明が終わったアミラさんは、さっきみたいな笑顔になった。ふわりとした、綺麗な笑み。

ゆりも彼女の笑顔の威力にやられたのか、体の力をすつと抜いて、アミラさんを見る。そして、説明を分かっているにしろ、分からないながらも、弱々しく返事をした。

「は、はい……」

私はその声を聞いて、頭が冷えていくのを感じた。

氷のように、凍てつく。アミラさんが、あなたは大丈夫ですかと笑いながら尋ねる。凍てつく、凍てつく。

「無理」

「……は？」

突然の私の科白に驚いたみたいなアミラさん。ま、そろそうだ。

いや、そりゃアミラさんには悪いけど。いきなり穴に落とされて、そんでいきなり勇者になれとか、ぶっちゃけ冗談じゃない。絶対ヤダ。断固拒否。元の世界へ帰す事を要求します。

「……ルイちゃん？」

「何？　だって、これって普通の反応でしょう」

「えっと、でも、」

「行き成り知らない場所に連れてこられて、なんかコスプレしてる人間から貴女は勇者ですとか言われて、信じられるわけ、ないでしょう。何処のオカルト集団だっつーの！

私たちの立場も、この世界の現状も理解してる。どうせ、この世界を救ってくださいって言うんでしょう？　異世界から召喚した『勇者様』に助けを求めるのは、RPGのお約束だもんね。けど、お

生憎様。私は自分のことで精一杯でね、貴女たちの願いを叶えてる暇なんてないの。ゲームの主人公みたいに、人一倍正義感が強いとか、腕っ節に自信があるとか、そういったオプションがついてるわけじゃないし。

世界を救うのよ？　そう簡単に出来る訳無い事くらい、私でも分かるわよ！　私の居るべき世界は、元の世界なの！

この世界のことなんて、知ったこっちゃないわ！」

息継ぎ無しでまくしたてる。言った、言ってやったぞ！

そうだ。無償で世界助けなんてしたくない。大体、私たちは一文無しで今までの常識なんて通じない世界に来ちゃった訳でしょう？　今の私たちの明日なんて誰も保証してくれないのに、なんで私たちが見ず知らずの人間の明日を救わなきゃいけないのよ。理不尽。アミラさんには悪いけど、それはいくらなんでも勝手すぎない？　自分達の明日を作るために、見ず知らずの人間の人生をむしりとりうなんて、勝手にもほどがある。彼女達に悪気がないのは、分かっているけど……。

「……ところが、関係無い、では済まなくなりそうなのです」

「……………へ？」

「この世界と、貴女方が今まで居た世界は、言わば鏡のような存在。どちらかが消えれば、もう片方が消える。そんな関係にあるのです」「……それって、この世界を救わなきゃ、私たちの世界も消える、てこと？」

「はい」

アミラさんは、うそ臭い笑みを貼り付けた。いやいやいや。

隣りでは、ゆりが「そ、そんな……」と涙を溜めて悲しそうに呟いた。ぎゅ、と両手を握り締めて、小さく震えている。

そうだよね、怖いよね。行き成り訳わかんない場所に問答無用で

連れてこられて、それで拳句の果てに「貴女の世界は消えちゃいますよ」？

ましてや、ゆりは人一倍怖がりで臆病なんだ。こんな事言われたら、泣きたくもなるよね。

まあ、泣きたくなるのは、ゆりだけの話なんだけど。

悪気はありませんよー、と語るように笑うアミラさんを見て、私は腹の底から湧きあがる怒りを隠す事もせず、彼女を睨みつけた。

「それって、脅迫、ですか？」

「はい？ いえいえ、違いますよ。至って平和的な交渉です」

「何処がっ！ 貴女が言いたいことは、つまり、『私たちに協力しないとお前らの世界も消えるぞ』って事でしよう？！ 結局それって、私たちに選択肢なんて無いのと同じじゃない！」

アミラさんは、目を丸くして私を見た。どうやら驚いているらしい表情だが、いったいどこに驚く要素があったのやら。普通の神経のある人間なら、あんなあからさまな脅されれば多かれ少なかれ怒りを覚えるっての。

一方ゆりは、なんと。目から涙が零れている。ぼろぼろと涙を流しながら、私を見ている。

……まあ、いろいろ言われたしね。タイミングはよく分からないけど、泣きたい気持ちはわかる。

けど、残念ながら今の私にゆりを守る余裕は無かった。私はアミラさんを警戒するので精一杯。彼女を睨むので精一杯だったのだ。

「では、拒否します？」

「……………え」

「実は、貴女方を元の世界に戻すのは不可能では無いのです。その

足元の魔道陣が見えますか？」

「あ、はい」

まどうじん？ いったいなんだと思ったが、魔道陣、と漢字に交換すればなんとなく理解できた。魔法陣みたいなもんだよね、多分。私たちが踏みつけてる床の模様らしきもの……の、ことだろう。確かに、変な模様の床だなあと思ってたんだよね。

私たちを中点に半径五メートルくらいの円を描き、その円の中にびっしりと私たちが読めない文字が書かれている。

アミラさんたちは、この魔道陣の外。円の外側に、立っていた。

「この陣の内側に居る限り、貴女方は元の世界と繋がっている。私とその気になれば、還す事だって可能なんです」

「じゃあ……！」

「しかし、その為には大量の魔力が必要になる。もう一度召喚を行うほどの魔力は、もう私には残らないでしょう」

……えーと、つまり、簡単に言うと、私たちが帰ったら勇者はもう二度と来ない、てこと？

魔力とか言うのは、ゲームのMPとかの事だろう。それが無くなったら、召喚は出来ない、と。ほんとにゲームみたいな世界なんだなあ。

「さあ、これで選択肢は出来ました。文句はありませんね？」

「え？ え？」

どうやら、ゆりは一人で置いてけぼりになってたらしい。話の意味が全く分かってない。

……しょうがない、簡単に説明してあげよう。

「つまりね、私たち二人に二つの世界の命運がかかってるってことよ」

「え？」

「私たちが帰れば、世界は両方とも滅びる。帰らなければ、世界を救う羽目になる」

「……それを今、選ぶ、の？」

こくり、と私は頷いた。ゆりはさあっと一瞬で真っ青になった。
当然だ。私だって、正直具合が悪い。

——私たちの手の中に、二つの世界の未来が託されている。

「あーもう、ごちゃごちゃうっせーなあ！」

「ジナ。まだしゃべってはいけません」

「だって、こいつらしゃべんねえだろ！ 大体、なんで勇者が二人なんだよ！」

ジナ、と呼ばれた頭の弱そうな少年。髪はつんつんしていて、うーん、なかなかの……イケメンだ。

……こんなところでカミングアウトするのも変だけど、美形の男って、なんか苦手だ。

女の子が可愛いのはぜんっぜん構わないんだけど、男となると話は別。なんだか、かつこよすぎる男って、苦手。なんか嫌。性格とか関係無しに、顔が、無理。

その、私がいかに苦手、と言うような綺麗な顔をしている男は、真っ黒の……ローブ？ らしきものを着ている。

「で、どっちが勇者なんだよ、アミラ」

「恐らく……あちらの、髪の長いほうの方でしょうね」

髪が長いほう……？ ゆりの髪は、腰近くまで伸ばされている超ロングだ。対して、私の髪は決して短くは無いものの、それは肩より五センチほど下というだけだ。ゆりほど長くない。

と、いうことは。要するに、ゆりが勇者ってことか。

「え？ 何？ 髪が長いほうが何？」

ゆりは私よりも現状がわかっていないらしい。うん、本当お前らしいよゆり。それでこそ私の親友だ。

「では、勇者様。お選びください」

「え？ ルイちゃん、どういうこと？」

「うーんと、ゆりが勇者で、ゆりが帰るか戦うか決めろ、ってこと」

「ええ！ 嘘！ ル、ルイちゃ、」

「ゆりが決めるんだよ。私は、何も言わない」

がーん、と効果音が聞こえたようだった。彼女の表情は明らかに落胆している。どうしたらいいのかわからない、と言うところだろう。

何せ、世界が今のゆりの肩に乗ってるわけだ。そりゃあ、あのゆりじゃ、悩むだろうな。というか普通の人間なら悩むだろう。

そもそも、世界のあり方を決めるなんてのが、人間のキャパシティを超えたことなのだ。決められなくて当然。でも、こんな選択肢も選べないくらいなら、勇者なんて始めからならないほうが良いと思うわけだ。

明らかに争いごとに向いていないゆりだから、勇者になるだなんて、並大抵じゃない覚悟が必要だと思う。覚悟も何も背負う事が出来ないのなら……初めから、何も背負わない方がゆりにとっても楽だろう。全部、私の自分勝手な考えだけど。

「……っ……………」

「ゆり………」

うーん、でも、なんか心配になってきた。ものすごく悩んでるけど、大丈夫かなあ、ゆり。

すると、ゆりはすつくと立ち上がった。そして震える足で、ゆつくりと歩き始める。丁度、魔道陣の一番端っこ。一番大きく描かれた円からあと一歩で出られる、というところで立ち止まって、アミラさんを見つめた。

「……どんくさいんです」

「……？」

「きつと、勇者なんて大役勤まらないし、足も引っ張ってばかりだと思っうんですけど」

ゆりは一呼吸置いて、息を飲む。そして、右足を浮かした。

——そして、彼女の足はゆつくりと地面の上に下ろされる。

彼女の靴が、円の外側で静かに鳴った。

「こんな情けない勇者ですが……これからよろしくお願いします」

一気に盛り上がるその場。

まーね。勇者が帰らないって宣言した訳だから。そりゃテンションも上がるよね。

さてさて。今度は私の番ですね。

「そうだ、ルイちゃん……！」

ゆりは円の中心を振り返る。しかし、既にその場所に私は居なかった。

私は、ゆりの隣りへと立っていたのだ。とっくに陣の内側から出ていた。ゆりが動き出したその瞬間から、私の覚悟は決まっている。

「……ここで一人だけ帰るって言ったら、私、悪魔じゃん？」

「ルイちゃん！」

かっこつけてそう言ったものの、実はそのとき、私はほんの少しだけ後悔していた。

私のこれからの人生と命をかけた厄介ごとにまきこまれてしまったと……少しだけ、後悔した。

けど、ま、例えその場のノリでも、出ちゃったもんはしゃーないよね。

もう戻れないんなら、きちんと勇者パーティの一部になってやりますよ。

DATA..002 勇者と魔王

朝日が、差し込む。

私たちがこの世界に来てから、初めて訪れた朝。そして――

「お目覚めになりましたか？」

朝目覚めた時、最初に視界に入ってきたのは、メイドさんだった。

……………は？ メイドさん？

「っ…………此処はアキバかぁ！！」

「面白い寝言ですね。では、こちらにお着替えください」

くっ、さすがプロ…………！

あの、起き抜け一発目の意味不明な言葉を、面白いの一言で済ませてしまうとは…………！ メイドさん、恐るべし…………！！

「ルイちゃん、遊んでないで早く着替えなよー」

「あれ、ゆり？ なんで此処に居るの？」

「さぁ？ おんなじ部屋で寝たんじゃないの？」

ああ、そういえば、昨日はあの後、ゆりが倒れたんだ。疲労だからなんだかで。一晚眠れば元気になるだろうって言って…………。で、私も眠かったから、同じ部屋のベッドで…………うん、思い出した。

メイドさんが用意してくれた、青いワンピースに着替える。良かったあ。なんかこの建物って豪華だから、着る物もドレスとか用意されるのかと思ってた。

んで、ゆりは…………おおっ！ ピンクのワンピース！！ 私のとは少しデザインの違う可愛いレースがついたワンピースなのけど、

そこはさすがゆり。めっちゃくちや着こなしている。

「で、何処に行くの？」

「こちらです」

答えてくれたのは、さっきのメイドさんだった。部屋のドアを開けて待つてくれている。そして、私たちの数歩先を歩いてわざわざ道案内をしてくれた。

一人で歩いたら確実に迷子になりそうなお城だ。……お城、だよ
ね？

そのお城の中を、あっちへこっちへと曲がりくねって目的地へと歩いていく。ついた場所、そこは。

「……広っ！」

「こ、ここでお食事を取るんですか？」

馬鹿みたいに広い部屋の真ん中に、ながーいテーブルがおいである。その上には、長くて広いテーブルに敷き詰められるようにして置かれているの料理。ずらーっと。

そして、そのテーブルに、一人だけ席についている人が居た。その人は、金色の髪。一度見たら忘れられないほどの、美女。

「アミラさん！」

「お目覚めのようなですね、異世界の少女のお二方」

にっこり、と彼女は笑った。

しかし、私は正直彼女の事を信用していない。むしろ、この笑顔は怪しい。昨日の経験を生かせば、彼女が笑うと大抵いやなことを言われる。

「……何か、企めます？」

「あら酷いですね。一緒にお食事をしようと思って待っていただけですよ？」

「だって、昨日の時点で貴女の腹黒さはよく分かりましたし」

「大丈夫ですよ。私は、味方には基本的に優しいですから」

「……………」

「あ、その顔は信用してませんか？」

彼女は苦笑い。あ、そういう笑い方もするんだ。

ゆりはどうやらアミラさんのことを完全に信頼しているらしく、私のほうをはらはらとした面持ちで見ている。まったく、そう簡単に信頼なんてしないほうが良いのに……。まあ、そういうところもゆりの良いところなんだけどね！

「そう言えば名前を尋ねるを忘れていましたね。お名前は何ですか？」

「ああ、そう言えば名前を言ってませんでしたねー。私は、御井優梨です！」

「るい、です」

「昨日も紹介した通り、私はアミラ。この国のお抱え召喚師、と言ったところです。よろしくお願いしますね、ミィ、ルイ」

「え、ええと、私の名前はミィじゃなくて、ゆりの方……」

「あ、可愛いね、ミィって！ 私もゆりのことミィって呼ぼうかなあ」

「……ルイちゃんがそう言うなら、まいっか」

うん、可愛い！ ミィ！ 『ゆり』て名前も似合ってたと思うけど、なんだか『ミィ』の方がしっくり来るね。やっぱり、可愛い子は可愛い名前じゃないと！

……私は『ルイ』で、まんまだけど。

「じゃあ、朝食を食べながら、これからの説明と行きましょうか？」

「あ、はい」

「そうですね、お願いします」

うんうん。まずは情報。彼女達が知ってる事は、全部話してもらおう。何をするにも、まずは情報がないと始まらないしね！

「そうですね……まず、魔王のことについて説明しましょうか」

「魔王？」

「ああ、やっぱりラスボスは魔王なんだ」

「彼の目的は、世界を滅ぼす事です」

「なんで、ですか？」

「分かりません。彼は突如現れ国を一つ滅ぼし、世界中へと宣戦布告をした。その時の魔王の言葉は彼の手下の魔物の手によって、世界中の重役へと伝えられました。」

それからです。多くの国々は、競って勇者を魔王の元へと送り出した」

「え、ちょっと待って。今、競ってって言った？　勇者ってたくさん居るの？」

「ええ。勇者になるための条件は特にありませんので。なろうと思えば、その辺の商人だってなれます」

「ちょ、それって、私たちが異世界からやってきた事そのものを否定してない?!」

「いいえ。確かに、勇者は数多く居ましたよ。しかし、誰一人として、魔王の姿を見ることさえ叶わなかった。」

そこで、私たちが住むこのフィーア国は、異世界からの勇者召喚に目をつけたのです」

「……どうして、異世界じゃなきゃ駄目なの？」

「異世界から来る人間には、皆、不思議な能力を授かるのです。相

手の心を読んだり、テレポート能力を持っていたり」

「へえ、なかなか便利」

「そこで、光属性の者を選び召喚する陣を創った。それが、昨日のアレです」

ああ、あの床にたくさん文字が書いてあった円ね。変な床に書かれた模様。

あれは光属性だけを選んで召喚する為のものだったんだあ。……って、納得できるわけなからう。

「その、属性って？ まさか、それで使える魔法が決まるとか、そういうの？」

「うーん……。そのとおりなんですが、細かく言うと違います。属性が決めるのは、職業」

「職業、ね。ますますRPGらしくなってきたねー」

「確かに、職業が決まると使える魔法も決まるので、先ほどの推論も外れていないと言えбайないんですが」

「おっけ、大分把握できた。つまり、勇者っていう職業につくには、光属性じゃなきゃ駄目なんだね？」

「はい。属性が分かると、職業が決まり、そして使える魔法も決まる、と言うことです」

ゆり……もとい、ミイは、必死にアミラさんの言葉を聞こうとしている。

どうやら、今日は会話について行けているらしい。ああ、よかったねー。昨日とか、まったく理解できてなかったのに！

「で、ミイは光属性で、勇者でしょう？ 私は？」

「ルイさんからは、赤色の波動が感じられました。恐らく赤属性でしょう」

「赤……？　へえ、赤なんてあるの？」

「ええ。光に闇、そして、青に緑に赤。これが、五大属性です」

「ふうん。で、赤属性はどんな職業になれるの？」

「……実は、赤属性はとてもまれなんです。その希少性から、なれる職業は限られてくる。」

「槍使い。または——赤魔道師。この二つのどちらかです。まあ、職業に関しては、後で資料を渡すので、其方の方もお読みになってください」

「私は、槍使いか赤魔道師になれる。」

「今のところ、第一希望は赤魔道師かな……。そりゃ、どっちかって言ったら、魔道が使える方が良いでしょう！　折角異世界に来たんだから、魔法、使ってみたいし！」

「では、説明はこのくらいでしょうか。何かわからなかったところとか、ありますか？」

「……あの、実はさっぱりだったんですけど………」

「さすが、ゆ……ミイだなあ。真面目な顔してるから分かってるのかと思ってたけど、分かってなかったんだね。昨日の話も全く分かってなかったし。なんて面倒な子なんだ！」

「結構、ミイ馬鹿だからね。でも可愛いから許す。」

「分からなければ、何度でも読んでください。何回も反復して読めば、理解できるでしょう」

「うわ、意外とスパルタだね、アミラさん」

「そうですか？　普通だと思いますけど。分からないなら、千回くらい読んでから文句を言ってください」

「いやいや。千回って、単位が違う気がするけど、それで良いのか？」

ミイは必死にアミラさんの言葉を反復している。うわ、この子ほんとにやってるよ。ミイなら、ほっといたら千回くらい本当にしそうだから怖い。

まあ、分からないなら何度も読んだほうがいいのかもしれないけど、さ。

「では、説明も済んだ事ですし、二人には紹介したい人がいるんです。あ、食べ終わりました?」

「ああ、はい」

「ふあ、ああ、はいっ!」

ミイは急いで立ち上がって、アミラさんの後ろをついていこうと足を前に出した。しかし、何故か私の視界からミイが消える。

「うひゃあ!」

そんな奇声を発しながら、床とキスをしたミイ。いったあ、なんて言いながら赤くなった鼻を押さえた。うーん、その仕草はカワイイんだけど。

ミイは、この人形のような容姿に加え、ドジっ娘でもあるのだ。歩くと転び、走ると激しく転び、飲み物を持つと約九割の確率で、私にぶっかける。そう、狙ってんのかと問いただしくなる位正確に、私にかける。

Why? 何故私?

「……ミイ。そんなにで勇者、大丈夫?」

「だ、大丈夫だよ!! ルイちゃんの意地悪!」

「いや、意地悪じゃなく、本気で……」

「大丈夫だってば! ……たぶん」

「あのね、たぶんじゃ駄目でしょ」

「むゆー……」

「そもそも、何でいきなりこけたの？」

「あ、自分の足に躓いちゃって」

「……………」

そのとき私は、確信した。

馬鹿で運動オンチな女の子に、世界の命運を託しちゃう、その理由は。

———神様が、面食いだからだ。

DATA::002 勇者と魔王（後書き）

ミイ・ユリ（御井優梨）

職業…勇者

属性…光属性

キャラ…ドジっ娘

お人形のような可愛らしい容姿を持つ。亜麻色の髪に茶色の瞳。控えめで大人しい。しかし、勉強は出来ず、なかなかのお馬鹿さん。極度の運動オンチで、歩くだけで転ぶ。モテるのに付き合ったことはない。実は好きな人が居る。

DATA..003 勇者と魔王

ドアを、見上げる。

下地は赤。

ところどころちりばめられている金。

モチーフにされ、黒で描かれた鴉。

四隅を青で飾っている花。

アミラさんが止まった場所は、なにやらもの凄く豪華そうな扉の前だった。

私たちの身長のはあるんじゃないかと言うくらい大きな扉にされている装飾。

それは、とてもじゃないが私程度じゃ価値は測れない。
が。

———なに、これ？

この扉を一言で言うならば、悪趣味の一言につきるだろう。

いや、高価な扉なのだろう、とは思うけれど。恐らく本物の金箔なのだろうとは思うけれど。

少なくとも私の趣味ではない。少なくとも一般庶民の感性には合わない。少なくとも……変。

……………お金持ちの考える事は、分からない、と言うことだろうか？

「さあ、入ってください」

アミラさんは、大きな扉を片手で開けて、私たちを先に中へと入

れた。

あ、あれ？ 重そうな扉なのに、軽々と開けた？ 意外と力持ちなのかな、アミラさんって。

そして、わくわくしながら中を覗く。扉がああ装飾だもん。部屋の中には、金持ち趣味のきんきらきんなものがいっぱいあるんだろうなって誰だって思うでしょう？

さてさて。私と皆の意識のすり合わせといきましょうか。まず私の頭に浮かんだのは、鹿の頭の剥製だ。そして、赤い絨毯。シャンデリア。

うん、こんなもんかな。私の頭で、金持ちからで連想されるのはこんなものばかりですとも。どーせ、貧乏人ですよ。貧相な発想しか出来ませんよー。

いやでも、一般庶民ってやっぱりこういうの思い浮かべると思うんだけど、どう思う？ あと、絵画とか。花瓶とか。

……とまあ、貧乏人の思考回路の話は置いて、その悪趣味な扉の部屋の話だ。

なんと、部屋の中は。

紙まみれでした。

「な、何これっ?!」

「紙がまるで雪みたーい」

ゆ、雪？

ミイ……いや、ちょっとそれは……。

確かに、ね？ 積み重なった紙は天井に届く勢いで、その天井近くのはるか頭上から紙がひらひらと落ちてくるけどね。一面真っ白で、雪景色と良い勝負だけど。

よく見て！ 本当にA4サイズの紙が雪に見える？

「……この部屋、何？」

「国王の私室です」

「ええ?! 王様の部屋? ってか、そんなとこ勝手に入っているの?」

「大丈夫だと思いますよ? ノックしても聞こえないですし」

「そ、そんな適当でいいんだ……」

いいのかなあ。一国を治める王様の部屋なのに、そんな適当で。大事な書類とか、それこそ国家秘密レベルの書類がこの部屋に置かれているかもしれないわけでしょう?

「あ、陛下。こんなところにいたんですか?」

そう言ってアミラさんが声をかけたのは、紙の山の向こう側。どうやら机らしき物の上に積みあがっている紙の、向こう側だ。私たちからは、丁度見えなくなっているところ。

「あー? アミラあ? 何で居るんだよ、お前」

「例の勇者を王に紹介しようと思ひまして」

「勇者あ? んだよ、めんどくせえ……」

「そのままの格好でいいですから、早く彼女達の前に出てください」
「つたく……」

などの会話が、ぼそぼそと聞こえてくる。

おいおい、面倒とか聞こえたぞ? 本人が居る前で面倒って、いくら王様でも許されるもんじゃないと思うよ? 失礼にもほどがあるでしょ! それでも国王か!

そして、紙の向こう側から、国王が顔を出す。なんと。

私の前に現れた国王は……少年だった。

私の視線の先よりも、下。目線の下の下。男の人が来るのだろう
と思い、自然と上がっていた視線を、自分の頭よりも下へと下ろす。
身長は、百三十か四十くらい。年齢的に、十歳……にも、まだな
ってないかも。

その男の子は、青い髪をしていた。その綺麗な髪は男としたら長
いほうに切られていて、その髪型はなんとも少年らしい。

……私の独断と偏見で言うならば、サッカー少年。野球では
なく、サッカー。ええ、私の勝手なイメージでしかないですが。

それに、なかなか可愛い顔をしている。子供だからまだギリギリ
セーフだけど、あと三年ぐらいしたら、私の苦手なカッコイイ男に
なるだろう。

「こちらが、このファイア国の国王です」

「第十三代国王………シントだ」

「今、名前省きましたね？ 自己紹介をするときは名前は省かずに、
と何度も申したでしょう」

「長いんだよ。どうせ、言ったって覚えられる訳ねえんだからいい
だろ」

生意気な口を利く奴だ。私が思ったのは、とにかくそれだった。
さっきの私たちに向かったの面倒だと言った発言もそうだし、やけ
に生意気なガキだ。

や、待て。問題はそこじゃない。違う。

こく、おう？ 王様？

この、チビが？

「王様？」

「ああ」

「子供なのにな？」

「まーな」

「まあ、いろいろと諸事情があって、こちらのシント様がこの国を治られめているのです」

「……………できればその諸事情を詳しく、一から十まで聞きたいところですけど」

「国家機密です」

いつもの笑顔でアミラさんはさらりと述べた。国家機密。へえ。ソーデスカ。

「というか……。王様って、子供でもなれるもんなんだ。この紙の山を見る限りでは、ちゃんと仕事もしてるみたいだし。そうか。子供でも……………。うん、なれる？」

「……………いまいち納得がいかないが、やっぱり、流石異世界、といったところだろうか。」

「で、お前らの名前は？」

「ルイ・千原」

「ええっと、ミイ・ユリです」

「んじゃ、話はこれだけだな？ 俺は忙しいんだ、さっさと帰ってくれ」

「……………つくづく、生意気なガキね」

「生意気で結構。これぐらい捻くれてないと国王なんて務まらないもんでね。ま、お前らみたいな一般庶民には分からないだろうが」

クソ生意気なガキだ。可愛げと言うものが何一つ無い。まったく、可愛い顔してるのに……………！

流石の温厚な私も、ガキに馬鹿にされて笑って許せるはずが無かった。…………ええ、私、温厚なんですよ？ 本当に。

さて、ミイはいええ。頭の上に「？」を浮かべている。……………

：えーと、今の会話の何処が分からなかったのかのほうが、「？」なんですけど。

どこから説明したらいいのかが分からない。お手上げだ。君の馬鹿には付き合ってられないよ、ミィ。

「あのね、あんたはその一般庶民のために……！」

生意気なガキのシントにめっちゃ怒鳴って怒ってやろうとしたのだけど、私の言葉は勢いを失った。

何か、柔らかいものを踏んでしまったのだ。こう、ぐにゃ、と。

「いってー！」

私が踏んだ何かが、そう言って飛び跳ねた。私の足の下からその柔らかい何かが引っ張られて消える。どうやら人の手だったらしい。あれ、誰の手をふんじやったの？

ミィじゃないし、アミラさんでもないし、このクソガキでもない。もしかして、この部屋にもう一人居たの？

「いってえな！ 誰だよ、踏んだの！」

「あ、ごめ、私」

「てめえ……！！！」

うー。私の苦手な、顔の良い男。そう、苦手な所ストライク。今まで出会ったことのあるイケメンの中でも、なかなかの上位に入る顔だ。

……ん？ なんか、この人見たことある気が……？

「ジナ、いたのですか？」

「アミラ？ 何でお前もいるんだ？」

「そちらの勇者のお嬢さんたちを王に紹介していたのです」
「ああ……。そうか、お前昨日の……………」

昨日……。あ、もしかして、昨日の黒いローブを着てたあの感じの悪い男？　そうか、言われてみればあの男だあ。どうりで見たことあると思った！

「で、何故ジナはこんなところに居るのでしょうか？」

「は？　ああ、えーっと、シントに呼ばれたんだよ。な、シント！」
「嘘つけ。てめえが勝手にやってきて、勝手に寝始めたんだろーが」
「ああ、裏切ったなシント！」

「はなからお前をかくまうつもりなんざねえっつの」

これまた楽しそうな会話だ。こうやってると、あの国王も普通の生意気な子供に見えるから不思議。

何でだろー？　……ああ、そうか。あのジナとか言う男が子供レベルだからだ。

「で、この女は？」

「ああ、こちらが勇者のミイさん。で、こちらがルイさん」

「初めまして、ミイです」

「……………ルイです」

「……なんか、お前愛想悪くねえ？」

「え、いや、別に」

「いや、愛想悪い。そんなんじゃ嫌われるぜ？」

ジナは、ずい、と顔を近づけた。私は反射的に身体を後ろへ後退させた。

うわ、やめてよ！　私、顔がカッコイイ男って苦手なんだから！　少し赤が混ざったような彼の茶色の髪が、つんつんと立っている。

どうやって立っているのか。重力を完全無視した髪型だ。

そして、バンダナらしきものでカチューシャのように頭を縛っている。

あれは何？ オシャレ？ オシャレなの？

そのバンダナに意味があるのやらないのやら。バンダナのお陰なのか、彼の前髪は後ろにあげられていておでこが丸見え。その所為なのか、ぱっちり目が合ってしまった。……………綺麗な茶色の瞳でした。

彼は、機嫌が悪そうな顔をしながら、私に向かって歩いてきた。それでなくても苦手な顔が、どんどんどんどん近づいてくる。

止めて欲しい。

いや、マジ、止めて欲しい。

「やー！ ちょ、顔近づけないで！」

「はあ？ なんだよ、いきなり！」

「わ、私、顔が良い男って無理なの！」

「……は？」

「とにかく無理なの！ だから来ないで！」

「はあ？ んだよそれ、変な奴。んじゃ、シントとかアミラとかは何で大丈夫なんだよ？」

「子供はある程度までなら、ギリギリセーフなの。それに、女の人大丈夫だし」

「だから、アミラは男だろ？」

……………P a r d o n ?

なんて言った？ こいつ？

ええっと、アミラさんが……男？

……はい？

男？ 嘘でしょ？

こんなに綺麗な顔で、おしとやかで……女にしか見えないよ？
嘘だ、誰か嘘だと言ってくれ。

「お、どこ？」

「ほんとですか？ えー、全然見えませんねえ」

「こら、ジナ。乙女の秘密は隠しておくものですよ？」

「誰が乙女だ。野郎の癖して」

「嘘嘘嘘！ アミラさんが男？ 嘘だー！」

「ほんとだって。ほら」

そう言って、アミラさんの綺麗な金髪を掴むジナ。

……………まさか。

止めて！ 現実なんて見たくないっ！
そんなに無理やり現実を突きつけないで！

———しかし。

スル、と効果音がついたように感じるほど、いとも簡単に彼女の
長い金髪は取れてしまった。

そう。取れてしまったのだ。

今、彼女の髪はジナの手の中に……………。

「う、嘘…………。ヅラ……………？」

「そー。な？ 男だろ？」

……………う、確かに。

髪が短くなっただけで顔のつくりはまったく変わっていないのに、

私の苦手な男へと変化したアミラさん。かの……彼の髪も、きれいな金色だ。ツラとまったく同じ髪質に思える。これこそ地毛だろう。そうであることを願う。

彼は右手で自分の額あたりをぐしゃぐしゃにしていた。先ほどまではまったくの別人に見える。まったく、といった呆れ顔だ。まあ、たぶんジナに対してだろうけど。

まったくの別人。さっきの女の人にしか見えなかったアミラさんは絶対にしないであろう表情をしている。あれ、二重人格気味だね？

うーん……。こうなってみると、もう男の人にしか見えなくなってくるから不思議だよなあ。背は高いし。まあ、女の人でも不自然じゃない程度だけど。一番気になる所の体は、実は服でまったく分からなくなっている。彼が着ている服は、召喚師の衣装なのか、だぼだぼで身体の線がさっぱり分からないのだ。

「まったく、返せ、ジナ」

「はいはい。でも、何で黙ってたんだよ？」

「……その方が楽しそうだろう？」

うっわあ、性格悪っ！

いや、アミラさんが腹黒いかも、と思ったのは今に始まった事じゃないけど……。やっぱりか、という落胆はあるよねー。

「ああ、やっぱり、腹黒かったんだ……」

「まーな。でも、知ってただろ？ お前」

「知ってたけど……。でも、男だったことにショック」

「ああ、お前顔が良い男ダメなんだっけ？ で、オレはカッコイイ？」

……。……。カッコイイとは、思うよ。思うけども。

それをそのまま伝えるほど、私は素直な奴じゃなかった。ミイなら間髪居れずに、はい、とか言うんだろうけど。私は結構捻くれ者なので、そんなことをいう気はまったく無い。

「……や、別に？」

「へえー？」

ニヤニヤ、といやーな感じで笑うアミラさん。私が本心でそう言ったわけではないことが分かっている上で、ほくそ笑んでいらしい。

なんつー性悪。もうこんなやつのこと、アミラさん、なんて二度と呼ぶもんか。

そういえばミイは驚いてるのかな、と思ったけど、平然としていた。

ええ?! 何で?

なんか普通に、「アミラさんって男の人だったんですねー」なんて言っている。

いやいやいやいや!!

可笑しいだろう! 女だと思ってた人が男だったんだよ? 普通はもっとテンパるよ?!

「で、何でアミラは女装なんてしてるの? どーやらオカマさんってわけでもないみたいだし?」

「んー、まあ……一番の理由は、オレが召喚師だからかな」

「召喚師だと女がいいの?」

「ん、まーな。他の職業は別だが、召喚師だけは女が多いんだよ。だから、女だと召喚する時の力も上がる。自己暗示みたいなもんだけどな」

「ふーん。趣味なのかと思ったのに」

「お前、それは失礼にもほどがあるぞ」

ぐっと眉間にしわがよった。綺麗な顔してるのに、そうやってるとなんだかガラが悪そうだ。ま、美人はどんな表情してても様になるから卑怯だよな。

「あー、なんか疲れた」

「驚きの連続だったもんねえ」

「そーだね。国王がこんなチビで、しかも美女だと思ってたアミラが実は男で。あとそれから、ミイの反応も疲れる」

「ええ？ ミイもー？」

ミイは本当に不思議そうに尋ねた。

そーだよ、キミだよ。紙を雪みたいって言うてみたり、謎なところで頭に『？』を浮かべてみたり、驚くべきところでまったく驚かなかったり。

うん、ミイは大物だね！

「ま、疲れたんなら部屋にでも戻ればどうだ？ もう直ぐ昼飯だしな。それまで寝てりゃ良い」

「そうさせてもらおうかなあ」

「あ、じゃあミイも一緒に戻るー」

くるりと身体を半回転させ、部屋から出ようと扉に手をかけた。

そしてふと手を止めて、この部屋の扉の装飾とお子ちゃま国王であるシントの顔を思い出す。あれだけセンスの欠片も無いデザイン
の扉……。確か、この部屋って国王の私室なんだよね？ てことは、あの扉もシントの趣味だったりするのかな？

シントって、センス良さそうな顔してるけどなあ。でも、顔で人を判断しちゃいけないってさっき学んだばかりじゃないか。よし、ここは後から驚くよりも、今尋ねておくのが賢いだろう。

「ねえシント、一つ聞いていい？」

「ん？ 何だ？」

「この部屋の扉の装飾。あれってさ、シントの趣味なの？」

「……………」

はあ、とシントは大きな溜め息をついた。これは後から聞いた話なのだが、今までに何度もその質問をされたらしいのだ。どーりでうんざりした表情だった訳だ。

そのとき、アミラとジナはなんとも可笑しそうに笑っていた。

…………だって、ねえ。シントのあの可愛い顔で、あの扉みたいなのが趣味、なんて信じられない。というか信じたくない。でも、この部屋はシントの部屋なわけだし。ありえないよね。

「…………あのな、ルイ。この部屋はな、代々国王が受け継ぐしきたりなんだ」

「へー……………」

「俺の父親でもある前王は、その際にこの部屋を改装したんだよ」

「ああ、てことは、あの扉は……………」

「前王。俺の親父の趣味だ」

……………どーやら、最後はなんの意外性もなく終わってしまったようですな、神様。

DATA..003 勇者と魔王（後書き）

アミラ

職業..召喚師

属性..光属性

キャラ..腹黒・女装

国のお抱え召喚師。召喚師としての仕事以外にも、王様の補佐役などをやっている。表向きには穏やかな性格の女として通っているが、実は性格が最悪の男。金髪碧眼の美青年。または美女。

DATA..004 勇者と魔王

「へえ。それってつまり、魔道に関する制度があるってこと？」

異世界に辿り着いたのが昨日だった事もあり、私たちは今、お昼ご飯をいただいたあと、お城の中を探検させてもらっていた。探検と言ってもあちこち歩き回って見学をしただけのようなものだったけどね。

そのときメイドさんやら護衛の人やらから話を聞いたりして、この世界観の大体のイメージをつけた。この国、フィーア国は中世のヨーロッパらへんの町並みの外観。そこに魔道やらの制度や歴史を足しているみたい。けど、城から見下ろす町並みを一見のところそれは全然分かんない。なんでも、魔道というのは使える人間がごく少数なのだそうで。

さて。そんな探検も終えて、部屋でのんびり休んでいたときのことで。突然、窓のガラスをカタカタと揺らすほどの轟音が鳴った。いや、実際に音の所為でガラスがなったのかはあやしいけどね。

「な、何この音？」

「なんだろうねー？」

私は吃驚して、急いで立ち上がり窓の外を見る。ミイは落ち着いたものだ。の、のんびりしすぎじゃない……？

この部屋は、私とミイの二人部屋として用意された部屋だ。この部屋の窓の外には、この城の広場が見える。今は何故か、その広場に大勢の人が集まっている。

青色の鎧を着た数十人ほどの男達。女の人はい居ないみたい、だな。そして次に多いのが、黒または白のローブを着た人達。えーと、さっき会ったあのジナが着ていたやつによく似ているんだけど。

あいつが着ていたやつの方が装飾が激しかったかもしれない。

ともあれ。その場所は、広場の端から端まで人で溢れ返っていた。

「？ これ……何があるの？」

「知りたい？」

そう言ったのは、アミラだった。今はヅラをつけていて、女仕様。うう、女のヴァージョンはすごく綺麗なんですけど！ 私よりも綺麗だ。や、うん………当然か。

「アミラさん。これ、何なんですか？」

「これはね、月に一度の王宮武闘大会なんです」

「ってか、もういいよ、敬語は使わなくて。本性は知ってるし」

「大会？」

「……ああ。この国の、騎士部隊vs魔道部隊。どっちが強いのか、毎月戦ってるんだ。今日は、月に一度のその日。見に行くか？」

「………どうする？ ミイ」

ミイは、好奇心に目をキラキラさせている。

……うん、答えなんて聞かなくても分かったよ。そうだね、今、暇だもんね。

熱に浮かされたような、奇妙な高揚感が会場を包んでいた。鼓膜が破れるような、たくさんの人々の雄叫び、悲鳴。私は少しだけ、ここに来たことを後悔した。

それでなくてもうるさいのに、私たちが会場についたとき、一際大きな歓声が上がった。

どうやら、ちょうど戦いが終わったらしい。

耳をふさぎたくなるような大きな音の中、私たちは少し離れた場所から戦闘を見ていた。

「あ、ほら、次はジナが出ますよ」

「ジナ？ ああ、さっき王様のところに居た、子供っぽい……」

「ええ。あんなのでも黒魔道部隊の隊長ですからね。トリですよ」

「……………え？ 隊長？」

「はい。隊長」

にっこりと、それはもう完璧な笑顔をされて、分かるかな、とでも言いたげな視線をよこされた。馬鹿にしてんのか、変態アミラ！
……………てゆーか、

「敬語じゃなくていいつつてんじゃん。気持ち悪い」

「そうはいきません。誰が聞いているか分からないので。気持ちわりーのはがまんしろ」

うっわ、二重人格。

そして、さっきのアミラの話どおり、黒いローブを着たジナがリングの上に乗った。それだけですさまじい声援が上がった。思わず耳を塞ぎたくなる。煩すぎて。

この場に居る男女比はだいたい男六、女四、ぐらいなのに、どう

聞いても男の野太い声よりも、女性の気が狂ったような黄色い声の方が多い。へえ、ジナってモテるんだ！。

そしてそして、ジナの反対側。つまりは対戦相手も、続いてリングの上へと上がる。と、これまたさっきと巻けず劣らずの声援が響いた。ジナほどじゃあ無いけど、こっちも黄色い声多し。

「騎士側は、レオンハルトのようですね」

アミラが説明してくれる。

そのレオンハルトと言う人は、騎士部隊の隊長のようで。つまり、ジナとレオンハルト。隊長対決、ということらしい。

で、彼の容姿ね。レオンハルトの方は、青い鎧を身につけ、剣を腰に差していた。決まりなのかどうなのか、兜はつけてないから、顔は見える。……………うん、アウトですね。

意志の強そうな太目の眉に瞳。唇は一文字に結んであって、いかにも硬派、というような顔だ。

……………えー、個人的な見解では。ジナよりはまし。でも、この人もカッコイイ部類に入るので苦手。ジナが苦手度85だとしたら、この人は75。ついでにアミラは90。

まあね、もっとも、アミラが90なのは、男ヴァージョンだったら、の話だけど。

「……………女なら、大丈夫なのになあ……………」

「悪かったですね、男で」

「男には……………見えないよなあ……………」

「当然です。見えないようにしてるんですから」

アミラは、にこりと笑って言う。ああ、この綺麗で邪気が全く無い笑顔が作り物なのか…………。一体、この世の何を信じたらいいのだろうか？

「レディー……ファイ!!」

そんなくだらない話をしたところ、いつの間にか、二人の戦いが始まった。ミイは、大きく手を振って、ついでにぴょんぴょん跳ねて、ジナ君頑張ってー、と叫んでいる。

ジナ君って！ 友達かよ。ついさっき知り合ったばっかなのに？
とりあえずミイは放っておいて、戦いの方に意識をやった。

私が彼らを見たとき、騎士のレオンハルトは剣を構えたところで、ジナは右手を上げたところだった。もちろん二人の距離はそこそこあるので、中距離なら魔道の方が有利。呪文を唱えたのかどうか、私の位置からは見えないけど、何か光が彼の右手から発射される。そして、レオンハルトの近くで小さな爆発。

わお、すごい、ほんとに魔法だ。

その後は、彼らの動きを目で追うことが出来なかったのだけど、多分、レオンハルトがその爆発を恐れずに前進し、ジナと接近戦に持ち込んだ、というところだと思う。煙が晴れたら何故か、彼が振り下ろした剣をジナが杖らしきもので受け止めている体勢で、膠着状態にあったから。

ジナはなんとか距離を取ろうとレオンハルトの剣を払うが、その度に彼の剣は角度を変えてジナを襲い、なんだかレオンハルトが優勢に見えた。あ、素人目だけど。

そしてそんな状況に焦りが生じたのか、ジナが杖を盾にして剣を受け止めている状態のまま、ぴたりと止まってしまった。何したんだろう、今まで忙しく動き回っていたというのに。そう思ったのは私だけではないらしく、レオンハルトも不審そうな顔をした。

それもつかの間、横顔だから良く見えないけど、ジナが笑う。多分。ニヤリと。

レオンハルトの吃驚した顔とジナの笑った顔が、閃光のような光に包まれ、爆風と共に轟音が鳴り響く。さっきと一緒だ。一番最初

の、ジナの先制攻撃。

思った通りというかなんというか、爆心地は彼らが居た場所、というかジナの手の中らしく、その辺りの地面だけが黒く焦げ付いている。

死んだのか、と私は思ったけど、レフェリー……………いや、審判の人が慌てて生死の確認したところ、命に別状はないらしい。

あからさまに、ギャラリーの女性人がほうと安心したような息をつく。でも、二人とも立てなくて試合が中止だと告げられると、残念そうな声をあげる。忙しい人たちだ。

「……アミラ、」

私は爆心地に目をやったまま、その人の名前を呼んだ。

「はい？」

「魔道って、どうすればできるの？」

「……え？」

「魔道って、すごいね！ カッコイイ！」

と、まあ、すっかり魔道の魅力の虜になってしまつて。魔道カッコイイ！ 魔道最高！ としきりにアミラ相手に叫んでいた。

私の、今までに無いミーハー的なハイテンションに、最初はアミラも驚いていたようだけど、次第に慣れたようで、面白いものを見るような目で私を見出した。

「魔道ってどうすれば使えるようになるのっ？」

私とそのミョーに高いテンションのまま、アミラに尋ねたところ、かの……………いやいや、彼はふわりと微笑んだ。すっごく優しい、慈愛に満ちた表情で。

「……………ええ、正直に言いましょう。少し、ドキッしました。だって、だってね！今はすごい美女だし、あんな微笑み、性別問わず、誰だってドキリと思うんだよ！」

「……………どうやら、職業は決まったようですね」

「……………へ？」

「魔道を使うには、魔道を使える職業に就く必要がありますから。槍使いは魔道を使えない。となると……………」

「赤魔道師しか無い、てことね？」

「そういうことです」

赤魔道師という職業がどういうものか、私にはさっぱりだ。でも、赤魔道師になると、魔道が使えるらしいのだ。私が魔法使いとか魔道師とか、そう言うのと全く縁の無い、科学の世界の住人であるにも関わらず。そりゃあ、当然、一つ返事でオッケー出すに決まってるじゃん？

「では、ルイさんの職業も決まった所で……………」

「ん、何？」

アミラは、にっこりと笑った。さっきの微笑みとは違う。

……………嗚呼、黒い。どす黒いオーラが何故か見えるようだよ、

アミラ。

「雑用でもやってもらいましょうか」

……………はあ？

DATA..005 勇者と魔王

「ふーん、その子のお守りが雑用？」

アミラから雑用をしろと命令をされて、問答無用で連れてこられたシントの部屋。

嗚呼、一日のうちに二回もこの悪趣味な扉を見る羽目になるなんて、誰が思っただろうか？

そして、中に入った途端、シントが迷惑そうな顔をした。

……………何だよ。こっちだって好きで来たんじゃないよ。

アミラに行けって言われて、無理やり連れてこられたんだよ。

そういう顔するなよ。…………ちよっと落ち込むから。

すると、後から入ってきたアミラが、シントに事情を説明する。

彼の表情は、すぐに迷惑そうな顔から納得したような顔に移り変わった。

…………ん？ 納得？ 何を？

シントが、なにやら後ろに向かって一言二言話し掛けた。

あれ、誰か居るの？

と、思ったのもつかの間。

すぐに、後ろから子供が現れた。

黒い髪に黒い瞳の男の子だ。

そして、マントらしきものを着ている。

まだまだ幼い。シントよりも年下なのは確かだ。

六歳くらいか、それよりも下だろう。

その男の子は、可愛い顔をしている。

いや、子供だから、私はセーフだけど。

苦手では、無いけど。

「その子のお守りが雑用？」

「いや。そんな簡単な話じゃねーんだ」

「簡単じゃない？ ……まさか、その子、訳あり、とか？」

「まあな」

さて。ミイは、たとえば。

ずうっと私の隣りに居るんだけど、一言も喋らない。

……？ 何したの？

「あの！」

ミイが、シントの言葉を割って、真剣な顔で大きな声を出した。

……どうしたの？

なんか、すごく深刻そうだけど。

「その子……名前は、なんて言うんですか？」

ミイは尋ねた。

それ、シントの説明を中断させてまで、今どうしても訊かなくちゃいけないこと？

君は空気を読む能力も無いのか。

「……分かん」

「え？」

「実は、その事も含めて、そいつは訳ありなんだ」

「どういうことですか？」

「実はな、つい先日、この国の貧困街の路上に住む子供たちを保護したんだ。

こいつも、その際に保護した子供の一人。まあ、それだけなら別に良かったんだが……。

たまたま其処に居合わせた神官の一人がな、こいつはこの世界の人間じゃない、って言ったんだ。

で、ちよつと確認してみたら、確かにこいつはこの世界の人間じゃなかった」

「……………ちよ、ちよつと待って下さい……。『この世界の人間じゃない』？」

「まあ、お前らと一緒にってことだ。異世界人、てとこだな」

「ああ、なるほど」

……発見。どうやら、シントは説明が上手らしい。

あのミイにも分かるような説明なんて、なかなかできるもんじゃない。

シント、やはり国王なだけある。

……………説明の腕なんて、役に立ちそうで立たない気もするが。

「で、そこで。俺たちが立てた推論。こいつは、別の国の勇者召喚システムによって召喚された子供だと仮定を立てた。

そして、勇者召喚が出来るほど魔道の技術が進んでいて、尚且つ勇者召喚に興味を持っている国を調べた結果、隣国のリン・マカの可能性が非常に高いという結論に達したというわけだ」

「はい」

「…………で、それを私たちにどうしろと？」

「本当にリン・マカの召喚した勇者なのかどうか、リン・マカへ行ってきた確かめて欲しい」

「それは、なんで私たちが？」

「人手が足りない」

ばさり、とシントは言い放った。

はつきり言うなあ。

「それに、勇者として旅をするのも悪くないだろう。

いつまでも城でだらけてたんじゃ、召喚した意味が無い。お前らは強くなってもらわなきゃならん」

「まあ、それは私も思ってたけど」

「そういうわけだ」

シントは、手に持った資料を机の上へ置き、部屋の中央にあるデスクワーク用の机と椅子へと近づく。

そして、当然のように机の両脇に紙の束がどどーんと積み重なっている間から、シントは顔を出した。

私たちからは、なんとか顔が見えている状態だ。

何せ、紙の量が半端無い。

そして、シントは改まったように私たちに向き直った。

「さて。此処まで説明をしておいてなんだが、お前達には確かめておかなきゃならないことがある」

「確かめる事、ですか？」

ミイは、不思議そうに尋ねた。

もちろん、私もこの彼のセリフに何の疑問も持たなかったわけではない。

私は黙ってシントの次の言葉を待った。

「この国から一步出れば、魔物、魔族がうじゃうじゃいる。当然、隣国へ行く為には戦闘も必要になるだろう。

その戦闘の際に命を落とす可能性だってある。

だから、お前達の意志を訊いておく必要があるんだ」

「……………」

「お前らは、この世界の為に死ねるか？」

シントの声には、力があつた。

そして、ぎらりと光るような目力。

さすが一国を治めているだけある、と思った。

そうか、こんな少年でも国王なのだ。

威厳がある姿くらい出来なくてはいけない。

「わ、私は、あの時言いました」

ミイが、震える声で言った。

そうだね、ミイは、こういう風に自分の意見を主張するの、苦手だったね。

「足を引っ張るかもしれないけど、よろしく願います、って……」

其処まで言ったからには、無責任なことは出来ません。

死ぬ可能性があっても、私はこの世界の為に戦います。

私を必要としてくれる限り、この世界で戦いつづけると誓いますっ！」

ミイは、言い切った。

うん。頑張ったよ、ミイ。

あんた、ほんとにこういうの苦手だもんね。

昔から他の人の前に立つだけで可哀想なくらい震えてて。

そうだね、良く言い切ったよ。あんたは、ほんとに、凄いよ。

「……ルイは、どうなんだ？」

「右に同じよ。」

私もね、あの円の外に出たときに腹括はらくったの。

一度決めた事くらい、最後までやり通せる。

……この世界の為に死ぬ気は無いけど、自分の誓いを守るために死ぬ覚悟ならあるわ」

私も言い切った。

ミイは、「ルイちゃんかっこいい……」と小さな声で呟いた。

うん、ミイ。私は何て君に返したらいいんだい？

「よし、確認は済んだな。では、さっそく出かけてもらう」

「ちょ、待ってよ。もしかして、私とミイの二人で行けとか、そういう無謀なこと言っちゃう？」

「流石の俺も其処まで無謀なことは言わない。せつかく呼んだ勇者を見殺しにするようなまねするか」

「あ、そう」

「今のこの国で最高の戦力。ジナとレオンハルトに同行してもらう」

「ああ、あの二人ですか！」

ミイは嬉しそうに言った。

……もしかして、知り合いになったの？ 何時の間に？

私も、一応誰かは分かるけど。

魔道部隊の隊長と、騎士部隊の隊長。

ついさっき戦っていた、あの二人だ。

「あいつらにはさっき説明をしておいた。もうすぐ来るだろ。来た

ら、さっさと行け。以上!」

「……うわ、そこはてきとーなんだ」

「ああ、そうだ。城の外に出るんなら、ルイのその髪は染めた方が
良いな」

「へ? なんで?」

「黒の髪と瞳は、凶事の前触れとされているんだ。快く思う奴はま
ずいない」

「ああ、そうなんだ……」

「アミラ、ルイとあのガキの髪と眼の色を染める手配をしとけ」
「はい」

今まで、ずうっと無言だったアミラが始めて喋った。

ああ、そういえばずっと居たんだよ? アミラ。

シントの後ろに、控えてたの。存在感全く無かったけど。

そうそう、ミイの髪と瞳は結構日本人離れしてて、亜麻色の髪に茶
色の瞳。

なんか、外国人の血が混ざってるとかいけないとか。

そして私は、髪を染める為に、この悪趣味な扉を開けた。

とまあ、そんなこんなで、私たちの初めての勇者としての旅は、も
うすぐ始まるうとしていたのです。

DATA::006 勇者と魔王

「だからあ、お前名前なんだよ?」

「……（無言）」

「てめえ、何時まで無視しつづけるつもりだっ!!」

「……（無言 視線を逸らす）」

「目くらい合わせろや!」

「……（無言 それでも目を合わせず 失笑）」

「このクソガキイ!! つか、失笑ってなんだ、失笑って!」

「ま、待って待ってジナ君! 相手は子供だよ!」

「だったら、こいつどうすんだよ!」

「私に任せて! これでも、結構子供には好かれるんだから!」

「じゃあ、任せるぞ?」

「うん! ……ねえ、君、お名前は?」

「……黙れブス」

「……………」

「……………ガキの言葉にマジ泣きしてんじゃねーよ」

扉を開けたら、そこは未知の世界でした。

———何やってんだ、こいつら。

ジナにミイにレオンハルト。

この三人が、すこし豪華な部屋でどんちゃん騒ぎをしている。

いや、主に騒いでいるのはジナだけ。

レオンハルトなんか、椅子に座ってピクリとも動かない。

……おい、生きてるかー？

「何、やってんの？」

とりあえず、聞いておいてあげよう。

部屋に入っても気付かれないから、気付いて欲しくて少し大きめに声を出す。

すると、騒いでいたジナもミィも、レオンハルトも、私の方を見てくれた。

「あ、ルイちゃん！」

「うわ、髪すげー」

「ほんとだよな。何も、こんな鮮やかな赤に染めなくても……」

「いいんじゃない？ 似合ってるし、その赤毛」

「ありがと。それより、何騒いでたの？」

「それがね、隣国にこの男の子も連れて行って言われたから、親睦を深めようと思って、皆でゲームしようと思ったの」

「そしたら、このクソガキは名前を教えねーわ、クソ生意気だわで、人悶着あったわけだ」

なるほどなるほど。

大体分かったぞ。

うん、つまり、この男の子が名前を教えたくないからキレてるわけだね？

「そーなんだ。ねえ、それってさ、この男の子が名前を教えてくれれば万事解決？」

「まあ、そうだねえ」

ミイは笑顔で頷いた。

うーん、ミイにも教えてくれなかったのに、私に教えてくれるとは思えないけど。

一応、もいっかい訊いとくか。

「ねえ、君」

「……」

「私は、ルイ。君の名前は、なんて言うの？」

「……………マ……………オ……………」

「マオ？」

その男の子は、控えめに頷いた。

そうか、マオって言うのか。

マオって言うんだってよ、とジナとミイに伝えようとしたら、二人はもの凄く吃驚した顔で此方を見ていた。

その二人の顔に私が吃驚したほど、その二人の顔は強烈だった。

「私たち、ずうっと名前を訊いてたんだよ？」

「なんでお前には一回訊いただけで答えるんだよ!!」

「……………知らないよ」

何故かヒートアップする二人。

嗚呼、よっぽど大変だったんだろうなあ。

「ルイちゃん、すごい！ 凄い凄い凄い！」

そんな興奮する事でもないと思いますが。

「凄いよ！ ねえ、ジナ君！」

頬を少し赤らめて、にっこり笑ったミイ。

当然、頬が赤らんでいるのは、凄いと叫んで興奮してたからなんだけど、ジナはそんなミィを直視してしまい。

ボン、と効果音がつくくらい勢いよく顔が朱に染まったジナ。

ジナは ミィに 一目惚れを した！

そんな説明文がつきそうな状況だ。
分かりやすっ！

「……んじゃー、まあ、改めまして。ルイ・チハラ。職業は赤魔道師（見習い）」

「ミィ・ユリです！職業は勇者（仮）です！」
いや、あんたは正真正銘勇者だから。

「俺は、ジナ・ルグ。役職は黒魔道部隊隊長。職業は黒魔道師。得意技は爆発^{ダムラ}」

「自分は、レオンハルト・サーディルグ。王宮の騎士部隊隊長をやっています。職業は騎士です」

「…………マオ」

「よし、それじゃ、パーティーも全員揃った所で」

ミイは歩き出した。

……なんか、嫌な予感。

「しゅっぱ、うひゃあ!!」

歩き出してすぐ、彼女は何かもないところで滑って転んだ。

………何故、そんなに器用に転べるんだ？

お約束なやつだなあ。

DATA..007 勇者と魔王

わいわいと騒ぐ城下町。

とても魔王の手によって世界の危機に瀕しているとは思えない。

いや、国民がこんなに平和な頭をしているのも今までのこの国が平和だったという証拠なわけだから、良いこと、なのか？

商人たちの怒号が飛び交う商店街の中を、私たちは歩いていった。

「……フィア国って、大きいの？」

「いえ。土地自体はそこまで広くはありません。隣国へ行くまでの荒野もさほどありませんし、直ぐにリン・マカ国へは行けるでしょう」

私はレオンハルトにこの世界の話聞いていた。

ちょっと失礼だけど、顔はあんまり見ないようにしながら。

……しょうがないじゃん！ レオンハルトの顔、カッコイイから苦手なんだって！

ちなみに、顔さえ見なければ、会話ぐらいは出来ます。

ミイとジナは商店街のものを見て廻っている。

……ちよろちよろと動いているので、ミイが転んだりはぐれたりしないか凄く心配だけど。

そして、マオという名前の男の子は、子供なのに好奇心と言うものがミイよりも無く、私の隣りを物静かに歩いていた。

といっても、はぐれてしまいうさななので、私はマオ君と手を繋いでいる。

マオ君も髪と目の色を変えていて、暗い感じの茶色にしている。うん、結構似合ってると思うよ？

「荒野？」

「何処の国にも属していない土地の事です。だいたいそういう場所は荒れ果てているので、こう呼ばれています。」

「荒野は魔物・魔族の巣ですから、国と国を行き来するのは大変なんです」

「ああ、そうなんだ。ところで、その魔物と魔族って？」

「魔道が世界で完成するまでの過程で生まれてしまった、魔道を使う生き物のことです。」

「彼らはだいたい好戦的で、人類を攻撃することを本能として持っています。」

「その中で人型で知能の高い奴らを魔族、それ以外の獣型の奴らを魔物と呼んでいます」

「なるほどね。人類を攻撃する事が本能なら、永遠に人とは相容れないってことか……」

「はい。ただ、魔物は知能も低く一目で異形の生物とわかるので、それほど面倒ではないのですが。」

「気をつけるべきなのは、魔族です。」

「彼らは知能も高く、一目では人と区別が付きません。よって、魔族はとても危険なのです。」

「まあ、その分魔物よりも数自体は少ないようなのですが。自分も実際に会ったことはありません」

「なるほどね」

「やっと、この世界の片鱗が見えてきた気がする。」

そんな存在があるから、世界の危機、なんて言ってるわけか。

「んじゃ、その魔物と魔族を統べるのが魔王？」

「その通りです」

「そいつを倒すのが、私たちの最終目的だよね？」

「勇者は皆、魔王を倒そうとしているようですね」

なるほどね。

私たち、……というか、勇者のミィのこれからのことは大体理解できました。

大まかな着地点は分かったから、次は目先の事だ。

「それじゃあ、もう一つ。今、私たちは何処に向かってて、どうやってリン・マカに行くの？」

「今向かっているのは、農家の家です」

「農家？　なんで？」

「農家と言うのは、何処も貧しいのです。

だから少しでも稼ごうと、物価の高いリン・マカに直接売りに行こうとする。

しかし、農家に戦力あるわけが無く、食材を持って荒野を抜けることは不可能なのです。

だから、大概は護衛を雇う」

「分かった！　つまり、ただで護衛をしてあげるから、リン・マカまで連れてって、て交渉するのね？」

「その通りです。そうすれば、お金も節約できますから」

「ああ、そうなんだ！　レオンハルト、頭いいね！」

「言うほど良くはありません」

いやあ、謙虚で真面目で、レオンハルトはいい奴だね。
顔さえ見なければ。

だってこいつ、かっこいいんだもん。

「で、その農家まではあとどれぐらい？」

「もうすぐ着くはずです」

で、結局。

ミイが転んだり、ミイがはぐれたり、ミイが激しく転んだり。

さまざまなハプニングがあったため、その農家の家へついたのは大分日が傾いてからだった。

「え、本当にただでいいんですか？」

「ええ」

「本当に、本当にありがとうございます！　それで、帰りの方は……？」

「多分、リン・マカにはしばらく滞在するつもりです。そちらが急ぎで早く帰りたいのなら、先に帰っても……」

「いえいえいえ！　来年の種まきの時期までに帰ってこれたら、それだけで大丈夫です！」

「そんなにはかからないとは思いますが……」

「いや、ほんとにほんとに！！　ありがとうございます！！」

よく分からない感謝の言葉を精一杯叫ぶ、おじさん。

どうやら、明日出発するらしく、今日はうちの家に泊まってください、と言ってくれた。

まあ、此処は素直に好意に甘えて泊まる事になり、何故か凄く広い家に招待された。

農家の家が広いのには、なんかすごく長い歴史があるらしい。面倒だったから聞かなかったけど。

「いやあ、これでリン・マカまでの足は確保したな!」

「そうですねえ。商店街も楽しかったですし!」

「……商店街は関係無いけどね」

「そうだ、凄いんだよ、ルイちゃん! ジナ君ね、何でも知ってるんだよ!」

「なっ! ベ、別にお前に教えてやったわけじゃねーし!」

……ジナは馬鹿か?

こいつは天邪鬼なのか?

ミイと二人でいたんだから、ミイに教えてたんだろーが。

「ジナってさあ、」

「なんだよ。つか、お前勝手に呼び捨てにしてんじゃねーよ!」

「馬鹿だよな」

「はあ?! なんだよ! いきなり人をバカ呼ばわりかよ!」

「好きな子にくらい、素直になっただけなのに」

「!?!?!? おまつ……そんな、……はあ!?!」

私も吃驚するくらい動揺しているジナ。

うわあ、ほんとにびっくりしてる。

「まあ、私は何もしないけど応援はしてるよ。多分」

「嘘つけ」

「嘘じゃないよ。本当じゃないけど」

「どっちだよ」

とりあえずジナのことは放っておく。

マオ君とレオンハルトは静かに座っている。

隣りに座っているのは、間違いなく偶然だろう。

無表情でミィと私とジナのやりとりを見ている。

と、私はふと思った事を口にしてみた。

「……レオンハルトって、名前、長いよね」

「そうかな？ たしかに、私やルイちゃんと比べると長いと思うけど……」

「だって、此処に居るの、『ルイ』に『ミィ』に『ジナ』に『マオ』だよ？ 『レオンハルト』って長くない？」

「……………確かに」

私たちの名前が短いだけだと思うけど、とかいうミィの珍しい正論は聞こえませんでした。

ミィにつっこまれるなんて、私のプライドが許さない。

「じゃー、短くして、レオ？」

「いや、レオって顔じゃないよ。せめてレオンかな」

「おお、それいいな！ じゃ、今度からレオンな！」

当の本人である彼は、きょんとしていて何も言わない。

ついでにマオ君も何も言わない。

「分かったのか？！ レオン！」

ジナは怒鳴るようにして、レオンに顔を近づける。
それでも尚レオンはきょんとしている。

突然自分の話題になって、ついていけないのだろう。

それでも、ジナの迫力に押されて、レオンは戸惑ったまま、小さく言葉を返した。

「……あ、ああ」

「よし！」

うん、どうやら意外にもジナとレオンはなかなか上手くやっているようだ。

よかったよかった。

全く違うタイプの二人だから、どうなるんだろうって思ってたんだよね。

一緒に旅する訳だし、気まずいのはちよつとあれだし、ね。

すると、ジナとレオンとミイはなんだか意気投合し、話を始めた。

私は自然と元のレオンが居た場所へ座る事になり、つまりはマオ君の隣りに座る事になった。

「ねえ、マオ君」

「何？」

「ええっと、言いづらいならいいんだけど、君、自分が人間以外だっという自覚……あった？」

「……………あった」

「え、あったの？」

こくり、と頷くマオ君。

どうやらあったらしい。

……どんな気持ちなんだろう。

自分が人間じゃないなんて分かって、一体どんな気持ちだったんだろう？

「それは……えーと、いつから？」

「覚えてない、けど。気が付いたらあの場所に居て、自分は人間じゃ無いって思ってた」

「そっか……記憶が無いのかな？」

「多分」

気が付いたらあの場所に？

あの場所、というのはマオ君が見つかった貧困街なんだろうけど、何故居たのかが分からない。

どうやら貧困街という場所は、上京して失敗した人たちの溜まり場ということだったので、さまざまな人たちが居るらしい。

育てられなくなった子供を捨てる親も少なくないとか。

だったら……あんまり考えたくないけど、マオ君が人間じゃないと気付いた親が捨てた、とか。

そんな過去が、もしかしたらあるの、かも。

「そっかぁ。いろいろ大変だね、マオ君も」

「そんな事無いぜ。何も覚えてないぶん、気が楽だし。大変なのは、ルイの方だろ？」

「え？」

「勇者でもないのに、こんな戦いに巻き込まれて、大変そうだな」

「……うーん、確かに、大変だけど。ミイ一人に任せておく方が心配かも」

「何で？」

「だって、なんか目を離せないじゃん？ ミイに任せると、絶対なにかあるし」

「……ルイは、あいつの保護者？」

「似たようなもんだねー。でも、嫌だとは思った事無いよ。私、結構面倒見るのとか好きなのかも」

にこ、と私は笑いながら喋る。

マオ君も楽しそうに話をしてくれる。

それにしても、マオ君はなんて大人なんだ。

覚えてないぶん気が楽、とか子供が言うセリフじゃないぞ。

やっぱり、子供ながらにいろいろと大変な思いをしたんだろうなあ。

「なあ、ルイ」

「何？」

「ルイは、この世界に來た事を後悔してるか？」

「え？ ……んー、別に、後悔はしてない、かな。多分」

「……そうか」

マオ君は、嬉しそうに笑った。

ああ、こんな表情はなんだか年相応に見えるな。

この表情、なんか……好きかも。

あまりにも嬉しそうにマオ君は笑うから、私も嬉しくなってきた。

私もマオ君と一緒に笑いあった。

すると、マオ君は私の腕に抱きついてきてくれた。

突然のことに私は受身を取れず、座っていたベッドから落ちるよう
にして、マオ君もろともジナの上に乗った。

しんと静まり返る部屋。

笑っていたミイも、吃驚した顔で固まった。

あのレオンでさえも、驚いている。

すると、私の下でジナが何かうめいた。

「……てめえら………」

「ご、ごめん」

「いいからどけ！ 重い！」

「ちょっ！ 女の子に向かって重いはない！」

「だったら俺の上に降ってくんじゃねー！」

「……ゴモットモ德斯」

「ルイは悪くねーよ、馬鹿。俺が押したんだ」

「てめえか、クソガキっ！ つっ！か、ガキにバカ呼ばわりされたくねー！」

マオ君に掴みかかるジナ。

「いやいやいや！ 相手子供だから！」

マオ君も、平然とジナを挑発している。

「いやいやいや！ あんたも、そこは怖がるどころだから！」

「ちょっと、止めなよ、二人とも！」

「ミィ、勇者だね。あの中に入っていくなんて。私には無理だよ」

「だったらどうしたらいいの？」

うーん、ととりあえず唸ってみる。

完全に口で負けているジナ。殴ってはないが、青筋が立っている。

大分興奮してきたらしいマオ君。声を大きくして、ジナを挑発している。

結構、二人とも喧嘩モードに突入している。

これを止めるのは、困難を極めるだろう。

あー、めんどくせ。

「あ、レオンに止めてもらうとか？」

「それは名案！ レオンさん！」

ミイがくるりと振り返って、彼に声をかける。
そして、肝心の彼はといえば。

なにやら、ミイの鞆を真剣に見ている。

何、その今までに無いくらいの思いつめた表情。

「レ、レオンさん……?」

「何したの?」

「あ、いや!」

「ん、くま?」

どうやら、彼が見ていたのはミイの鞆についている、マスコットのくまだった。

……私は詳しく知らないが、こっちの世界の、有名なブランドらしい。

〈BEAR's DOLL〉と言う、なんの捻りも無いブランド名で、ミイが大変気に入っている。

いろんな色の可愛いデザインのティディベアから始まり、服からお菓子まで、さまざまな物に出している会社で、可愛いデザインが、若い女性に人気らしい。

可愛いと思うが、ちょっと可愛らしすぎるかな、と思うので、私はあまり持っていない。

で、その有名ブランドのくまに、興味を持ったらしいレオン。

……え? 何か違和感が。

「レオンさん、ピンクベア、興味あるんですか?」

「……大変愛らしい装飾だと思います」

「ええっと、レオンって、こういう可愛い系のもの、好きなの?」

「惹かれるものはあると思います」

「……」

「そうなんですか？ 可愛いですよ、〈BEAR's DOLL〉のピンクベア！」

「はい。個人的には、ベビーも……」

「ああ、分かります！ ラブリーシリーズ、知ってますか？ すごく良いですよ！」

ついていけない。

何の話だ。

嗚呼、まさかレオンが〈BEAR's DOLL〉みたいな、甘甘のラブリー系が好きだったなんて。意外だ。

「てめえ、ふざけんなよ！」

「黙れ、さわんじゃねえ、低脳！！」

「来月、デイベアのエンジェルヴァージョンが発売するらしいんです！」

「しかし、先月、ホワイトヴァージョンが公開されたばかりで……」

「……………」

つかみ合って喧嘩をしているジナにマオ君。

〈BEAR's DOLL〉について、熱く語りあっている、レオンにミィ。

そして、その様子を遠くから眺めているだけの私。

時計を見れば、もうすぐ12時をまわる、と言うところだった。

「うん、そうだ。寝よう」

収拾をつけるのが面倒……いやいや、疲れてしまったので、私は四人を無視して、布団へと潜り込んだ。

DATA::007 勇者と魔王（後書き）

レオンハルト・サーデイルグ

職業…騎士

属性…青属性

キャラ…寡黙

真面目。謹厳実直を形にしたような人。国の騎士部隊の隊長をやっている。意志の強そうな濃い青の瞳に鈍い金の髪。苦手度75。こう見えて可愛いものが大好き。

DATA..008 勇者と魔王

ガタタン、ゴトトン

不規則に揺れる、馬車。

とはいっても、馬がひいているだけでオシャレなものではなく、乗っているのは野菜と私たちだけ。

しかし、農民は貧しいと聞いていたわりに、なかなか大きい荷車だ。隣りに置いてある野菜もつやつやでおいしそうだし、この人たちは農民の中でもお金持ちな方なのかもしれない。

すると、右手をぎゅっと握られた。

マオ君は私の隣りで楽しそう……嬉しそう？ に私の腕にしがみついていた。

遠出が嬉しいのかな？

そして私の後ろでは、ミイが持って来ていた、
〈BEAR'S DOLL〉のカタログを広げてレオンとミイが話をしている。

いやあ、楽しそうだ。

そして、その隣りでは。

不機嫌オーラを漂わせている、ジナ。

言っておくが、誰も何もしていない。

マオ君も何もしていないし、誰と喧嘩をしたというわけでもない。

ミイがレオンと仲が良いから……というわけでもないらしい。

彼は、眠いのだ。

今日の朝は早くからの出発で、なかなか起きないジナを叩き起こした。

それから、ずっとこの調子だ。

どうしたら良いのかと少し相談もしたりしたが、レオンが放っておいても大丈夫だと言っていたので、只今放っておいてる最中だ。なにやら、ジナは極度の低血圧らしく。朝にもものすごく弱いらしいのだ。

「ねえ、ジナ」

「……………んだよ」

ものすつごく不機嫌だ。

いつもよりも一オクターブくらい声が低くなっている。

いや、これで話し掛けたら機嫌が更に悪くなるだけではないのだろうか。

そう思ったが、一応一言といっておく事にした。

「もうすぐ昼回るんだけど」

「……………だからなんだつつんだよ」

「いや、いつまで機嫌悪いのかな、て」

「……………関係ねえだろうが、てめえなんかに」

そのジナの言葉に、マオ君が何か言おうとしたけど、私はそれを片手で制止した。

この二人が話をすると、喧嘩になる。

それに、今はジナの機嫌が最悪だ。

喧嘩してどうなるのか、なんて考えたくない。

「ごめん、ジナ」

苦笑いみたいな、ちょっと綺麗じゃない笑顔で言ったら、ジナはますます機嫌を悪くした。

それが分かったから、もう何も言うまいと心に決め、前を向く。
すると、今度はジナのほうから話し掛けてきた。

「お前、本当にむかつくな」

「え？」

「そうやって、自分は心配してますってアピールして、それで満足かよ？」

「……？ いや、そんなつもりは……」

「それで、自分の立場が悪くなったら、被害者ぶって謝る。――――
――最低だな」

あまりにもジナの言葉に迫力があつたため、私は何もいえなかった。
突然の事だったので、吃驚していたのも、理由の一つかもしれない。
けれど、マオ君は流石にキレたらしく、何かを言おうとした。
が、丁度口を開いた瞬間、馬をひいていた筈のおじさんが顔を出した。

「今日中に荒野を抜けるのは無理そうですから、この村に泊まりましょう」

のほほん、と告げられた。

勢いを失ったマオ君は、結局何も言うことなくジナを睨んだ。

ジナはいまだ機嫌が悪そうに、マオ君を睨んだ。

二人の睨み合いがすこし続いた後、荷車はぴたりと止まる。

ジナは最後にきつく睨んだ後、軽やかに荷車から降りた。

「……ルイ、」

「何？」

マオ君は、ジナが去った場所を睨んだまま、私の名前を呼ぶ。

「あんな奴の言う事、気にするなよ」

「え？」

「あんなの、ただの八つ当たりにすぎねえからな。気にするだけ無駄だ」

「ああ、うん。そうだね。ありがとう、マオ君」

「……………それから、もう一つ」

「うん？」

「俺のこと、マオでいいから」

……………どこから、そんな話題が出てきたのだろうか。

突拍子も無い言葉に、私は少し戸惑いを覚えたが、それでも笑顔でうん、と言っておいた。

それに満足したのか、マオく…………マオは、満面の笑みで私を見た。

今日泊まる宿屋は、既に農家のおじさんが手配してたらしく、小さな木造の家に泊まる事になった。

おじさんが荷車と馬を宿屋の横にとめて、私たちは全員揃って中へ入った。

中に入ってみると、外の見た目ほど悪い宿屋じゃないみたいだった。置物なんかも気を使っているみたいで、小さな安物ながらもセンスが良い。

此処に一晚だったら、なかなか良い気分になれるだろう。

「じゃあ、部屋は一人部屋しか空いてないみたいなので。それでも

良いでしょうか？」

「マジ?! ラッキー! 一人部屋だぜい!」

はい、ありがとうございます、と礼儀正しく返したのは私。
無礼に叫んでいたのはジナ。

ミイもレオンも、軽く頭を下げていた。

もうすっかり覚醒したらしいジナ。

あの時の機嫌の悪さは何処へいったやら。

さっきの私への暴言は覚えているのか居ないのか。さっぱり記憶にない、ても考えられる。

あまりにもさっきと変わりすぎてるから。

そして、おじさんから告げられた衝撃の一言。

「ああ、此処、食事は当番制なんですよ」

なにい!

「え、じゃあ、私たちが作るんですか?」

「はい。そういうことになりますかねえ」

……………と、いうことで。

おじさんが料理なんて全く出来ないということ。
私たち五人で作る事になりました。

We are cooking a lunch.

訳…私たちは昼食を作っています。

今の状況を英語で言うところこんな感じ。
中学校で習う文章だ。

何故、行き成り英語なんか使ったのか。

それは、私の気分、の一言で済ませておこう。

「ちょっと待って。この五人で料理なんてできるの？」

「大丈夫だよ！ 五人も居るんだし！」

「いや、むしろ五人だから心配……」

できれば、ミイには何もしてもらわなくて良い。
端っこの方で座っててもらって全然大丈夫です。

当然のごとく、ドジっ娘のミイは、皿を洗えば半分は割るし、
味付けをすれば塩と砂糖を間違える。

こんなコントみたいな奴に、料理を任せられる訳がない。

「ねえ、この中で料理できる人って居るの？」

「この料理の達人を前にそういう事言うのか？」

そう答えたのは、意外にもジナだった。

ええ、料理の達人？ 嘘でしょ？

だって、なんか作るもの全部が真っ黒になってそう。

と、思ったのも最初だけ。

ジナの包丁捌きを一目見れば、おお、と思わず感歎の声をあげていた。

ストトトト、と綺麗に食材を切っていくジナ。

その後の動きも、とても素人のものには見えない。

おお、意外な特技だ。

結局、ほとんどジナが料理をしていた。

私は、この世界の食材の事がさっぱり分からないので鍋の火加減を見たりしていたし、レオンは皿洗いに始終専念していた。

ミイは、三枚皿を割ったところで私がストップを出し、マオと遊ばせておいた。

「料理は爆発だー！」

とか何とかジナは言ってたけど、爆発なんて一つも起こらず、美味しそうな昼食が出来上がった。

うん、ほんとに美味しそうだ。

みんなと一緒に食べたけど、ほんとに美味しかった。

私はこの世界の料理の料理について全く知らないけど、それでもジナの腕がなかなかだという事は、よく分かった。

そして。

夜になるまで、私たちは思い思いに時を過ごした。

夕食もジナが作り、私たちは満腹になり、自分の部屋へと行った。

マオは一人が嫌なのか私と寝たいと言っていたが、結局、何故かジナの部屋で寝ることになった。

私も、すっかり気を抜いて、布団へと潜り込んだ。

招かざる客が今夜訪れるとも知らずに、私はぐっすりと眠りに落ちたのだった。

DATA..008 勇者と魔王（後書き）

ジナ・ルグ

職業..黒魔道師

属性..闇属性

キャラ..ツンデレ

少々頭が弱い男の子。しかし、魔道の腕は超一流で、若いながらも魔道が世界一のフィニア国の黒魔道隊の隊長を勤めている。苦手度85。意外にも料理が得意。赤毛に近い茶パツは立っていて、バナダナをしている。瞳も茶。

DATA..008. 5 勇者と魔王

俺としたことが、なんという失態だ。

後ろからは、この村の警察ヤードが追ってくる。

明るいライトが背中_にに当てられる。

これは、完全に姿を見られたな。

後姿だけだが、これは致命的だ。

此処で運良く逃げ切れたとしても、この村から逃げる時に何らかのカモフラージュをしなくてはいけない。

じつくりと俺のことを警察に見せとく訳にも行かないので、今まで走っていた屋根から飛び降りる。

よし、この辺りにはまだ奴らは来ていない。

くそっ。

こんなに必死に逃げてるのなんて、何時振りだろうか？

ああ、国宝級のダイヤを盗んだ時以来だ。

アレはいい稼ぎになったな。

なのに、今回はしょぼい女の手持ちの金だけだ。

あっちから誘ってきたから、こりゃ運が良いと思ってすぐにホテルへ行ったのがダメだったか。

反省点を挙げるなら、警戒が足りなかった。

まさか、あの女も俺と同業者だ何て、誰が思うだろうか？

あのクソ女、盗みが失敗したからって自分から警察に連絡するなんて、盗賊の風上にもおけねえ。

ああ、せめてあいつの宝石のついたアクセサリーだけでも一緒に盗んでくるべきだった。

と、さまざまなことを後悔していると、前に光が当てられたのが見

えた。

やばい、先回りされた。すぐさまくると百八十度回転し、すぐ横の狭い道へと入る。

しかし、どうせこの辺り一体を封鎖されているだろう。ならば、最後の策だ。

ここは、盗賊らしく運任せ。

すぐ横にあった木造のボロそうな建物の二階の窓に手をかける。

そして、其処の窓を横に引けば、カラカラと小さな音を立ててすぐに開いた。

嗚呼、運が良い。

そして、すぐさま中へと入り、窓を閉めた。

警察のことは、あとは成り行き次第だな……。

残りの問題は、この部屋の主がどういう人間か、だ。

頭の固い人間ならば、迷わず警察に通報する事だろう。

反対に、かくまってくれるような人間なら、ばんばんざいだ。

……さて。今、この部屋に人はいるのだろうか？

「誰?!」

鋭く叫ばれた声。

声の主は、若い女。

暗いので確かではないが、珍しい、真紅の髪をしている。

――― 嗚呼、やっぱり運が良い。

「……犯されたくなかったら、少し静かにしてくれるか？
―――
――紅毛のお嬢さん」

なんという状況だ。

今、何が起こっているのか理解できない。

何で？ 此処は宿屋の一室で、今夜は私が借りているはずだ。

この男は、誰？

其の夜、ぐっすりと眠っていたのに、何故か窓が開く音が聞こえた。眠い目を擦りながら窓を見ると、なんと男が立っているではないか。吃驚して、とりあえずベッドの上に座る態勢になって、誰？ と叫んだ。

そしたら、その男は笑ったじゃないか。

あれ、これって結構やばい状況？

「……犯されたくなかったら、少し静かにしてくれるか？ ——」

——紅毛のお嬢さん」

このセリフを聞いたときの、私の戦慄をどう説明しようか。とにかく、ヤバイ、と思った。

紅毛のお嬢さん、と言うのが誰のことだかよく分からなかったが、すぐに合点が行った。

そうだ、私、髪染めたんだ。

黒は凶事の色、とか言われて。

だから、紅毛のお嬢さんと言うのは、私。
えーと、つまり……私、犯される？！

「へえ、結構美人じゃん？」

ずい、と顔を近づけてきた、その男。

うっ。結構カッコイイ。

苦手度は88あたり。なかなかの記録だ。

とんでもなく鮮やかなピンクの髪、だと思う。

暗くてよく見えないが……瞳も、同じ色のような気がする。

って、良く見たら、頭に耳がついてる？

……え？ 耳？

何度見ても、猫のような耳。

ついでに尻尾もついている。……どうやら、猫の尻尾、らしい。

オレンジ色の尻尾が、私の視界の隅でゆらゆらと揺れている。

結構冷静に現状を説明しているように聞こえるだろうが、これではなかなか、パニックになってる。

「みみ……!!」

「おっと。静かにしろよ？」

あまりの驚きに叫ぼうとした所を、この派手な男が、口をふさいだ。すばやい技で、右手を私の口元に当てる。

こいつは、むぐ、と変な声を出してしまった私を、くく、とのどで笑った。

うぐっ！

この顔は、なかなか破壊力があるぞ！

近づかないでくれ！

………とか言えるような状況と、冷静さがあつたら良かったのにな。

「言ったよな？ 静かにしないと、犯すぞ、て」

「!!!」

危険です！

そう、頭の中で警報が告げた。

しかし、こんな至近距離で逃げれるはずもなく、すぐに逃げ場を奪われた。

うっ、なんか、苦しくなってきた。

この男は、楽しそうに笑いながら、私の口に当てていた右手を取った。

当然、身の危険を感じている私は、思いつきり叫んでやろうと、息を吸った。

しかし、叫ぶ暇もなくまた何かが唇に触れた。

現状が、理解できない。

目の前が良く見えない。なんで？

息苦しくなってきた。

え、え、え？

すると、口の中に何かが入ってくる感触。

このとき、私は理解した。

私、キスされてる———！！

実際にした事はないが、知識だけはある。

いわゆる、デープキス、と言うものだ。

した事もないキスを無理やりされて、私の混乱は頂点まで達していた。

くる、しい。

酸欠で視界が白くなり始めたころ、やっとその男は私を解放してくれた。

はあはあ、と大量に酸素を取り込んでいる私の姿を、じっと見ている、悪趣味な奴。

そいつは、まったく息が切れていなかった。

「……大丈夫？」

「大丈夫なわけ……!!」

耳元に口を寄せて、囁くように言った、男。

私はカッと来たまま、怒りをぶつけてやろうと左手を上げた。

しかし、その手は呆気なく男に捕まり、男はもう片方の手を私の服の中に入れてきた。

「ひっ！」

「静かにしてってば」

男は、私の胸を触ろうとしてきた。

あまりの衝撃に声が出ない私。

その様子を見て、男は一旦手を止めて、また耳元で囁いた。

「静かにするなら、これ以上はやらないけど？」

「……!!」

「静かに、してくれる？」

私は、激しく、こくこくと頷いた。

此処はこの条件を呑んでおいた方が安全だと思ったのだ。
自分の身のためにも。

すると、男は手を放して、私の傍から離れた。
た、助かった……！！

ほっとした。心底、ほっとした。

その男は、窓から外の様子をうかがっている。

「あんた、誰なの？」

「ん？ 俺？」

あんた以外に誰が居るんだ！

と思ったが、言わないでおく。

あんな、寿命が縮まるような真似、できればもう二度としたくない。

「俺は、ヴィーザ。ま、流れ者の盗賊だ」

「盗賊？」

「そ。この村で女相手に盗みをしようと思ったんだけどさ、運悪く
捕まりそうになって。で、此処に逃げてきた訳」

「そう……」

つまり、私はただ運が悪かっただけか。

たまたまこの男と私たちの滞在期間がかぶって、たまたま私の部屋
にこの男が逃げ込んだ。

……嗚呼、私って結構不運。

「で、あんたは？ 此処の村の人間じゃないだろ？ なんでこの村
に滞在してんの？」

「……教える必要は、ないと思うけど」

「まあね。でも、俺だって教えたし、教えてくれたっていいじゃん
？ 浅い仲じゃないんだし」

「めっちゃくちゃ浅い仲だけど……ま、いいか。隠すような事じゃな

いし。

私は、勇者と一緒に旅をしてるの。今回は、リン・マカ国へ行こうとしていて……」

「へえ、リンへ？ 俺、フイーア国に来る前は、リン・マカにいたんだぜ？」

「そうなの？」

「ああ。結構、裏じゃ顔が利く」

にや、と笑って、彼……ヴィーザは言った。

確かに、盗賊と聞く限りでは、裏で顔が利くというのも嘘じゃないらしい。

朝日が窓から差し込んで、ヴィーザを照らした。

どうやら、朝になったらしい。

……嗚呼、やっぱりパッションピンクの髪とオレンジの耳だった。

「そこで、提案」

「え？」

「俺も一緒にリン・マカへ連れてってくれねえ？」

「……どうして？」

「いやあ実は、このままじゃ俺、捕まっちゃまいそうなんだよね。

少しでも早くこの村から出るために、カモフラージュが必要なわけ。それで、勇者一行と一緒にってなると、結構警察もゆるくなんじゃない？」

「それだけで？」

「もちろん、リン・マカについた後も全力でバックアップするぜ？」

俺、約束は守るから」

………どうしよう。

確かに、こいつは嘘は付いてなさそうだ。

でも、信用してもいいものか？
悩む所だ。

というか、私一人で決められるものじゃないな。
ほかの人にも相談して……

ガチャ

ノックもなにもせずに突然開いた扉。

当然、私も驚く。

ヴィーザの驚きようなんか、私の数倍は軽くいつていただろう。

一瞬、警察か、という考えがよぎったが、それはすぐに打ち消された。

其処に居たのは、ミイだった。

「ルイちゃん、起きた？ そろそろ起きないと……」

ぴたり、と固まったミイ。

うん、そりゃ驚く。

「る、ルイちゃん……？ その人……？」

「ええつと……」

説明できない。

「る……ルイちゃんが……ルイちゃんが、変な男に襲われてる……！」

否定できない。

ミィにしちゃ、的確な判断だ。
実際に襲われかけたし。

「誰かー！ ルイちゃんがー！！」

叫びながら、消えたミィ。

嗚呼、どうしよう。

警察がきても否定することなんてないよ？

吃驚している様子のヴィーザ。

……当然か。

バンツ！

「ルイ？！」

「何した！！」

勢い良く呼び込んできた、ジナにマオ。
その後ろでは、ミィにレオンも居る。

———嗚呼、こいつのこと、どう説明したらいいの？

DATA..010 勇者と魔王

嗚呼、空が青いなあ……………。

すみません。現実逃避をしていました。

この、微妙な空気に耐えられません。

昨日と同じように、野菜と一緒に荷車に乗る私たち。

だが、昨日と違うのは、全員が無言なところと、ピンク色の頭が増えている所だ。

「……ルイ、こいつ、なんなんだよ」

「うーん……盗賊？」

「はあ？」

「あ、いや、なんか、リン・マカで顔が利くっていう奴で……」

私は、昨日ヴィーザからされた話を、そのまま話した。

いろいろと省略した所はあるが、話はそのまま伝わっただろう。

「ふーん、そうなんだ……」

「で、なんで俺らに手を貸すなんて言ったんだよ？ その猫は」

上機嫌に私の肩に手を回す、猫ことヴィーザ。
ちよっ！ 触るな！ 近寄るな！

「いやあ、ルイと一緒にいたくて！」

「……村の検問抜けたからって、調子の良い……………」

「やだなあ、俺とルイの仲だろ？」

「どんな仲だっ！」

「ん、キスした仲？」

瞬間、固まる荷車の中。

一瞬の内に、この場の空気は零度まで下がった。

このクソ猫がっ！！

「嘘っ?! してないでしょ?! ルイちゃん！」

「してねえよな、ルイ!!」

そして、攻め寄ってきたミイにマオ。

怖い。

いや、逃げられない。

しかし、言い訳をしなければ……!!

「し、してないよ……!!」

「キス、初めてだったんだな、ルイ」

「ヴィーザは黙ってて!!」

「うっそお!! したの? したの?! ルイちゃん！」

「いや、だから、」

「意外とルイって胸おっきかったんだなー」

「この変態猫! 黙ってろ!」

余計な事をべらべらと……!!

私がこんなに他人に殺意がわいたのは、人生で三度目です。
いや、事実だからなんともいえないけど……。

「あ、昨日の続きする?」

「近寄るな!」

なんかヴィーザがよって来たから、急いで逃げる私。
すると、私の前にマオが立った。

私を守るように両手を広げて、ヴィーザを睨んでいる。

「ルイに近寄るな、獣人ごときが！」

「……へえ？ 獣人を馬鹿にすんの？ クソガキが」

途端に本気モードになったヴィーザ。

あれ？ なんで怒ってんの？

っていうか、獣人て何？

「獣人って？」

「ヴィーザのような奴のことです。半分人間で半分獣。他にも、亜人とか半獣などと呼ばれたりもしています。

こいつは猫の半獣みたいですが、他にも犬とかリスとかいろいろ存在しています」

そう説明してくれたのは、レオンだった。

そうか、そんな人種がこの世界にはいるんだ……。

「ですが、獣人は人間から差別されやすいのです」

「差別？」

「はい。古くから、獣人は差別されやすい立場にありました。半魔物、などと呼ばれて」

「ああ、だからヴィーザは……」

こんなに怒ってるんだ。

そうだよ、そんな過去があって、その上あんな言い方されたら、そりゃ怒るよね……。

少しヴィーザを可哀想に思っていたら、すぐ近くから地響きのよう
な轟音が響いた。

そりゃあもう、すごい音。

一瞬宙に浮くくらいの音でした。

急いで音がした方を見る私たち。

其処には、真っ黒の犬が居た。

いや、どう見てもワンちゃんには見えない。

そうか、これが、獣型の魔物、か。

「お、出たな」

「これが、魔物？」

「はい。魔物の中でも一、二を争うほど弱い魔物です。この程度な
ら、一瞬でしょう」

一瞬？

どうやって？

……待つて。

何か、すつごく、一番大事なことを忘れてる気がする。

「行くぞっ！」

元気に先頭を切って走っていったのは、ジナだ。

あいつは、好戦的な性格してるからな。

……って、違う。

そうだ、すっかり忘れてた。

頭からすぽんと抜けてたよ。

私もミイも、戦闘能力ゼロだっの!!

「きゃああ!!」

魔物が襲ってきて、ミイが叫んだ。

あ、ヤバ。

咄嗟に、私はミイを自分の体の下に入れるようにして、庇った。
すると、目の前にヴィーザが現れた。

一瞬で真っ黒な犬のような魔物を吹っ飛ばす。

ああ、助かった。

「あれ、ルイたちは戦わねえの?」

「……いま気付いたんだけど、私たち、戦闘能力皆無でした」

「そ、そうだった。武器も無しでどうやって戦おう?」

私にもついにミイの馬鹿さがうつってしまったか。

馬鹿だ。

これじゃ、ただの足手纏いじゃないか?

「勇者一行じゃないのかよ」

「勇者一行だよ! むしろ、こいつが勇者だよ!」

「え、まじで?」

「まじ」

ほんとに吃驚してるヴィーザ。

どうしよう、どうしようどうしよう!

もう、ほとんどパニックに陥りながら、私はとりあえず皆を守らなきゃ、と思っておじさんを近くへ呼んだ。

マオも呼ぼうと思ったんだけど、何処にも居ない。
え？！ 何で？！

「どうしようヴィーザ、マオが居ない！」

「はあ？ 死んだじゃねーの？」

「そういう事言わないで！ 何処に行ったんだろう……」

「探す暇なんてねーぞ？ ジナもレオンも単独で敵の数減らしてるし。俺一人じゃ、この人数守るのでさえ神業」

「……どこかに隠れてるのかな？」

さーな。

ヴィーザはそう一言零した後、腰に差していた短剣に手を伸ばした。二つあるそれを、二つとも逆手に握って、構える。どうやら、それがヴィーザの武器らしい。

すると、黒い犬がヴィーザに襲い掛かる。

ヴィーザは、それを右手のダガーだけでなぎ払った。

立て続けに襲ってくる黒い犬を、彼は両手の刃物だけで、すべてを戦闘不能へとしていく。

———強い！！

そう思った。

しかし、今はそれどころではない。

マオ、は。何処に居る？

「マオー！！」

どれだけ大きく叫んでも、マオからの返事はない。
それでも私は呼びつづける。

だって、心配じゃないか。

こんな敵の群れの中に一人で居るなんて。

どれだけ辺りを見回しても、マオは見つからない。

けど、次第に敵の数は減っていった。

もうすぐ終わる……。

そう思って、気を抜いた一瞬。

「爆発！」
ダムラ

遠くの方で、ジナの声が聞こえた気がした。

あれ、なんだか、左半身が熱い。

そして左を振り向けば、灼熱の炎が私たちに向かって襲ってきていた。

……ジナの、魔道だ。

それも、半端無い大きさだ。

こんなのにあたったら、誰でも粉々だ。跡形もなくなるだろう。

「逃げろっ!!」

ヴィーザは叫んだ。

私たちは、必死になって走った。

おじさんは一目散だ。脅威のスピードで走ってゆく。

しかし、ミイは転んでしまう。

私もヴィーザも振り返り、ミイを連れて逃げようとする。

が、時既に遅し。

目の前には、爆発寸前の火の塊があった。

———ああ、終わったな。

私は咄嗟の判断で、ミィを庇う体勢をとる。

だれかが舌打ちをして、私の隣りを駆けて行った気がした。
私たちの前にはヴィーザが居て、二つの短剣を構えていた。

あ、と思った瞬間には、ジナの魔道は綺麗さっぱり消えていた。

「……え？」

「……………セーフ」

ヴィーザは気が抜けたのか、べしゃ、と座り込んだ。
私とミィは突然消えた魔道のことと頭がいっぱいだ。

「……ヴィーザ、今の……………」

「短剣で切った」

「ああ、そう……」

私も、もう喋る気力が無い。

ジナが慌てて、大丈夫かっ？ と走ってくるが、私はジナに対する

怒りさえも湧いてこなかった。

放心状態だ。疲れた。

暫らくするとレオンもやってきて、どうやら、黒い犬は全滅したら
しい。

「……馬鹿ジナ」

「悪い」

「……………死ぬかと思ったよ」

「ほんつとに悪い」

ジナは、誠心誠意ミイに謝った。

もちろん私たちにも謝ったが、ミイに謝る時が一番思いつめたような表情をしていた。

ああ、そうだね。ミイに嫌われたらあれだもんねえ……。

「まあ、この馬鹿のことは謝ってるし置いといて……」

ヴィーザは、腰をおろしたまま口を挟んだ。

「とりあえず、まずしなくちゃいけないことが発覚したな」

「ああ」

うん。そうだね。私も、そう思う。

「え？ 何？」

ミイは皆に尋ねた。

そっか、分かんない？

だってさ、今回の戦いで一番足手纏いになったのって、誰だと思う？

「お前らが戦えるようになること」

……………神様。どうやら、修行編に突入しそうな感じです。

DATA:010 勇者と魔王（後書き）

ヴィーザ

職業…盗賊

属性…無し

キャラ…変態・ケモノ

エロイ。変態。しかし、盗みの腕はぴか一。リン・マカでは中々顔の利く奴らしい。猫の獣人で、身が軽い。苦手度88。パッションピンクの髪に瞳。耳と尻尾はオレンジ。

DATA..011 勇者と魔王

荷車は、速くもなく、遅くもなく。

一定のスピードで進んでいくので、回る荷車の車輪が酷く単調に見える。

……そんなことはどうでもいい。

さて。

では、前回の話の補足から始めようじゃないか。

まず。

結局、修行は行わなかった。

勇者がどんな修行をすれば良いのか分からない事と、赤魔道の使い方が誰も分からなかった事が原因にあげられる。

勇者も赤魔道師も、専門的で自由な職業らしく、他の職業では分からない事がたくさんあるらしいのだ。

なので、フィーア国に帰るまではしょうがない、という結論に達した。

そして、もう一つ。

マオのことだ。

さんざん心配した挙句、マオは走ってやってきた。

何処に居たの？と訊いてみたら、マオは、隠れてた、とけろりと言ったのけた。

なんだ、と一安心したのもつかの間。

おじさんが居ない事に気付き、またも焦った。

おじさんは随分遠くまで逃げていたらしく、息切れしながら先を急ごう、と言ってくれた。

とまあ、なんやかんやでとりあえず一段落ついた頃。
やっとのことで、リン・マカの土地が見えてきた。

「あれがリン・マカ？」

「はい。あの川を越えた向こうがリン・マカ国です」

「ああ、そっか……。なんか、長いようで短い旅立ったな……」

「そうか？ 短かっただろ？」

「これからも長いですからね」

「……そうだね。むしろ、これからが本番なんだよね」

馬が引く荷車は、広めの橋をゆっくりと移動していく。
橋を渡った後はそれなりに活発そうな村が続いた。

そして、中心にある城が見えてきたところで、おじさんは荷車をとめた。

どうやら、此处でおじさんとはお別れらしい。

おじさんはこの辺りの宿屋に泊まるとの事だったので、帰るときは声をかけて一緒に帰ろうと思う。

どうやら、護衛を雇わなかったぶんお金がかなり浮いたので、野菜を買ってくれる場所を時間をかけて選ぶそうだ。

私たちは、歩いて王宮まで行くことになった。

すぐ其処なので、歩いて行っても時間は有り余るだろう。

「んじゃ、俺はこれから別行動すっから」

「え？」

ヴィーザが、突然そう切り出した。

おじさんと別れて、数分もしなかった頃だ。

「どうして？」

「どうしてって。俺、この国じゃ有名な盗賊だぜ？　王宮なんかに入れるかよ」

「……確かに」

「あれだろ？　そのガキが何者かについて調べれば良いんだろ？」

「うん」

「俺は別のルートから探ってみつから。んじゃ、また会おうな、ルイ」

ヴィーザは、すばやく私の身体を固定し、ちゅ、と音を立てて頬に口付けをした。

その行為に私は吃驚して、つい、固まってしまった。

すると、マオとミィが爆発したように叫びだした。

マオがヴィーザ！！　と怒鳴りながら近づこうとした瞬間、彼は私を離して、ひよい、と屋根の上へと上った。

……ほんとに猫だなあ。

て、違う！　何すんだ、あの変態！

マオは、私の手をぎゅ、と握って、ヴィーザが消えた方向を睨んでいた。

ミィも同じ場所を睨んでいる。

すると、ジナがぼろり、と言葉を零した。

「……あいつ、大丈夫だろうな？」

「え？」

「逃げたりしねーよな？」

……………。

どうだろう。

逃げる可能性は充分にある。

むしろ、逃げない事に利益はあるだろうか。

あいつの性格を考えたなら、逃げるような気がする。
……まあ、でも。

「逃げて、私たちに損はないし」

「そりゃな」

「逃げなかったらラッキー、ぐらいに思っとかない？」

実際、そんなもんだ。

確かに、と皆は頷いていた。

私たちは、特にミィに気をつけながら、王宮への道のりを急いだ。
一番危険なのはミィだ。

だが、運良くも、転んだりはぐれたりはしなかった。

本当に運がいい。

こんな、ジナもレオンも詳しくない場所で迷子にでもなられたら、
探す方も探せない。

そんなこんなで、城の城壁をぐるりと回って……やっと入り口に辿
り着いた。

その門は、二人の兵士が守っていて、堅苦しそうに前を向いている。
私たちは、そんな門番の前に立った。

二人は怪訝そうな表情を浮かべ、誰だ、と問うた。

「我らはフィーア国の勇者である。ぜひともこの国の王に一目会
たいと思い、参上した」

そう喋りだしたのは、レオンだった。

やっぱりレオンだ。

こういう丁寧な言葉遣いが一番似合う。

「フイーア国？　フイーア国は勇者育成に力を入れていないはず……」

「勇者育成ではない。此処に居る勇者は、勇者召喚によって召喚された者だ」

「……！　こ、これは失礼しました！　急いで王のほうへ連絡します！」

門番は、行き成り慌てだした。

何したんだろう？

『勇者召喚』って単語を出した途端、彼らは変な汗を出し始めた。

……？　どうということ？

「勇者召喚って、なんか凄いの？」

小声でジナに尋ねる。

すると、彼も小声で答えてくれた。

「ああ。異世界からの召喚自体がとんでもないんだ。だから、フイーア国の勇者召喚は、世界中で注目されてる。

ま、この国は少し過剰だけどな」

「ふーん……」

どうやら上からの許可がおりたらしく、門がゆっくりと開いた。

そして、偉そうな人が王の間とか言う場所に案内してくれた。

王の間って。なんか、シントの私室の扉を思い出すのは私だけ？

導かれるまま私たちが王の間に入ると、そこには、いかにも、というような王様が居た。

うわぁ、王冠だ。

うわあ、赤いマントだ。

吃驚するくらい、庶民のイメージをそのまま形にしたような格好をしてくれている、王様。

……シントとは、全然違う。

その王様は、にこにここと、気持ち悪いくらい上機嫌に話し掛けてくれた。

「いやあ、遠路はるばるご苦労様でした、勇者様方」

「いえ」

「初めに連絡をくれていれば、もっと丁重にもてなしをしていたのに」

「そこまでされるほど、私たちは偉い身分ではありませんから」

ん？

そうか？

私たちはともかく、ジナとレオンはフィーア国の軍隊のトップじゃないの？

結構偉いと思ってたんだけど……？

「いやあ、勇者様方は謙虚でいらっしゃる。

世界中の注目を集める勇者召喚の勇者一行なのですから、もっと図々しくならなくては」

どんな理屈だ。

注目を集めてたら、図々しくならなくちゃいけないのかよ。

うーむ……やっぱり、王様の考えることは庶民には分からない？

「では、図々しいついでに一つお願いしたい」

「なんですか？」

「この城の滞在許可を王に頂きたい」

「ああ、なんだそんな事！」

王様は、そんな事当然ですよ！といって、いとも簡単に許可を下ろしてくれた。

よし！

この城に滞在する事が可能になったなら、マオのことを調べるのも容易い。

レオン、良くやった！

「それでは、部屋を案内させましょう。おい、其処のお前。この方たちを客間へ案内しなさい」

「はい」

命令された使用人らしきメイドさん。

彼女は、深く頭を下げて私たちの前を歩き出した。

私は、彼女についていきながら、馬鹿な王様に心の奥でこっそり感謝を言っておいた。

DATA..012 勇者と魔王

「ねえ、ミイ」

「ん？」

「もう一回訊くよ？」

「うん、何？」

「此処、何処？」

「さあ？」

お前な。

無責任にもほどがある。

……いや、違うか。

迷うと分かっててミイについて行った私が馬鹿だったのか。

今から、数分前。

レオンとジナから提案があった。

「俺らは、これからこの国の魔道陣のレベルがどれだけなのか、調べてこようと思う」

「二人には、王宮内に何か怪しいものが無いか、調べて欲しい」

もちろん、断る理由なんて無いし私たちは頷いた。

で、マオはどうするのかと訊いた所、一人にするのも危険だから連れてってくれる、と言われた。

マオも嬉しそだったから、それで良いか、と思って、私たちは意気揚揚と部屋を出た。

……それが今から数分前で、只今、迷っています。

どこまで歩いて、全く同じ壁。

そりゃ迷うわ。

ミィはどこでも迷うけど。

王宮内を探索しろ、とか言われたけど。

何処をどう探索するのか分からない。

お手上げ状態ですね。

すると、私の前を歩いていたミィが、誰かにぶつかった。

「あつ、すみません！」

すかさず謝るミィ。

うん、そんなに高速で謝られたら、因縁をつける暇もないね！
すると、被害者である男の人は、メガネをくい、とあげた。

うわっ！

その男の人は、緑の髪だった。

しかも長い。

そしてメガネの奥の瞳は茶色だ。

……………うーん。

顔立ちは、なかなか美形だと思う。

……けど、眼つきが……………最悪。

なんと言うか…………蛇のような、気持ち悪い眼つきなのだ。

その目の所為で、美形が台無しと言うか。

うん、苦手度は66。

そこまで高く無いかな。

苦手だけど。

「すみませんっ！ 私の不注意で……」

「では、何に対して注意をしていたんだ？」

「え？」

「歩く場合、大体の人間が自然と前方に注意が向く。

前方に注意が行かない場合は、何かしら他のものに注意がいつてる可能性が高い。一体、何を見ていたのだ？」

なんて嫌な言い方をしてくる人だ。

謝ってるんだから、それでいいじゃんか。

嫌な奴だなあ……。

「ええっと……？」

「大方、その紅髪と話をしていたところだろう。

歩いている時に話をして前方不注意になるなど、あつてはならないことだ」

くどくどくどくど。

この男は、長々と説教を始めた。

ちよっと軽くぶつかっただけじゃん！

「ちよ、ちよっと！ ミイは謝ってるし、ちよっとぶつかったちゃっただけでしょ？ 許してくれたって……」

ギリリ。

メガネが光った気がした。

「ちよっと？ 君は、ぶつかって時間を取られたことをちよっとと言うのか？ 大体……」

くどくどくどくどくどくど。
うざい。

この男、何なわけ？

嫌な奴を形にしたような人間が、本当に存在するなんて、ある意味
衝撃なんだけど。

「ああ、しまった、三十分も時間を取られてしまった。こんな小娘
ごときに」

こ、小娘ごとき？

お前が勝手に説教を始めたんだろ！
こっちだって、三十分も説教されて、迷惑だっつの！！

「まったく、無駄な時間を過ごしてしまった」

最後に捨て台詞を残し、男は忙しそうに去っていった。

……………なんだったんだ。

あの男は、結局私たちの名前も訊かず、自分の名前も明かさずに消
えていった。

……………私に悪い意味での衝撃を残し、台風のように消えていった
のだ。

「……………とりあえず、行こうか、ミイ」

「……………うん」

ミイも衝撃を受けたらしく、さっきまでの勢いはなくなった。
マオは、私の隣りで手を握っている。

――で、結局、アイツはなんだったの？

DATA 013 勇者と魔王

「で、収穫は？」

とりあえず、ミイの部屋に集まって報告会。

マオは疲れたのか、ミイのベッドでぐっすり眠っている。

「全くなし。魔道に関するものは、王宮内には全然ないみたいだよ」
「そーか。こっちもだ。この国の魔道師たちが集まって書いたって言う魔道陣を見たが、ありゃダメだ。」

魔道陣は俺の専門じゃねーけど、それでも分かる。円は歪んでるし、床に墨で書いてたし、呪文も明らかに違う。

それを自身満々で見せるんだから驚いたぜ。てきとーに言っただけど。

俺たちが思ってたよりも、この国の魔道の技術は悪いみてーだな」

「だったら、勇者召喚なんて無理？」

「だろーな。アミラでさえ最近やっと完成できた魔道陣あったのもんだからな。あんなんじゃない、不可能だ」

「じゃあ、問題は振り出しに戻ったって事？」

「だなー……。とりあえず、明日フィーア国に帰るか。もう、この国に居る意味がねえし」

レオンは静かに聞いていた。

ミイは、頭に？ を浮かべながら聞いていた。

後でゆっくり説明してあげるから、今は待っててよ。

すると、レオンが何か、本を差し出した。

真っ赤な表紙の本だ。

「何？　これ？」

「赤魔道についての本だそうです」

「え？」

「この国にはこれしか無いそうなので。フィーア国に戻れば、もっと良い本がありますから、それまでは……」

「わぁ、ありがとう!!」

さっすがレオン！

気が利く!!

私は、さっそくその本を開いた。

どうやら、文字は私たちの国と一緒にらしい。

平仮名に片仮名に漢字。

……名前は日本語じゃないっぽいのに、世界観ばらばらだなあ。

【第一項　赤魔道師とは

赤魔道師とは、魔道を使える職業の中でも、最も自由で曖昧な職業である。

黒魔道師は攻撃専門の黒魔道のみ、白魔道師は回復などの補助専門の白魔道のみ使える。

しかし、赤魔道師は違う。

黒魔道も白魔道も使えるが、比較的弱い呪文しか唱える事が出来ない。

そして、赤魔道師だけが使う事のできる魔道。赤魔道、というものが存在する】

ふーん、赤魔道っていうのがあるんだ。
しかも、黒も白も魔道がつかえるなんて、結構便利。

【第二項 赤魔道とは

赤魔道とは、相手が魔道師だったときに力をよく発揮できる魔道で、魔道を攻撃する魔道である。

魔道師自体や他の物に対する攻撃力はゼロに近く、相手を殺す能力は無い。

それゆえに、優しい魔道などと呼ばれることもある。

実際にどんな技を使えるのかというと、白魔道の回復リアフを無効化したリ、黒魔道の爆発ダムラを凍らせたりすることができる【

なるほど、ね。

赤魔道って、結構便利な技なんだ。

しかし。

その本を最後まで読んでも、赤魔道の使い方は載っていなかった。

「赤魔道って、どうやって使うの？」

「載ってねえのか？」

答えてくれたのは、ジナだった。

やっぱ、魔道の先輩に訊くのが一番かな？

「うん。歴史とか、そんなんばっか」

「ああ、じゃあ、ハズレだ。ま、フィーア国になら魔道の本はたくさんあるから、そこで探してみろよ」

「でも、赤魔道師って、黒魔道も使えるんだよね？」
「……まあな」

じっとジナを見つめる。

教えてくれないかな、という願いをこめて。

「言っとくけど、ぜってー教えねーからな」
「なんで？」

「お前に教えんのか、死んでもヤダ」
「……そこまで？」

ジナは頑なだった。

しかし、私も負けてられない。

自分が戦いで死ぬよりも、ジナに教えてもらってジナが死ぬ方が良い。

「ねえ、教えてよ」

「やだっつってんだろ？」

「いいから！ どうやるの？」

「うぜー！」

「魔道の使い方って？」

「ああもう！！ 白い爆発だ！」

「白い爆発？」

「体中のエネルギーで、白い爆発を起こすイメージ！」

「……そうすると、何が起るの？」

「知るか！ 教えたぞ！ いいか！ 俺は教えたぞっ！」

ジナはそっぽを向いてしまった。

これ以上機嫌を悪くすると何が起るか分からないので、とりあえず黙っておいた。

あれ。

そもそも、教えてもらった程度で、どこで練習すればいいんだ？

………どうやら、私に魔道を使う事はまだまだ許されないようです。

DATA..014 勇者と魔王

もし、これがばれてしまっても、仕方の無いことだと思って諦めよう。

そうだ、仕方なかった。

不測の事態なのだ。

まさか、こんなにも早く奴らが動き出すとは思っても居なかった。だから予定よりも早く消すしかなかったのだ。

リン・マカの馬鹿どもがつくったこの魔道陣が、まさか此処まで私の手を煩わせることになるとは。

誰も予測していなかった事態と言っても良いだろう。

さまざま不測の事態が重なったが、此処はこれで良い筈だ。

もう、心配はいらない。

明日の朝、騒ぎにはなるだろうが、犯人が見つかる事は無い。

私だと感づく者はいないだろうから。

この、めちゃくちゃな魔道陣を消した犯人は、決して見つかる事無く、フィーア国へと帰るのだ———。

私は、外の騒がしさの所為で起きてしまった。
しょぼしょぼする瞼を擦り、上半身を起こす。
何があったのだろうか？

半分寝ながら私は着替える。

あまりにも眠かった為、途中の記憶が無い。
寝ながら着替えるなんて、私って何て器用なんだ。
昨日と全く同じ服を着て、私は部屋を出た。

私は、とりあえずミイの部屋のドアをノックする。
すると、ミイはすぐにドアを開けて私を中へ招いた。

招かれるがまま部屋に入ると、そこには何故かレオンが居た。

え？ 何で居るの？

「よかったあ。呼びに行こうかと思ってたんだよ」

「ねえ、なんでレオンが居るの？」

「ああ、さっきね、なんか騒がしいなー、と思って廊下に出たらた
またまレオンさんが居て。」

それで、話を聞くために中に入れたの」

「あ、そうなんだ」

ジナ君は起こさないほうが良いし、ルイちゃんを呼ぼうかどうか悩
んだんだよ？

ミイはそう言って、私をベッドに座らせた。

そして、私も話を聞く体勢をとる。

とりあえず、何かを知っていそうなレオンへ何があったのか尋ねる
為に、顔は見ないようにして前を向く。

え？ 何故顔を見ないかって？

カッコイイからに決まってるでしょう。

「で、何したの？」

「……この国の魔道師が協力してつくった魔道陣の話は、昨夜しましたね？」

ああ、ジナがぼろくそ言っていた、あれね。

円が歪んでるとか、いろいろ言ってたな。

あれが、どうしたって？

「その魔道陣が、一晩にして跡形も無く消えたそうです」

「魔道陣が？ そんな事って、あるの？」

「あれの場合は、ただの墨の落書きですから。やろうと思って出来ない事はありません。」

ただ、やはり人為的であること。それから、王宮内にある魔法陣だったことが関係して、騒ぎになっているそうです」

「そっか。国の魔道陣を消すような輩が王宮に忍び込んでる可能性があるってことか」

こくり、とレオンは頷く。

ミイも真剣そうに頷いているけど、意味わかってんの？

冷や汗をかいている辺り、分かってないんだろう。

すると、ミイの部屋のドアが控えめに、トントんと二回叩かれる。

どうぞ、というミイの声を聞いてからドアは開いた。

其処に居たのは、国の使用人、メイドさん。

彼女は此処に三人揃っているのを見て驚き、そしてすぐにその表情を消して、淡々と告げた。

「王が皆様をそろえるように、と。王の間へお急ぎください」

そして、彼女はすぐにミイの部屋を出る。なんだか、やけにバタバタしている気がするの、気のせい？

彼女はそう言ってから、ジナの部屋へ急いだ。

ジナかぁ。あいつは寝起き悪いから、なかなか起きないだろう。と思っていたけど、ジナは案外早く部屋から出てきた。

けど、大分機嫌は悪い。

そりゃそうだ。

今日もジナの部屋で寝ていたらしいマオは、すっかり目覚めました！
！ というような顔をしている。

いいなあ、寝起きがスツキリな人って。羨ましいよ……。

私たちは、五人揃って王の間へと急ぐ。

そして、昨日も来たこの場所へとついたとき待っていたのは、昨日と全く同じ。

王様、だった。

「……ここに来てもらったのは、ほかでもない。魔道陣の件だ」

ジナとマオは意味が分からない、と言ったような表情をしている。その二人に、レオンが小声で教えているのが、視界の隅に映った。

「あの魔道陣があった部屋の隅から隅まで証拠を探した所、こんなものが見つかった」

そう言って、王様は右手をあげた。

その手には………ん？ 何を持ってるんだ？

大変見づらいそれは、どうやら毛のようだ。

紅く色づいている。

……………紅い、毛？

それって。

「紅毛のお前に問おう。あの部屋で、何をしていた？」

紅毛のお前って。

私？

そうだよね、今此処に私以外に紅い髪の間人はいない。

……………え？

私、そんな部屋に入ったっけ？

……………記憶にございません。

「……………わ、たし？」

嗚呼、神様。

何故、私にこのような仕打ちをなさるのですか？

※注意…神様をグーで殴ると宣言した人間の言う事ではありません。

DATA..015 勇者と魔王

ちょっと待ってよ。

何よそれ。

聞いてない。

こんな展開になるなんて、きーてないんですけどっ！

「早く答えろ！ あの部屋で、何をしていた！！」

昨日とは打って変わって、迫力満点の王様。
怖いよ。昨日はゴマすりまくってたくせに。

「ちょっと、待ってよ……」

私は混乱しながらも、とにかく弁解しなくちゃと思って、弱々しい声を出した。

「なんで、私って決め付けるの」

「こんな色の髪の毛は、お前しかおらんだろう」

「分からないじゃない。外部犯かもしれない。私を犯人に仕立て上げる為に置いたのかもしれない。
もっと可能性は考えられるわ！」

「分からぬことを言うな！ お前がやったのだろう！」

王様は、青筋を立てて怒り出す。

違う違う！ 私は、ずっと寝てたよ！ 本当だよ！

「違う！ 私は、」

「ええい！ さっさと白状せい！！」

王様は、目が血走っている。

本気、だ。

ちよっと待ってよ。

そんなこととして、私になんのメリットがあるのよ！

周りを見てみると、その場にいた誰もが、私の事を犯人だと思って睨んでいる。

あ、これ、ヤバ。

「違う！ 私は、あの部屋になんて一度も入っていない！」

「やかましい！ なにが勇者一行だ！」

皆の方を見ると、ミイは慌てふためいている。

どうしてこうなったのか、よく、分かってないのかな。

マオも似たようなもんだ。

これ以上立場が悪くないように、と考えて、何も言わない。
そして、ジナとレオンは。

冷静に。

短く、話をしていた。

「ルイ！ お前、やっぱりやったのか？！」

ジナの、突然の叫び。

ミイもマオも、驚いている。

当然だ。話し掛けられている私でさえ、何の話だか理解できない。
冷静なのは、ジナとレオンだけ。

「だからやめておけっていっただろう?! ミイ!」

「え? え?」

何の話だか分かっていないミイに、レオンが近づき、何も言わないように言う。

もちろん、マオにも同じ事を言うのを忘れずに。

「俺……たちを襲った女なんかを仲間に入れるのは……！」
「?!?!」

ちよ、ジナク」

抗議しようとしたミイを、レオンが慌てて止める。

私なんか、何が起こってるのかさっぱりだ。

え、嘘。

もしかして、私――

「こういう風になるのが嫌だったから、俺は反対だったんだ！ど
う見ても、悪人面をしてるだろ！」

悪人面つて。

……そんなに悪そうな顔してないと思うんだけど。

レオンを見れば。

申し訳無さそうな顔をしている。

え？

ジナは。

悪いな、と。

目で語っていた。

私、キられた？

二人に……裏切られた——？

つい、呆然としてしまう。ああ、私……………

もし、ここで勇者の仲間である私が犯人として捕まったら、勇者へと不信感が高まってしまう。

少なくとも、リン・マカでは、勇者一行に良い印象を持つ人間は居なくなるだろう。

だから、私が捕まる前に、私との関係をキった。

……………ジナとレオンは、冷静に、赤魔道師^{わたし}ではなく勇者^{ミイ}との未来を選んだ。

悲しむ事なんてない。

だって、ジナとレオンの対処は、正しいんだから——。

マオは抑えるレオンの手を退け、レオンとジナと、向かい合う。そして、叫ぶ。

「お前らっ！ ルイを見捨てる気か！！」

マオが、そう、叫んだ瞬間。

この部屋の窓が、全て割れた。

窓ガラスは、勢い良く王の間全体に飛び散り、一瞬のうちにこの部屋の空気が変わった。

「きゃあああ！！！」

そう叫んだのは、誰だったか。
あそこの、メイドさんかもしれない。

割れた窓を急いで見れば、其処に居たのは。
到底数え切れないほどの、————魔物。

「何これっ……!!」

「鳥型の魔物?! 奴らは、こんなに大群で襲い掛かったりしないのに……!!」

そう言っていた、誰かの声もよく聞いていなかった。

私は、ただ。

ただ————裏切られたことが、ショックで。

難しいことを考えることが、出来なくなっていた。

嗚呼、私。

なんで、こんなにショック受けてるんだろ。

あそこで私をキったのは、間違いじゃない。

私を庇ったら、これからの勇者の仕事に、支障がでる。

だから、仕方なくジナもレオンも私を見捨てたんだ。

分かってる……分かってるのに。

胸の奥が、ぽっかりと穴が開いてる気がして、しょうがないんだ。

DATA..016 勇者と魔王

逃げ回る王様にメイドたち。

勇敢にも立ち向かおうとする兵士。

ジナとレオンも、鳥型の魔物へ立ち向かっていつている。

これは後から知った事なのだが、飛行能力のある魔物、つまりは鳥型の魔物というのは、大きく分けて二種類に分かれるそうなのだ。

群れを成すものと、そうでないもの。

そのうちの、群れを作る魔物の方は、どれもずいぶんと弱いらしく、一体では他の魔物に食べられてしまうとか（?!）。

ちなみに、私はこの話を聞いたとき、魔物にも食物連鎖の上下関係はあるんだ、と思ったものだ。

とまあ、ひじょーに弱い魔物らしく、このタイプの魔物は余程でない限り、自分から人間を襲う事は無いそうなのだ。

そして、もう一方の、群れを成さない魔物。

こっちの方は一体で充分強い血筋らしく、ずいぶん好戦的で、人間を襲う事なんて当然らしい。

しかし、単独行動を好む型ばかりで、群れを作るという行為は、家族間でも無い。

そして、最重要事項の、今此処に居る魔物の型は。

群れを作らないタイプの鳥型だ。

そう。なのに、何故か大群で城を攻めてきた。

これは、世界的に考えても、異常な事態らしいのだが。

当然、このときにそんな知識は私には無く、ただ強い魔物が襲ってきた、程度に考えていた。

「ルイちゃん!!」

「ミイ?! あぶな——」

私に駆け寄ってこようとするミイ。

しかし、その後ろを魔物が襲ってきていた。

すさまじいスピードで、ミイの後頭部を狙う鳥。

ミイは後ろを振り向き、その鳥と対峙した。

ヤバイ、ヤバイよ。

ミイ、が。

ミイが、死んじやう。

魔物の鋭いくちばしがミイに当たる、と思った瞬間。

その鳥は急に失速した。

そして、あろうことか、ミイの目の前で、ぴたりとその鳥は止まった。

ありえない事態だ。

魔物が、人間に対する攻撃を止めた。

……どういう、事?

「ミイ? 何したの?」

「わ、わかんない!」

どう考えても、何かの力が作用したとは思えない。

魔物の鳥は、止まったせいで空中に浮く事が出来なくなったのか、ぽて、と地面に落ちた。

そして、ミイは驚いたのか、その鳥を抱えた。

ちょ！ 危ないよ？！

「ミイ、止めた方が……」

「だ、だって！ 何にもしないのに、飛べなくなっちゃったんだよ？ 何かあったんじゃない？……」

「相手は魔物よ？ 危ないって！ まだ生きてるんだから……」

そう言った瞬間、魔物の鳥は唸った。

いや、唸ったというより、鳴いた。

むりやり人間の言葉に直すなら……グウ？

「グウグウ」

「え？ なぁに？」

「グウグググーグ、グウグア」

「本当？ でも……」

「グウア。ググウグッ」

「大丈夫なの？ なら、頼むけど……」

私は、ミイが怖い。

魔物と話をしている。

っていうか、何の話？

すると、ミイの腕の中にいた魔物は、高く飛び上がった。

私たちの遥か頭上で、仲間割れをしている。

「ミイ……？ さっきのって？」

「なんかね、あの鳥さん、私に力を貸してくれるんだって」

「力を貸してくれる？」

「うん」

というか、なんでミイは魔物の言葉が理解できるの？
謎だ。

しかし、ミイが手懷けた魔物のお陰もあってか、城へ侵入した鳥の数は目で見ても分かるぐらい減っていた。
そう思った、一瞬後の事だった。

この部屋に居るすべての魔物が、私とミイのことを見た。

え、え、ええ、ちょっと待ってよ。

何、この感じ？

これって、まさか……

その魔物たちは、一気に急降下してきた。

とても両手では数え切れない量の、槍のように鋭いくちばしが私たちに迫ってくる。

「一斉攻撃ですか?!」

「きゃああ!」

ミイは、頭を抑えて、その場にうずくまる。

そんなんじゃ、ダメだ。

身体が蜂の巣になっちゃうだけだ。

どうしよう、どうしたら、どうしたら助かる？

何をしたら、生き延びる事が………

———白い、爆発だ。

ふと、思い出した声。

そうだ、ジナは言ってた。

体中のエネルギーで白い爆発を起こすイメージ。

白い爆発。

白い、爆発。

迫ってくる、くちばし。

爆発。

黒い鳥たち。

ミイの声。

薄暗い部屋。

命の危機。

すべてが黒。

その中にある、

白い爆発。

その時のことは良く覚えていない。
覚えているのは、魔道を使おうとした事だけ。
気が付いて上を見れば、……嗚呼。

良い天気だなあ。

……あれ？

DATA..017 勇者と魔王

「な……に、これ……」

あまりの驚きに、声が出ない。
やっとの思いで搾り出した声は、とんでもなくがらがらだった。

「……お前の魔道、だろ」

「私、の？ 私がこれをやったの？」

これ、といって、真上を指差す。

其処にあるのは、魔物と一緒に消え去った天井のお陰で見える青空。
壁の一部も一緒に消えている。

……この状況で、人が誰も死んでいないのが、不思議だ。

「恐らく、生命の危険を察知したのと潜在能力が開花したのがきっかけで、魔道が馬鹿でかくなっただろ。多分」

「多分、て……」

何故かけろりとしているジナ。

魔道を使った本人は、腰を抜かすくらいびびってるって言うのに。

……はい、立てません。

隣りでは、ミイが私と同じように座っている。

うーん、ミイも腰が抜けてるのかな？

そうは見えないけど。

「なんか、すっごい疲れた」

「そりゃそうだろ。魔道使ったんだから」

「え？ ジナとか、ぴんぴんしてるじゃん？」

「あのなあ、俺は魔道師だから、鍛えてあるんだよ。」

常人が突然魔道なんて使ったら、魔力が底について死ぬぜ」

「……ん？ 私、生きてるよ」

「お前はこの世界の常識が通じない存在だから良いんだよ」

え？ それ、どういう意味？

もう一度ジナに訊こうとしたんだけど、それは私の名前を呼ぶ声に妨げられた。

ルイー！ という声だ。

あれ、この声は……

「元気だったか？ ルイ？」

「させるかつ！」

穴が開いた壁から入ってきた男、ヴィーザだ。

こいつは、すぐに私に近寄って、またキスしようとしてきた。

しかーし！

二度もやられて、私が黙っているはずもなく。

（一応）対策を考えておいたのだ！

その甲斐あってか、抱きつこうとしたヴィーザに向かって、平手打ちを食らわした。

残念ながら、その手はヴィーザが受け止めてしまい、頬に手の跡をつけることは叶わなかったが、キスは防げた。

うむ。任務は遂行したぞ！

「なんだよ。照れるなって」

「照れてない！ 迷惑がってる！」

「またまたあ。顔赤いよ？」

「むしろ青くなってるわ！」

この男に日本語は通じない。
このとき、私は痛感した。

「……で。何したの？」

「いやあ、魔物が襲いに来るって言う情報があったからさ、急いでやってきたんだ」

「遅いっ！」

「だよね。この天井が爆発したのみて、急ぐの止めて歩いてきたんだよね」

ことごとく外れている奴だ。

すでに奇襲に遭った後だって言うのに、そんな知らせを持ってくるなんて！

何のためにお前は此処に来たんだ。

「でも、それ以外にもすごい情報があるんだけど。知りたい？」

ふむ。とりあえず聞こうじゃないか。

「今王宮で話題の、魔道陣が消えた事件の犯人」

何！！

「嘘！ 誰、それ！！」

「知りたいー？ そーだなー、一発やらせてくれたら、教えてあげる」

はい。

私がすると思いますか？

とりあえず鳩尾を一発殴ったら、ヴィーザは大人しく喋りだしました。

どうやら冗談だったみたいだよ。

「……うーんと、犯人は、フィーア国出身の優秀な術師」

「え？ フィーア国？」

「そ。ジナとレオンは知ってんじゃない？ 嫌味ーで、上流貴族のスターレグ家、三男坊」

「……！ ミーディアか！」

「せーいかーい」

???

ミーディア？

初めて聞く名前だ。

誰だか分からないが、そいつが、真犯人か！ 許すまじ！

「はぁ……ばれたんなら、しょうがないな」

そう言って出てきたのは、緑の髪の子。

ん？ どっかで見たことある気が……？

まてまて。確かに、知ってるぞ。

あの蛇のような嫌な目つき。

変な緑色の長髪。

ああ！ ミィとぶつかって、長時間説教してきたあいつだ！（DA TE…012参照）

「お前は！」

「まさか、あの時のしつけのなっていない女どもが、フィーア国の勇者だとは……」

「……相変わらず、嫌味な奴っ！」

ああもう、すぐムカツク奴だ。

私、こいつ大っ嫌い。

「……ミーディア、説明を」

「分かっている」

レオンが、ミーディアに話し掛けた。

やっぱり知り合いらしい。

ジナは明らかに嫌そうな顔をしている。

ああ、やっぱりあいつの事、嫌いなんだ。

うん、それが普通の反応だと思うよ。

「この私がこの国へ来たのは、スターレグ家の命令でな。

この国が作った適当な魔道陣が、大変危険なものであると判明したんだ」

「危険なもの？」

「説明している最中だ。口を挟むな、小娘」

小娘？！

始めてそんな事言われましたけども！

はいはい、何も言わずに静かに聞いてますよー。

「その魔道陣は、魔物・魔族が陣内に入ると、驚異的なレベルアップが起こるんだ」

「はぁ?! マジかよ！」

「フィーア国を代表する術師である我が父は、早急に私をこの国へ

送った。内密にな」

「……どうしてですか？」

「この国の王が、あの魔道陣を消す事を許すはずが無い。だから、勝手に消してしまおうと思ったのだ」

「そんなことして良いのかよ」

「それぐらい、事を急いでいたという事だ。噂は、魔物や魔族の間に行き交っていた。」

奴らがこの国を襲うのも、時間の問題だったのだ」

なんだよ。

ジナもミィも、口挟んでるじゃん！

なんで私だけ怒るのさっ！

「それで、消したの？」

「そう言う事だ。魔族が、もうすでに動いているという話を聞いたからな。」

もう、ぐずぐずしていられないと思った」

「……それで、何で私の髪がそこにあったのよ」

「お前が勝手に入ったんじゃないのか？」

「入ってない！」

そのミーディアとか言う男が嫌味たっぷりに言ってくるから、私もつい頭に血が上って、大きな声を出してしまった。

しかし。

話を聞く限りでは、本当に私の髪をあ部屋へ置いたのはミーディアではなかったみたいだ。

……じゃ、誰が？

「……それに、魔族が関わっているという話だったのに、今回の奇襲には全く姿を現さなかった」

「確かに、な」

「……………奇妙だ。奴らの掌の上で遊ばれていたような気がして、虫が好かん」

私なんか、どうなんのよ。

犯人扱いされて、裏切られて、なんか、もう面白くない事の連続じゃない。

最悪、って言うんだろうな。こういうの。

「日頃の行いが悪いから疑われるんだ、下品な紅毛などして」

……………こいつ、ほんとムカツクな。

一回くらい殺していい？

DATA..018 勇者と魔王

皆は、これで一件落着、と言ったような顔をしている。

あれ、ちよっと待って？

魔物が襲い掛かってきたりとかで、後回しになってたけど。

私、裏切られた事、忘れた訳じゃないよ？

「……謝罪の言葉も、ないんだ？」

私は、ジナとレオンに向かって言った。

彼らは少しづつが悪そうな顔をしたが、それでも取り乱す事は無かった。

「俺たちは、間違った事をしたとは思っていない」

そのとおりだ。

間違っていない。

でも、そのことは終わった訳だし。

万事解決するために謝罪……て、あった方が良いと思わない？

とりあえず落ち着いてみると、結構、酷いことされたと思うのだ。

今更ながら腹が立ってきた。

あんなにあっさり私を裏切るなんて、なんだか凄く心外だ。

あの言葉で、確かに私は傷ついた訳だし、謝罪の一言くらいあったって良いと思うのだ。

なのに、この二人と来たら、間違っていない、謝るつもりは無い、の一点張りだ。

流石の温厚な私も、ちよっとこの対応にはカチンと来るものがある

わけだ。

「あのさ、」

「おい、女」

そう呼んだのは、ミーディアだった。
なんだよ。お前に用はないんだけど。

「しつこいぞ。そいつらの判断は正しかった。それがすべてだ」

「すべて？ ……あっそう。あんた達と私じゃ、価値観がずいぶん違うみたいね」

「そう言う事だ。何も、責任がジナとレオンだけに在るわけでもないし。」

お前にだって責任はあるだろう？ そんな目立つ色の髪をしているからそうなるのだ」

「残念ながら、髪の色はアミラチョイスよ！」

何が悪い？

髪の色が赤で、何が悪い？

裏切られて傷ついて、何が悪い？

私に責任があるの？

私が傷ついた事は、私にすべての責任があるの？

もう、なんかいいや。

どうでもいい。

だって、こんなんじゃない———

そう思った私の視界に、誰かが映った。

誰だろう、と思ってよく見れば、それは、マオ。

あれ、そういえば、何時から居なかったっけ……？

「お前らっ！ ルイに何やってるんだよ！」

やってきて早々、彼は三人に向かってそう叫んだ。

とくに、ミーディアに向かって。

さっきの会話を聞いてたのかな？

すごく、怒ってる。

「ルイを裏切ったくせに、偉そうなことやってんじゃねえ！」

「なんだ、このガキ？」

「……俺たちが此処にいる理由だ」

ミーディアへ適当な答えを返すジナ。

それでもよく分かっていないミーディアへ、レオンが説明をする。

今思ったけど、レオンっていつも説明係だな。

そんなどうでもいい事を思っている私の脳に、マオの声が響いた。

「ルイを責めるなよ！ 何も悪くねえだろ？！」

「何も、と言うのは少し違うな。そもそも、こいつが疑われなければこんな面倒な事にはならなかったんだ」

「疑われたのだって、ルイの所為じゃない！」

「それは、本人の意見だ。過程の話であり、結果には関係無い」

「あるだろ？！ 少なくとも、こうやってルイが責められるのは、お門違いだ！」

マオは、必死になって私を庇う。

そして私を庇う言葉のすべてを、ミーディアは軽くあしらってかわしてしまう。

それでも、彼は叫びつづける。

……何のために？

嗚呼、そうか。

——私の、ためだ。

「マオ、」

「ルイは悪くない！ 何も、悪く、ない」

「マオ、いいよ、もう」

「良くない！」

「ううん。ほんとに、もう、いいの。大丈夫、だよ。」

私が悪かったんだよ。私が、疑われなきゃ良かったの。それで、解決なんだよ」

私は、苦笑いをしながら、マオを宥めた。

ほんとにもういいんだ、と。

マオがやめてくれるように、願いながら。

私の為にそんなに頑張るなんて、しなくて良いよ。

馬鹿みたいでしょう。

私なんかの為にそんなに必死になるなんて、馬鹿みたいでしょう？

大丈夫、私は私の立場をよく理解しているよ。

こんなところで粘ったって、嫌われるだけだよ。

もっと、もっと、でしゃばらないで。大人しく、静かに、しなくち

やいけないんだ。

マオは、傷ついたような表情になった。
泣きそうになって、そして、悔しそうに唇を噛んだ。

「ルイは……っ、何も悪くねえのに……!!」
「……マオ、」

悔しそうに、彼は呟いた。

感情を全て押し殺したように、心底悔しそうに。
まるで、空気すべてを憎んでいるような、声色だった。

「っ、もういい！ お前らに、ルイは任せられない！」
「……？ マ、オ？」

マオは、私の前に立って、ミーディア達三人を睨んだ。

……あれ？

何か、変。

違和感、が……？

マオの髪が、黒く、なっていた。

確かに、彼の髪は元は黒だった。
けど。あれ？ 染めたんだよね？
なんで黒に戻ってるの？

確かに、ついさっきまでは黒じゃなかったのに……。

しかし、彼の変化は髪だけではなかった。
どんどん、身体が大きくなっていつている。

……え？

自分で言ってて違和感を感じた。

『身体が大きくなっていつている』？

何それ、そんなのありえないじゃない？

けど、そのありえないことが実際に起こっている。

彼はどんどん大きくなっていき、ついに、成人男性程度の身長にまで達した。

………え？

「ルイは、俺が連れて行く!!」

このイケメンは……一体誰？

DATA..019 勇者と魔王

「貴方……誰？」

声は情けなかったが、しょうがない。

むしろ、この精神状態でそう訊けたことを誰かに褒めて欲しい。

だって、信じられるだろうか？

さっきまで子供だった男の子が、大人になった、なんて。もしもあなただったなら、きっと我が眼を疑う事だろう。

「俺はマオだよ、ルイ」

「う、そだ、だって、だって、マオはもつと子供で、」

「成長したってことだろ？」

「そ、そんな一瞬で成長なんてしない！」

「するんだよ。魔王って言うのは、精神にあわせて身体が変化していくんだ」

……………魔王って言った？ こいつ？

「何?!」

ジナ達が、警戒態勢に入る。

あれ、ミイいつの間にかあっちに居る。

「ああ。改めまして。第三代目魔王だ。以後宜しくな、勇者様方？」

にやり、と笑った。

うっ！ ルイはダメージを受けた！

「さあ、行こうか、ルイ」

（大人ヴァージョンの）マオは、私に笑いかけた。
くっ……。

これは、破壊力抜群だ……。

いや、落ち着け私！

どんなにかっこ良くなったとしても、ついさっきまであの子供だった奴だ！

例え苦手度が100を超えるほどのかっこよさだったとしても！

こいつは、子供だ！

子供子供子供こどもこどもこども……

「ルイ？」

ぐはぁ！

くっ……だめでした。

やっぱり、苦手なものは苦手でした。

「どうしたんだよ？」

「やー！ ちょ、お願い！ 顔近づけないで！」

「……それ、ちょっと傷つく」

「うっ……ごめん」

顔を見ないようにして謝る。

すると、私の後方からなんだか殺気を感じた。

誰からだ？ と思って後ろを振り向けば、明らかにいつもと雰囲気
が違うレオン。

あれ、なんか変だぞ。

レオンが、なんだか冷静じゃない。

……………これ、結構緊急事態じゃない？

「……父上と母上の敵かたきっ!!」
「うわっ!」

突然マオに襲い掛かるレオン。
父上と母上の敵?

何それ。実は、レオンには複雑な事情があったり?

「わが国を滅ぼされた怒り、今此処に晴らして見せよう!!」

「わ、わが国? 何それ? レオンって、実は何者?」

「……そんな事も知らないのか?」

はあ、といかにも馬鹿にしたように溜め息をつくミーディア。
オプションで、メガネをくいとあげる動作もついている。

「レオンハルト・サーディルグ。サーディルグ国の第一王子だった男だ」

「お……!?! 王子?! レオンが?」

「ああ。お前も話には聞いているだろう。魔王の手によって初めて滅ぼされた国。」

それが、サーディルグ王国だ」

「あー……聞いたような、忘れたような」

「その時の、サーディルグの唯一の生き残り。それが、レオンハルトだ」

「へえ……他に生き残った人、居なかったんだ?」

「そういうことだ。それで、その後レオンハルトはフィーア国に保護され、今に至る」

「ふうん……。人の数だけ歴史あり、って感じだねえ」

そんな壮絶な過去をお持ちでしたか。

まさか王子だったとは思っても見ませんでした。

そっか……。敵討ちに賛成する訳じゃないけど、そりゃあそんな過去があれば、魔王が憎くもなるだろうよ。

「ま、待て待て待て!! レオン! 俺は、ちがつ……!!」

「大人しくかかって来い!」

「違うんだって! お前の国を襲ったのは、俺じゃなくて俺の前の代の魔王!!」

……え? 魔王って、代替わりするの?

「……どういう事だ?」

「俺は三代目! お前の国を襲ったのは初代! まったくの別人だつて!」

「……魔王が代替わりするなど、信じられるか!」

「本当だって! 俺、つい最近生まれたばかりだから、なんも悪さしたことねーし!」

ほら、だから子供だっただろ?」

ああ、だから子供だったんだ。

………で、済むわけ無いじゃん!

「……そんな事は関係無い! お前が魔王なら、お前を倒す事が俺たちの最終目的!」

確かに。

んじゃあ、此処でマオを倒してこの物語は一段落?

……え? まともに魔道も使えないまま最終回的な?

「無理だって！ 俺を倒しても、四代目の魔王がでてるだけ！」

「……………」

「俺は駒の一つにすぎねーんだよ」

「駒？」

「あー、うーんと、話は長くなるんだけどさ。あるところに神様がいて」

突然神様？！

「その神様が、世界を壊すために魔王おれらを作ったんだ」
いろいろ突っ込む所が多すぎるんですが。

「そんな訳で、お前らが倒すべき相手は俺じゃなくて、神様なんだよ！」

あの、マオくん。

それで、私たちが打倒神様！ ってなるとでも思ってたの？

「自らが助かりたいがために、神の名を使うとは、なんと愚かな！」

「違うって！ほんとに、俺の親父が神様なんだって！」

それもどうかと思う。俺の父さん神様って。小学生でもないよ。

「そんな証拠が何処にある！」

「本当なんだってば！ 世界を壊すには、魔王と勇者が必要で……

……あ！ これ言っちゃまずかったかなあ……」

何を今更。

魔王について長々と説明しといて、何をおっしゃる。

「えーっと……今の、オフレコで」

遅いっつーの。

DATA..019 勇者と魔王（後書き）

マオ

職業..魔王

属性..闇属性

キャラ..精神年齢子供

三代目の魔王。実力は歴代の中でも群を抜いているようで、最強と謳われる。ルイにベタ惚れなのにはなにやら理由があるらしい。苦手度は100越え。黒の瞳に髪。

DATA..020 勇者と魔王

「ルイー！ やっぱり、一緒に行かないのか？」

マオは、半泣きで私の両手を握った。

彼の左肩の上には、可愛くない魔物が居る。

ちよっと、不細工だ。

その魔物の名前は、スープ。……不味そうなスープだな、とか思っ
てしまったのは失礼だったかな。

で、その彼は、マオの分身に近い存在らしい。

決して魔王を裏切る事はなく。魔王が死んだ場合、一緒に死ぬ。
そんな存在。

実際には補助的な役割を担う予定らしい。

「うん。私、勇者のパーティとして頑張るって、決めたから」

「……………俺、やっぱりルイと一緒にいる！」

「駄目ですよ！ 魔王は、皆に顔を見せなくてはいけません！」

「細かい事言うなよ、スープ！」

「というか、勇者と魔王が一緒に行動するって言うのもどうかと思
うしね」

「そうだよ！ ルイちゃんにあんまり触らないで！ 早くどっか行
って！」

マオが大きくなった途端に何故か冷たくなったミイ。

もちろん、マオに対して、だけど。

そして、ミイの頭上にも、魔物が居る。

あの時ミイが手懷けた、鳥型の魔物だ。

ばっさばっさと、大きな羽で飛んでいる。

くちばしが尖っていて痛そうだけど、外見は大きなカラスみたいだ。

「うう……帰りたくねえよお……」

「いいカラ！ 行きますヨ！」

「ルイい……」

結局。

マオは、このまま帰す事になった。

理由は二つある。

一つ目は、魔王を倒しても意味が無い事が判明したから。

また新しい魔王が誕生するくらいならば、私に大分懐いているこのマオを生かしておいたほうが得策だと考えた。

そして、二つめ。

簡単に言えば、脅された。

突然空からやってきたスーヴが、魔王を返してくれと言ってきた。

当然、魔王の身柄を拘束しておきたいこちら側は拒否したが、そこでスーヴの一言だ。

「返さないと、世界中の魔族をあなた方の国へ送りマスヨ」
職権乱用だ。

しかし相手は魔王。ものすごく真実味がある脅しだったので、話し合った結果、仕方なくマオの身柄を引き渡す事にした。

「ルイ……」

「ほら、魔王になったんだからしっかりする！」

「……それ、勇者のパーティの人間が言うセリフじゃないよね」

「あ、魔王なら、もうマオなんて呼べないね」

魔王って呼んだ方が良いかな？

そう思って、マオの顔を見上げる。

しまった！ 顔を見てしまった！

うぐう！ ルイは20のダメージをうけた。

「……いいんだ」

「え？　マオでいいの？　でも、魔王なんじゃ……」

「ルイが、俺のことをマオって呼んだ瞬間。その瞬間から、俺の名前はマオなんだ」

「あ、そ、そう」

マオはずいぶん真剣な顔で言った。

な、なんか名前にこだわりのあるのかな？

「そろそろ行きますヨ！　魔王！」

「マオだっつの！」

「はいはい！　分かりマシタ！　だから、さっさとゴー！」

「スープ、面倒だなあ……」

「王……！！」

「あ、ちよい待って！　ルイ、耳貸して」

「ん？」

耳を貸すのなら、顔を見ないから大丈夫だ。

マオは、私の耳に口を近づけて、小さな小さな声で囁いた。

（……魔王と勇者は、運命の関係にあるんだ。……なーんか、引つかかんねえ？）

え？

「じゃ、またな、皆！　ルイを虐めるなよ……！！」

そう言って、マオはスープと一緒に空へと飛んでいった。

私は良く分からない事だらけだったが、それでもとりあえず手を振

っておいた。

そして。

この国でやることもなくなった私たちは、フィーア国に帰ることにした。

さまざまな事をアミラとシントに報告しなくてはいけない。
でも、ま、とりあえず。

一件落着、かな？

第一章 終了

DATA:020 勇者と魔王（後書き）

ルイ・チハラ （千原琉依）

職業…赤魔道師

属性…赤属性

キャラ…ツツコミ

この物語の主人公。美形が苦手なのは、ちょっとした過去があるよう。もとは日本人らしい真っ黒な髪と瞳だったが、染めた為紅い髪になり、しばしば紅毛と呼ばれる。ちなみに、苦手度Ⅱ美形度。何故か、魔王であるマオからものすごく熱狂的な好意をもたれている。

LOAD:001 小さな魔王(前書き)

時間……DATA:010 (黒い犬に襲われている時)

視点……マオ視点

あの時、行方不明になっていたマオが何をしていたか。

これを前提にしていただけと……

LOAD..001 小さな魔王

「お前、何をしている……!!」

俺は、怒りを抑えながらその男へ話し掛けていた。
その男は、笑った。にやり、とした笑みだった。

「何？ 魔族が人間を襲って、何か問題でも？」

「俺がいる事が、分からなかったのか！」

「分かりませんねえ。あなたは、今はただの子供でしょう？
なんかじゃ、ない」
魔王

その男は楽しそうに笑う。

何が楽しいんだ……！

ルイや、他の皆を攻撃して、何がそんなに面白いんだよ！

「……魔物を操るのは、どういう仕掛けだ」

「知らないんですか？俺は、ディアダバーデユ魔物使い」

……ディアダバーデユ？

そんな単語、俺は知らない。

が、恐らくは職業の一種だろう。

大体の魔族は、人間と同じように職業についている。

「読んで字のごとく。俺は、魔物を操ることができるんですよ、魔王」

「そうか。それは、その笛でか？」

「ご名答。さすが魔王だ。ただのガキじゃないらしい」

いちいちムカツク男だ。

こんな奴が部下になるなんて、なんか考えたくない。
俺が、精神的に壊れそうだ。

「……とにかく、あの黒い犬どもを撤退させろ」

「いやだね、って言ったら？」

「お前、俺がまだ成長してないからって、あまり調子に乗るなよ。
成長しても、記憶は残るんだからな」

「ははっ！ そんなこと、知ってるさ！ そっちこそ、俺のことを
馬鹿にしてるのか？」

むかつく奴だ。殺していいか？

しかし魔族とは、人間の言葉を喋れるのに、人間のような理性は無い生き物だ。

こいつは少し行き過ぎかもしれないが、これが魔族の姿なのだ。
これを、俺は全て統べなくてはならない。

……頭痛がしそうだ。

「とにかく！ お前も、もう分かっただろう。このままじゃ、黒い犬は無駄死にだ。撤退した方が頭が良いぞ」

「そうだな。確かに、この程度じゃ相手にならないようだ。今度は、
もっと強い魔物を連れてくるとしよう」

「お前！」

「お前じゃない。俺の名前は、デルガオ。魔王なら覚えておけよ？」

「……貴様程度、覚える必要も無いな」

「ふっ。魔王は、冗談も得意らしい。『俺程度』？」

デルガオは、さっきまでの余裕ぶりは全く無くなって、目がいつちやってる。

気性が荒く、すぐにキレる。

まったく、これだから魔族というのは……。

「俺を馬鹿にするなよ。いくら魔王でも……消し飛ばしてやる」
「……………」

デルガオはすぐにもとのにやにや顔に戻って、俺から離れた。
そして、すたすたと歩いて、何処かへ行ってしまおうとする。

「ああ、そうだ魔王サマ。黒い犬は全滅したらしいから、そろそろ戻らないと、勇者に心配かけちまうんじゃない？」

くく、とので笑いながらそいつは消えた。
瞬間移動、か。

まったく面倒な能力を持ってやがる。

……あいつは、要注意人物のリストにあげておかなくては。

「マオー?!」

おっと。ルイが呼んでる。

そろそろ、ほんとは行かなくては。

——そして、俺は何食わぬ顔でルイの元へと戻っていった。

LOAD:002 たびのきろく(前書き)

時間……一章が終わってから、二章が始まる前
視点……ミィ視点

LOAD:002 たびのきろく

30日目。

私たちがこの世界に来てから、早くも一ヶ月が経ちました。

時の流れは早いなあ、と思います。

旅の記録をつけるのは勇者の仕事だ、と言われたので、今日から日記をつけていこうと思います。

すでに一つ目の旅は終わっちゃったけど、終わっちゃったもんはしょうがないです。

今日は、ルイちゃんと一緒に城の周りにある、市場に遊びに行きました。

別名は、しょうしがいい。ルイちゃん曰く、商師街、と書くらしい。商人たちの縄張りの町で、売れる物ならなんでも売っていました。食べ物は何論、アクセサリーや乗るための馬や、羽の生えたラクダみたいなのも、売っていた。

ルイちゃんと歩いた通りに、〈BEAR's DOLL〉の支店があったことにはちよつとびっくりしたけど、ルイちゃんは、こんなに大きな国の首都なんだから、あっても可笑しくない、って言うた。

そっか、そうだよね。

ちなみに、支店名はフィーア店だったから、どうやら国外に本店があるブランドみたい。

ルイちゃんは〈BEAR's DOLL〉があんまり好きじゃないみたいだから、お店に入るのは我慢した。

ルイちゃんは別にいいよ、って言ってたけど、私はルイちゃんと一緒に楽しみたいから。

ぶらぶらとその辺りを歩いて、途中でヴィーザに会った。

私は最悪な気分になった。

ヴィーザは、大っつつ嫌い。

ルイちゃんに何かと抱きついたりするから、大っ嫌い。

とにかく、こいつがルイちゃんに近づくだけで嫌。

そう思ったんだけど、ルイちゃんもヴィーザのことを嫌がってたから、とりあえず何も言わないで置いた。

私とルイちゃんが二人で歩くと、ヴィーザは私たちと一緒にについてこようとする。

私はあからさまに嫌な顔をしていたらしく、ヴィーザは楽しそうに笑っていた。

嫌な奴！

その後は、二人（十一人）でご飯を食べた。

お金は、出てくる前にアミラさんが少しくれたから、ラッキーだったの。

ヴィーザの分は別にいいのに、ルイちゃんは優しいから、あいつの食べた分まで出してた。

どうせ私のお金じゃないし、だって。

そういうのが、ヴィーザがくっついてく理由なの！

その後は買い物なんかをいろいろしてた。

いろんなお店に入って、買わないで見るだけの、冷やかしの客。

そして、八百屋でおじさんと話をしていたところ、ジナ君が参上した。

何したのかな、て思ったんだけど、心配して来てくれたらしい。まだ夕方にもなってないよ？

で、結局四人でお店周りをすることになっちゃって。

まあ、楽しかったけどね。

夕方になって、帰る事になることになった。
なんか知らないけど、ヴィーザもついてきた。
くるなっの！

私は帰るとき、ちょっと寂しくなった。

今日一日は、ルイちゃんと一緒にいるはずだったのになあって、少し思った。

まあ、楽しかったから、別にいいけど。

すると、その時ルイちゃんが話し掛けてくれた。

「今度、また二人で来ようね。そのときは、
B E A R S D O
L L にも行こ」

もう、私、その時舞い上がるほど嬉しくなっちゃって。

その一言だけだったんだけど、笑顔でそんなこと言われたら、もう、
ねえ。

ヴィーザがうざいのも、何もかもふつとんでっちゃった。

私はルイちゃんの隣に並んで、手を繋ぐように、腕を絡めた。
ジナ君とヴィーザが、私とルイちゃんを見る。

なーんか、二人に勝ったような気がした。

今日は、最高の一日でした！

LOAD:003 ミイのハーレムその一(前書き)

時間……一章が終わってから、二章が始まる前
視点……ジナ視点

LOAD:003 ミイのハーレムその一

俺は、フィア国で一番の黒魔道の使い手である。

魔道の使い手となると俺じゃなくなるが、黒魔道だったら間違いなく俺。

庶民生まれで、八歳の時に町外れに住む黒魔道師の弟子になり、その後王宮に仕えだした。

そして、三ヶ月で隊長に上り詰めたという、脅威のスピード出世をした男でもある。

ちなみに、モテる。

これは自惚れでは無い。

女の声が五月蠅い、なんて言う言葉を素で言った事もあるくらいだ。

（言ってから、俺今すげえ事言った！ と興奮した）

女遊びが激しい、と言われたこともある。

自分ではそうは思わないが。本気になれるから、本気になれる女を捜してるだけだ。

そんな俺の名は、ジナ。

突然で申し訳ないが、話が変わる。

ついこの間の話なのだが、俺はいわゆる一目惚れというものを経験した。

相手は召喚された勇者。

ミイ・ユリ、と言う名前だ。

「ジナ君、ルイちゃん何処だか知ってる？」

この女は、正直な話、馬鹿だと思う。

何かを説明して分かっていた記憶が無い。

しかも、必ず歩くと転ぶ。

所謂、ドジ。

しかし、この女はこの俺が一目惚れするくらい、可愛い。

目は大きくて丸いし、頬はほんのり赤づいてて可愛いし、唇もいつもみずみずしくて、俺は常に触ってみた………と、とにかく、人形のように可愛い女なのだ。

そして何より、笑顔が可愛い。

俺はこの笑顔に一発KOだった。

あれはやばい。まさに犯罪級。

……いろいろ話がそれた気はするが、これで、俺がどれだけこの女に惚れてるのか、分かってくれたと思う。

「ジナくん？ ルイちゃん、見た？」

「し、知るかよっ！ あんな女！」

俺は、今まで女に本気になった事が無いのだ。

だから正直な話、こいつにどう接して良いのか分からない。

そのため、ついテンパって冷たくしてしまう。

……うう、俺のバカ。

「そっかあ。何処に行っちゃったんだろ？」

しかも、最近気づいた事なのだが、ミイはルイのことばかりだ。

何にしても、まずルイ。

とにかくあの女が最優先。

それが少し、気に食わなかったり、する。
女にヤキモチなんかしてる訳じゃないが、それでも、なんか……
：気に食わない。

「まあいいや。ジナ君にも話、あるし」

「俺に？」

「うん。ルイちゃんのことなんだけど」

きた。

話の内容は、だいたいわかってる。リン・マカでの、ルイを裏切ったときのことだろう。

ルイ至上主義のミイのことだから、なにか言われるだろうとは想像できていた。

しかし、俺は決して悪い事はしていない。

あのときあするのが、一番良かったのだ。

国のため、ひいては世界のため、今、勇者と言う存在を無くすわけにはいかない。

あれが最善だった。最善の策を実行して恨まれる覚えはない。

恐らく、いくらミイから問い詰められようと、俺はルイに謝ることはないだろう。

間違ったことをしていないのだから、謝る必要は無い。それが常識だ。

それはルイも分かっていることだろう。

あいつは、なかなか大人だ。その辺りの常識はきっと分かっているはず。

「ジナ君。私ね、ルイちゃんのこと、大好きなんだ」

「ああ。そりゃ、分かってるけど」

「うん。だから、ルイちゃんを傷つける人間は、大嫌い」

「……ああ」

「ジナくんのこと、レオンさんのことも、大嫌い。ルイちゃんを傷つける奴は、嫌いだよ」

「……ミィ。悪いけど、それは子供の意見だ。あの時は、ああするのが一番良かったんだ。最善を尽くして、それで責められるいわれは無い」

「？ それ、どういうこと？ 相手を傷つけたんだから、状況はどうあれ謝るのは自然なことでしょ？」

「いや、それは可笑しいだろ。その場その場の状況があるんだから、加害者が悪くないことだってある」

「悪くなくたって謝るのが普通でしょ？ 悪くないから謝らないって、それじゃただの悪者だよ！」

「……？ もしかして、それがミィの世界での常識なのか？」

「ああ。謝った人間が絶対的に悪者。だから、自分が悪くないと思ったら絶対に謝らないのが、この世界での常識」

「ふーん……。よく分かんないや」

「そうか。大分、考えが違うんだな……」。

「世界が違うということは、人間が持つ常識も違うということ。」

「その世界の歴史も、状況も、何もかもが違うのだ。よくよく考えてみれば、俺たちの常識がミィ達に通じないのは至極当然。」

「だったら、俺が常識と考えていることは、彼女達には通じない。この世界の常識など、彼女らにとっては関係無い……」。

「悪くなくても謝るのが自然な世界に居たのなら、ルイにとって俺が謝らないのはただの悪意の塊にしか感じられない……？」

「じゃあ、もしかしたらルイは、謝らない俺のことをまだ恨んでいるかもしれないと、そういうことか……」。

「とにかく、そういうわけだから、ルイちゃんに謝って」

「……いや、それでも俺は」

だって、悪いことは何もしていないのだ。それで謝るなど、納得できない。

ルイからしたらその返答では満足できないと分かっているけれど、それでも俺の常識はこっちだ。

俺のやり方を通してもらいたい。

「……んつと、あのねジナ君。ルイちゃんはね、あの時確かに傷ついたんだよ」

「……」

「裏切られたことが悲しくて、傷ついたのに、ジナ君たちのこと恨んでないの」

「恨んで、ない？」

「ルイちゃんは大人で頭良いから、あれが正しかったって分かっているんだよ。その上優しくて心が広いから、もうジナ君たちのことを許してる」

「ああ、なるほど……」

「でもね、それでも傷ついたことに変わりはないんだよ。きっと、今でも気にしてる」

俺はその時、驚いていた。

何につて、ミイのルイへの理解にだ。

ルイはそういうところを表に出そうとしない。自分を隠そうとしているのだ。

それは、言い換えれば大人ということなのかもしれないが、周りからは誤解されやすく、理解されづらいということを示している。

だから。ミイがそこまでルイのことを理解しているのに、俺は少なからず驚いていた。

「ジナ君。私はね、ルイちゃんを傷つける人は大嫌い。でも、ルイ

ちゃんはきつとそれを嫌がる。自分が原因で誰かの関係を壊すことを、怖がってるから。だから、私は表立ってジナ君やレオンさんを避けたりとか、しないの」

そうだったのか……。

ミイは、本来なら俺たちのことを避けてしまいたいほど、俺たちのことを憎んでいる。

でも、ルイのためにそれはしない。

結局、今俺がミイと話ができてるのは、ルイのお陰ということ。ミイの眼中にルイ以外の人間は居ないと、そういうことなのだ。

「私は二人を許せない。でも、ルイちゃんはそれを知ったら悲しむ。だから、せめて形だけでも二人を許したいから、ルイちゃんに謝って、て私は言ってるの。謝ってくれたら、とりあえず、あの事件のことは忘れるから。」

ほら、私バカだから、忘れるのは得意なんだ」

につこりと、ミイは可愛く笑った。

いろいろ、考えているんだ。ミイはミイなりに、考えている。

それはすべてルイ中心の話だが、いつもの様子からは考えられないほど、いろいろ、考えている。

俺は今のミイに、息を呑んだ。

（いつもの、お馬鹿な雰囲気が無い……）

別に、ミイが裏表をつくってるとは思わない。

むしろ、いつも通り。ああそうだ。思い返してみると、ミイはいつもこんなだったな。

ルイのことが大好きで、大好きな女の子。それだけ。

少しいき過ぎな気もするが、それは別にいい。友達想いなだけだ。

ミイは、実はただのドジっ娘じゃなかった。芯の強い、心の強い、女性だった。そうだ、それだけ。

ミイやルイと知り合ってからまだ間もないのだから、彼女の知らない部分があったって、当然。うん、そうだ。

「じゃあね、ジナ君。ルイちゃんに謝らないと、イジメちゃうからね？」

最後の言葉はどうやら冗談だったようで、彼女はいたずらっ子のよ
うな含みのある笑顔をしていた。が、そうは分かっている俺には
少なくない衝撃をあたえる。

だってつい先ほど、無視したいほど嫌いとかミングアウトされたば
かりなのだ。

その言葉の何割かは本気に決まっている。

謝らなかつたと分かったら、確実に避けられる。無視される。ハブ
られる。シカトされる。

エコーがかかったように、頭の中で俺を責める声が鳴り響く。

ミイはすぐに、にっこり笑ったままドアを閉めて部屋を後にしたの
だが、俺はショックからなかなか抜け出せない。

究極の、選択だ。

プライドを捨てるか、ミイにイジメられちゃうか。

そんなの、もう答えは出ているようで……それでもなかなか捨てる
覚悟ができなくて……。

ミイ。もう少し悩む時間を勝手に貰っても、いいだろうか？

ミイ・ユリとは。

彼女は馬鹿でドジで、ここぞと言う時に頼りにならない女の子で。

ルイのことが大好きで、何はともあれとにかくルイが最重要、最優先で。

実は芯が強くて、意外と思い切った女の子だったりして。そして俺が溺愛している、最愛の片想いの相手である。

LOAD:004 ミイのハーレムその二(前書き)

時間……一章が終わってから、二章が始まる前
視点……レオン視点

LOAD:004 ミイのハーレムその二

夢を、見た。

そこは六年前の、我らの城。

六年間過ごしたはずの城が、壊れていく様を見て、自分はただ冷静になることができなかった。

普段は冷静なのに、冷静さが飛ぶことが多々あるのが、自分の欠点だ。

そして、自分の前に立つ、両親。

姉も弟も、そこにいる。

下がってください、と自分は皆に言うが、皆はただ笑うだけ。ただ、優しげに笑って……………、

「レオンハルト」

「お前は優しい子だから」

「俺たちの希望なんだ」

「……幸せに、おなり」

優しげに、笑う。

そして、母上と姉上は、自分の足元に陣を組む。

説明を要求する自分に、家族はただ大丈夫だ、と言う。

光の中に、自分は消える。

幾千の夜を越えても。

幾万の朝を迎えても。

——あの優しげな笑みが、離れない。

カーテンから、朝日が漏れていた。

嗚呼、これでは完全に寝過ごしたな、と思い時計を見る。

時間はまだまだ大丈夫だったが、もしかしたら、自主的に毎朝している剣の稽古は出来ないかもしれない。

なんという失態だ、と自分を責める。

……、どうして、あんな夢を。

どうして、今更、あの日の夢を。

原因を思い起こしてみるが、考えうるのは一つしかない。

魔王と対峙したことだ。

そうだ、それしかない。

しかも、その魔王が告げた、衝撃の事実。

——国を滅ぼした魔王は、すでに死んでいる。

この言葉を信じるならば、自分は、一体、何のために戦えばいいのだろうか。

魔王を消さなければ、サーディルグ国のような国がまた出るのは理解できるし、

そのために戦うという理由ができる。

しかし、国、そして家族の復讐という、自分の気を高ぶらせる為の理由がなくなったのは、大きい。

それほど、ショックだったのだ。

自分が目指していた目標が、既に存在していなかったのは、あまりにもショックだった。

……………、自分は、どうしたら、

「レオンさん？」

こんこん、とノックされる自分の部屋の入り口。

自分は、開いています、と返事をした。

すると控えめにドアは開く。その奥にいたのは、ミイ殿だった。

「あ、あの、朝練に来ていないので、様子を見てきてくれないかと頼まれました……」

恐らく、自分の部下が、朝練に来ていない自分を心配してくれたのだろう。

そのために勇者を使ったのは、感心できないが、それでもその心遣いは素直に嬉しかった。

「すみません。すぐ行くと、伝えてください」

「あ、はい。……あの、なんだか、顔色、悪くありませんか？」

顔色が悪い？

恐らく、あの夢を見てしまったからだろう。

「少し、悪夢を見てしまった」

「ええ?! 大丈夫ですか? あ、私でよかったら、話、聞きますよ？」

夢を他の人に話すと正夢にならない、ってよく言いますし!」

自分に気を使ってくれるその心は、ほんとうに感謝したいが、正夢も何も、過去に起こったことだ。

正夢になる、どころの話じゃない。

しかし、ミィ殿は、それでも心配そうに夢の内容を尋ねてくる。

自分の夢をミィ殿に話すことで、彼女の心配が少しでも和らぐなら、と私は話し出した。

自分が王子であった事。

その国が魔王に襲われ、滅びた事。

家族に、場所移動の魔道によって、救われた事。

魔王に復讐する為に、この国の騎士になった事。

全て、順を追って話した。

そして、すべてを話し終わったとき。

俯く彼女は、泣いていた。

彼女の涙を見たとき、何故か、心がすっと落ち着いていった。

———彼女は、泣いてくれている。

自分の為に、泣いてくれている。

その事実だけで、なんだか心が救われたような気分になった。
何故、そんな気分になったのか。

恐らく。許されたような気分になったのだ。

一人だけ生き残ってしまった自分を責める人間など、どこにもいなかった。

国民も、家族も、すべての人間が殺されたのに、自分だけが生き残ってしまった事に、少なくとも罪悪感を抱いていたのは、自分でも自覚していた。

それを責め、だけど他人は誰も自分を責めない。

その事実が、また自分を苦しめていたのも、事実だ。

両親が、自分を憎んでいない事は、分かっている。

自分が幸せに生きて行く事を望んでいるのも、理解していた。
けれど、やはり、自分で自分が許せないのだ。

誰も救えず、そして自分だけが生き延びてしまった事が。
どうしようもなくやるせなくて、許せない。

そんな風に思っていた自分を。
自分でさえ、許せなかった自分を。

——彼女が、許してくれたと感じたのは、何故なのだろう。

嗚呼、きっと彼女は、許してくれるだろう。

貴方は悪くなんて無い、と。

きっと、この方ならば、言ってくれる。

すみません、泣いちゃって、と彼女は涙を拭いながら言った。

「いいえ」

「それから、そんなこと、私に話してくれてありがとうございます」

いいや、感謝の言葉を告げたいのは、こちらだ。

——自分の為に泣いてくれて、ありがとう。

心のそこから、そう言いたい気分だった。

本当に、有り難い。

そのとき、なんだか、胸がいっぱいになっていくような感覚を、私は覚えた。

「……ミィ殿、」

「はい？」

「自分の身の上話などで泣いてくれて、本当に感謝している」

「い、いいいえ、こちらこそ！」

「——どうやら、自分に、戦う理由が出来たようです」

「ふえ？」

貴女の為に、戦いましょう。

この身を、貴女に捧げます。

———貴女に、永遠の誓いを。

LOAD:005 シイのハーレムその三(前書き)

時間……一章が終わってから、二章が始まる前
視点……ミーディア視点

LOAD:005 ミイのハーレムその三

まったく、散々な目にあった。

リン・マカの魔道陣を消すだけだったのに、なぜか勇者一行に巻き込まれてしまった。

彼らは騒がしい事この上なく、何よりも迷惑。

しかも、結局勇者達と一緒にフィーア国へ帰る事になり、まあ、同じ荷車に乗ったところまでは良い。問題はその後だ。

揺れるわ酔うわ騒がしいわで、とにかく最悪だった。庶民の荷車になど乗るんじゃないかと、酷く後悔したのはまだ記憶に新しい。やっこの思いでフィーア国へつき、国王のもとへ報告しようと思ったら何故かあいつらもついてくる。まあいくら迷惑この上ない奴らでも、一応は勇者一行であるわけで。立場上、仕方なく先に国王とのお付きのアミラ様へと報告をさせた。

「……何だと？ もう一度言ってみろ、ミイ」

「……えと、その、実は、魔王はマオで、マオは魔物と一緒にどこか行っちゃって……」

「お前らは、馬鹿か！！　なんで魔王だって分かっているがら、そうやすやすと逃がす！　何の為の勇者だ！」

「ご、ごめんなさい！　脅されて！」

「脅されたからって逃がす馬鹿が何処に居る！　お前らは、魔王を倒す為に召喚されたんだぞ？！」

「すみません！」

大激怒のアミラ様。本日のアミラ様は短髪である。けれど着ているのは女性物の服で、すこし違和感が残る格好だ。

が、それもそのはず。実は、入室した際にはアミラ様はきちんと

女性の格好をしてにこやかに出迎えてくれたのだ。しかし、勇者の報告を聞いて豹変。彼（彼女？）はあまりの怒りに勢いあまってつけていた長髪をするりととってしまった。その結果の、この格好だ。そして同じ部屋で雑務をしていたらしい国王のシント様は、怒りを通り越して呆れているようだ。右手で頭を抑え、大きく溜め息をついている。

まあ、それはそうだろう。よくよく考えれば、あの時逃がすという選択は、どう考えても可笑しい。

あの場に居た私が言える言葉じゃないが。

「…………よし、分かった。お前ら、ここで正座！」

「せ、正座？」

「この硬い床の上に？」

「そうだ！　そこで、三時間ずっと正座をして、反省しろ！」

「三時間？！　嘘だろ？！」

「本気だ！　おら、少しでもズルしようとしたら、時間が倍になってくからな！」

そして、大人しく正座をする四人。本棚の前にずらりと並び、妙な面持ちでアミラ様の言葉を待ち続けた。

……あのレオンハルトまでもが正座をしているなんて、なんだか奇妙な光景だ。

そして、アミラ様は未だ怒り冷め遣らず、と言った表情で、ソファにどかりと座った。どうやら、シント様は彼らを叱ることはアミラ様に任せたらしく、呆れ顔で本棚前正座隊を眺める。

いつそこまで呆れられると、馬鹿にしているように見えてくるから不思議だ。

「で？　スターレグ家のミーディアが、何でこいつらと一緒にいたんだ？」

「ああ、ええっと、それには理由があつて……」

「お前がリン・マカにいた話なら、聞いている。王宮になんの報告も無しにあの国の魔道陣を消そうとしたことも、な」

ああ、しまった。

確かに、責められるべき事をスターレグ家はした。一步間違えば国同士の問題になることを、一家の判断だけで決行しのだ。王宮から責められるのは仕方なし。むしろ、その程度で済むのなら軽いものだ。

しかし、それだけことを急いでいたのだ。

少しでも遅ければ、魔族は驚異的なパワーアップをしていた。そうなれば、リン・マカだけの問題ではなく世界的な問題にまで発展する事は目に見えていた。

一分一秒さえ惜しい中で、いつ決断が下るとも分からない王宮へと判断を仰ぐことは自殺行為に思えた。だから、迅速で最善の策をとった。

……まあ、それはただの屁理屈だ。

俺たちスターレグ家の独断でリン・マカへ出発した事は変えようの無い事実だ。どんな罰も仕方のないことだと思える。

「頭の良いお前の事だ。今回こんな行動に出たのには理由があるんだろうが、それでも、許されるべきことじゃない」

「覚悟は、出来ています」

「よし。じゃ、そこに並べ」

「……………は？」

斯くして、本棚前正座隊は五人に増えたのだった。

*

「うう。足が、足があ！」

「聞き苦しいぞ、ジナ」

「なんでレオンはそんな涼しい顔してんだよ？ もう一時間だぞ？」

「涼しくなど無い。自分も、もうだいぶ前から足の感覚が無い」

「むゆー。なんか、ルイちゃんも平気そう……」

「……まあ、日本人ですから」

「私だって日本人だよお？ なんで？ なんでえ？」

「……いや、ほら。ミイはクォーターだし？」

「生まれも育ちも日本だよ！」

「くっそ、ヴィーザの野郎、やっぱ、引っ張ってでも連れてくるべきだった……。あいつ、一人だけ難を逃れやがって……」

「まるで察知してたかのように、城に来ないなんて……」

「やかましい！ 静かにせんか、貴様ら！！」

「八つ当たりしてんじゃねーぞ、ミーディア！」

「だれが八つ当たりなど！ 貴様と一緒にするな、魔道しか能が無い短絡男め！」

「んだと？！ やんのか、こらあ！」

「あーもう！ 私を真ん中にして言い合わないでよ！ 両耳が痛い！」

と紅毛の馬鹿女。

は、馬鹿か、お前。

「立つこともできんのに、どうやってお前を挟まないで言い合いをするんだ。馬鹿が」

「言い合いをするなって話をしてんのよ！」

「はっ」

とりあえず言い返す言葉は無かったので、鼻で笑って馬鹿にしておく。

すると、それは効果覲面。その女は顔を赤くして怒った。

まったく、鼻で笑われたくらいで怒るなど、ガキにもほどがある。そう思ってメガネを人差し指であげる。ジナとルイの馬鹿コンビがなにやら言っているが、私の耳には入らん。聞こえない。

私の左隣に居るミイと言う名の勇者も、どうやら彼らの叫び声が耳に入っていないらしい。集中しているらしく、目をつぶって足の痛みに耐えるようにぶつぶつと何かを呟いている。

すると、不意に彼女は瞑っていた目を開け、私を見た。

「疲れましたね」

「……そうだな」

その、たった一言だけだった。

彼女は疲れた表情で笑い、そしてまた痛みに耐えている。

私は、しばらく彼女から目が離せなかった。

……ふ、ふん。品の無い笑顔だな。

それにしても、今気付いたが、この勇者はずいぶんと美麗な顔立ちをしているな。母と並ぶ……いや、もしかしたら母よりも美しいかもしれない。これだけ美しい女は、なかなかいない、な。

「おい、ミーディア?! 聞いてんのか?」

聞いている訳が無いだろう、この馬鹿が。

お前らのような馬鹿の相手をするほど、私は暇な人間ではないの

だ。

左からは、ジナとルイの怒号。

右には、まるで座禅のように仏頂面で正座をしているレオンに、
またも瞳を閉じて集中しているミィ。

まったく、今日は散々な目にあった。

LOAD:006 ルイのハーレム?その一(前書き)

時間……一章が終わった直後

視点……ルイ視点

LOAD:006 ルイのハーレム?その一

リン・マカでの一戦の後のことである。

「そう言えば、ヴィーザはこれからどうするの?」

ふと、頭に浮かんだ疑問を口に出した。よく考えてみれば、もうヴィーザは私たちに用は無いのだ。最初の約束は私たちをリン・マカでサポートするという話なのだから、これからフィニア国へ帰る私たちとの約束はきちんと果たしたことになるわけで。ヴィーザは私たちと一緒に帰る必要は無いのだし、これからどうするのかは彼の勝手だ。

「ああ、んー、どうすっかなあ」

「リン・マカに滞在するの?」

「や、それは無理。俺、オヤジに勘当されてっからさ」

「お父さんに?」

「違う違う。盗賊団の頭。まあ父親代わりみたいなところあったからオヤジって呼んでんだけど。そいつが凄い奴でさあ。そのオヤジから嫌われたら、この国の裏通りは歩けないって言われるくらいで」

「へえー。凄い人なんだねえー」

「で、実は喧嘩して家出、みたいな感じで出てきたから、この国じゃあ俺、人権無いんだ」

「そうだったんだあー」

ミイは、あんまり興味無さそうに相槌を打った。興味が無いなら、無視すればいいのにな?

「だから、とりあえずこの国じゃねーとこにいかねーと」

「ふーん。帰り道なら送ってっても良いよ？」

「ダメエ!!」

突然悲鳴をあげたのはミイ。うわぁ、何したの、ミイ!

「ぜえったい、ダメ! ヴィーザなんか送ってくの、絶対ダメエ!
ルイちゃんから離れろ、コノ、コノ!」

「ちょ、ちょちょ、ミイ! 突然何したの?」

「ルイちゃんならそう言うと思ってたのっ! 絶対ダメだからね!」

「ミイ、そんなにヴィーザのこと嫌いだったの?」

「そうなのっ! だからダメ!」

「ふうん? イヤ、じゃなくてか?」

「私はイヤ! でも、それ以上に絶対ダメなお!」

どこことなく支離滅裂なミイの言葉を、ヴィーザは楽しそうに聞き流している。うっわぁ、楽しそう。嫌な奴の代表だね。

「ルイちゃんは、なんでヴィーザなんかになんかと言っのっ?!」

「や、そりゃ私もヴィーザは好きじゃないよ? っていうかむしろ大っ嫌いだよ?」

「じゃ、何でさ!」

「でも帰り道だったら別に良くない?」

「私は一緒に居たくないのっ!」

ミイは過去最高ではないのかというくらい、叫んでいる。こんなに大きな声をいっばい出して、酸欠とかにならないのかな?

すると、ふいにヴィーザは真面目な顔になる。ミイは何か言ってるけど、ヴィーザはその頭を片手で掴んで遠くへやった。

いやちよっと。物を扱うんじゃないんだからさ。

「なールイ」

「ん？」

「なんで、ルイはこの世界の為に戦おうと思ったんだよ？」

「はあ？　いくらなんでも話題飛びすぎでしょ……」

「ルイにとっちゃこの世界の事なんてどうだっていいだろ？　なのに、なんで戦おうなんて思ったんだ？」

「えー？　うーん………、私も最初はそう思ったよ。っていうか今でも思ってる。でも、この世界が消えると私たちの世界も無事じゃ済まないみたいだし。それに、決めたから」

「は、決めた？　何を？」

「戦う、って。だって、私、帰りたいんだもん。けど、帰るためには戦わなきゃいけない。だったらもう、戦うしかないでしょう」

「欲しいものがあるなら手段はいとわない、か？」

「え。……うーん、結果的にはそうなっちゃうかな？」

ヴィーザ、変なことを訊くんだなあ。なんかちょっと真面目だったから、真面目に答えといたけど。

「ふーん……ルイでも、そう思うんだなー」

「ルイでもってどーゆー意味」

「そのまんまだって」

「ちよっと、ヴィーザっ！　ルイちゃんの悪口だったら許さないからねっ！」

「あー、はいはい」

「むゅー！！　馬鹿にしてるっ！」

楽しそうだなあ、あの二人。いつつもいがみ合ってるのに、息はあってる。意外と良いコンビ……？

「よし、決めた」

「へ？ 何を？」

「俺、フィーア国に行く」

「……え？」

「ってわけで、乗せてってくれるんだよな？ ルイ？」

「ダメエ！」

答えたのは私ではなくミィ。ほったをぷくーと膨らませてヴィーザを睨んでいる。ちよ、その顔可愛いんだけど！

今この場には居ないジナとレオンには、なんと言えいいのか。まさか、私がヴィーザを誘っちゃいましたーなんて言えるはずがない。ジナは言わずもがなヴィーザを毛嫌いしてるし、レオンも良くは思っていないみたいだし。

うわぁ、どうしよう。

その時私は、でもまあなんとかなるだろう、なんて楽観的だったから。

この時、とんでもないことをしでかそうとしているヴィーザの背中を押していただなんて、全く気付かなかったのだ……。

LOAD:007 魔王の未来(前書き)

時間……二章が始まる直前

視点……マオ視点

LOAD..007 魔王の未来

酷く空気の淀んだ、薄暗い部屋だった。

酸素が薄く感じられるような密閉空間。だけどその部屋はバカ広く、その中央にぽつんと立派過ぎる椅子だけが置かれていた。他には、何も無い。

そんな、薄ら寒い魔王の部屋。こんな居心地最悪な部屋に辿り着く為に、世界中の選ばれもしない勇者は奮起しているのだ。

そんな事実がどんな喜劇よりも笑えてくるなんて、やっぱり俺は魔王なんだなあと変な所で実感してしまった。

「魔王様」

「……………何の用だ、デルガオ。俺は呼んだ覚えは無い」

「俺も呼ばれた覚えなんか無いね」

不機嫌を露にして言ってやったのに、こいつはけろりと言い返す。つくづく人の神経を逆なでする野郎だ。口で勝てる気がしない。俺、こいつと性格的に合わないと思うんだ。

えー、皆さんはこいつを覚えているだろうか。きっと覚えていないだろう。分からない人は、番外編の一番最初の話。LOAD..001を呼んでいたきたい。そこに出てくる、嫌味な魔族がこいつだ。

「まあ、成長したって聞いたので。媚でも売っておこうかな、と」

「……デルガオ。お前を呼ばなかったのが、俺の慈悲だと気付かなかったのか？」

「慈悲？」

「俺は、お前の顔を見ただけで、声を聞いただけで、お前を殺したくなる」

俺は、淡々と告げる。言葉に感情を一切込めないように。
すると、デルガオは興味深そうに聞き入った。その行為が俺には
少し癪に障ったが、そこはあえて無視して、俺は続けた。

「ルイの髪の毛。それに似せた毛をあの部屋に置いたのは、貴様だ
ろう？」

「へえ？ どうしてそう思ったんだ？ 魔王様？」

「少し考えれば、馬鹿でも分かる。」

ミーディアは、魔族が動き出したと言っていた。しかし、やって
きたのは不自然に群れた鳥の魔物。あの魔物は、魔物使いが操りで
もしない限り、群れをなすことは無い。

これだけ条件が揃えば、動き出した魔族、というのがお前だと言
う事を想像するのは容易い」

デルガオは、肯定するかのようにククツとのどをならした。否定
をしないということは、イコール正しいということと同じだ。

そしてこの仮定が正しいならば、この後の俺の推論も真実だとい
うことになる。

「本来のお前らの狙いは、あの魔道陣だ。あの部屋を知っていても
不思議じゃない。」

そして、何を考えたのか、お前は紅い毛をあの部屋へと置いて行っ
た」

「^{ザツ}That, ^{ライト}s right! (※その通り!)

では第二問！ 何故、俺はわざわざ紅い毛を用意してまでその女を
嵌めようと思ったのか、分かるか？」

「魔族の考える事など、知った事か。大方、俺をからかおうとした
んだろ」

「またまた正解！ いやあ、魔王様はクイズもお得意なようだ」

「……デルガオ、お遊びもその辺にしておけ」

嗚呼、流石の俺も堪忍袋の緒が切れた。此処まで馬鹿にされて、我慢などできるだろうか？

ここで引き下がったら、魔王の名が廃る。否、男の名が廃る。

「お前は、俺を怒らせた。……この事を、忘れるなよ」

「ククク。肝に銘じて置きますよ」

デルガオは、大人しくこの部屋を出るために俺に背を向けた。

………いろいろと不意な所は残っているが、肝に銘じるとい
うのなら、とりあえず今回は見逃しておこう。

そう、思ってすぐ。あいつは余計な事を言い出した。

「しかし。ここまでした俺を泳がすなんて、三代目は随分甘いに見える」

「……お前な、」

「それと、もう一つ。魔族が、全てあんたの部下だと思わない方がいい」

それだけ言って、デルガオはふっと消えた。瞬間移動、ね。面倒だ。

まったく、あいつは最後まで嫌な奴だった。

魔族というものは、総じてあんなものだ。何を考えているのか想像できず、自己中心的考えで、自分のやりたいことしかやらない。そんな奴らの、トップが俺だ。つまり、俺はあいつら全員をねじ伏せなくてはいけないというわけだ。そんな未来の俺を少し想像。

———いや、無理だろ。

これからの自分を少し想像してみても………苦勞している姿か
思い浮かばず、ついつい痛む頭を抱えたのだった。

———嗚呼……。未来が、心配でならない……。……。

DATA..021 さざなみ

勝手なことを言われている自覚はあった。勿論、腹が立った。けれど。

言葉が、怖かった。何も言えなかった。気づいてしまいそうで、怖かった。瞼を開けて、その先にあるものが分かってしまいそうで。必死に、頭の中の像をかき消していた。

（お前の闇を知ることができるのは、この俺だけだ）

リン・マカの事件があつて、はや数週間。帰ってきてからというもの、私たちはずっと勉強をしていた。まさか異世界に来てまで勉強をするはめになろうとは。不運だ。

内容は勿論、魔道について。どうやら、勇者も少し魔道が使えるようなので、ミィも一緒に勉強している。

そして、赤魔道について、なんだけど。まあ、少し、使えるようになった。本当に少し。どうやら魔道と

いうものは、自身の實力合わせて、使える魔道がレベルアップしていくらしい。ほんとにゲームみたいな世界なんだな。レベル1の魔道しか使えない私は、まだまだということだ。

そして、ついでに、この間ミイが手懷けた、あの魔物の事だ。変なカラスみたいなやつ。ミイはグウと名付け、可愛がつている。鳴き声からダイレクトかよ。と私がポロリと言ったら、ジナとミイにすごく怒られた。

あの時の二人の迫力といったら。くすん。怖かったよ。

「で、あれはなんなの？ 才能とか言わないよね」

「恐らく、異世界人の特殊能力だろうな」

曰く、アミラの話では。

大分前にも話された、異世界から渡ってきた人間だけに与えられる特殊能力なのは、と言う事だ。

「ふーん、魔物と話ができる能力が、ミイの特殊能力？」

「だろうな。それ以外に、魔物の言語を理解するなど、考えられない」

「でも、その特殊能力って、私にもあるんでしょ？」

「ある。だけど、全くいっしょという可能性は限りなく低いし、どういうものかを確かめる術もない」

「分かるまで、待つしかないって事ね」

「そう言う事だな」

そっか。できれば、使える能力は活用したいと思ってたんだけど。

「あせるこたねえさ。お前らには、ジナとレオンっていうこの国でも最高の戦力を貸してやってんだ」

「うーん、でも、やっぱり自分の身は……」

「自分で守りたいって気持ちも分かるが、一番大切なのは、とにかく死なない事だ。自分で守って死ぬんじゃ、笑い話にもできねえかな」

「そりゃあ、ね」

「お前らはよくやってるよ。信じられないスピードで成長してる。これだけでも、充分満足に値するさ」

な、なんかアミラが優しい……！

明日は雨だな、と私はテキストに目を戻しながら思った。

アミラは、なんだか分厚い本を読みながら私と話をしていた。今は、アミラと二人で魔道の勉強をする時間だ。私は赤魔道に関する本を延々と、えんえんと、読んでいる。もう両手の指じゃ足りないくらい読んでます。

アミラからは、一言一句暗記するまで読めといわれている。それが魔道の始まりだとか何とか。

「それにしても、毎日毎日、勉強勉強。暇じゃないけど、なんというか……」

「しょうがない。こっちだって、国をあげて賢明に情報を集めてるが、手がかりは何もなし。ま、魔王のことは分からないのが当然だが」

どうやら、魔王に関することはさっぱり分かっていないらしい。どこの国も血眼になって魔王の居場所を探っているが、見つけた国は未だなし。何らかの方法でカモフラージュされている可能性が高いとのこと。

魔王の居場所を見つけ、こちらから襲撃するのは、とりあえず不可能に近いらしい。

「へえ？ そうなんだ？」

興味深そうな言い方なのに、軽そうな声で、実は全く興味がありません、そんな声色でそう言ったのは、私ではない。もちろん、アミラなわけもない。

変な色の猫の獣人、ヴィーザだ。

……………いやいやいや！　なんで、ヴィーザがここにいる！！

「何でいるのよ！　ヴィーザ！」

「ん？　窓から入った」

「入るな！　不法侵入よ！」

「王宮は公共の施設だからね。不法侵入じゃないよ」

「ぐだぐだへりくつ言うな！　そして近づくな！」

私の隣りに座ろうとしたヴィーザを殴り、アミラの後ろへ逃げる。しかし、私の懇親の一撃をヴィーザは軽くかわして、追いかけてくる。

しかーし！　私は必殺技を使った！

「アミラガード！！」

「人を盾にすんじゃねえ」

アミラは私の頭に拳骨を振り下ろした。

ルイは　50の　ダメージ！

なかなかの攻撃だ。盾を使ってダメージを受けるなんて、これほどマイナスな盾があるだろうか。

結局私の負けで、ヴィーザは私に抱きついてきた。もちろん抵抗は精一杯してるけれど、哀しいかな、文化系の私じゃヴィーザの力には到底敵わない。しかし、だからといってやられっぱなしにされているわけにもいかないので、あいつが半分冗談でしてくるキスをおかわす為に、腕を精一杯振り回す。

そして、やめてやめてときゃーぎゃー騒いでいたら、アミラがヴィーザをはがしてくれた。

「お前は、なんで王宮内に入ってる？」

「門番に勇者の知り合いだって言ったら、許可くれた」

ヴィーザは、にこりと笑って答えた。なんでだろう、満面の笑みなのに、なんか殴りたい。

てか、門番……！！ 門番に軽くない殺意を抱きながら、そっとアミラの後ろへ行く。ヴィーザは私のその様子に、にやりと笑っていた。

……………ムカツク。

「なんだよ？ 俺、ルイと一緒に旅できると思ってたからこの国にいののに」

「何その話！ 聞いてないし、例えば旅するとしてもあんなだけは連れてかない！」

「国が本気出しても、魔王、見つからないんだ？」

「魔王はそれほど手強い、てことだ」

ヴィーザは、さっきまで私が座っていた椅子に座る。私とアミラは立ったまま。図々しく足を組みながら私たちを見上げるヴィーザは、ふとさっきまで私が読んでいた本をばらばらとめくってたけど、すぐに閉じた。気持ちちは分かる。

ヴィーザは、アミラの後ろにいる私を見て、笑った。自分から逃げようとしている女がいる、という事実が楽しいんだろう。にやりと実に楽しそうに笑う。……………なんか、その、今言うべきことじゃない気がするし、あんまり言いたくないんだけど、ヴィーザの顔って……エロイ。

「俺の知り合い、なんでも知ってんだよね。行ってみる価値はあると思うけど、案内する？」

そしてやっぱり、ヴィーザはにやりと笑う。するとアミラもにやりと笑うもんだから、その二人を眺め、うわぁ私すごいところにいるな、と思った。

ふたりとも、顔の威力半端無いからね。
うん。

DATA:022 さざなみ

いつたい、何時になったら目的地へ辿り着くのか。

途切れることのできない緊張感の所為で疲労し始め、折れそうになる心を叱咤する。もうちょっとだ、多分。

そう、言い聞かせて。

—————あの後。

アミラはシントやジナと相談し、少しでも可能性があるのならという事で、ヴィーザに案内してもらった。そして、そのときたまたま暇だったジナと、ミイを連れてヴィーザの後についているのは、良いんだけど。

最初は何も言わず、派手な色のTEEシャツを追いかけていたのだが、どんどん、町並みが薄暗くなっている。道の脇にはゴミが捨てられていたり、壁には色鮮やかな塗料で落書きがされていたり。

まだまだある。酔ってるんだか怪我してるんだか分からないが、でかい図体したおっさんがゴミ箱の脇でねっころがっていたり、警察に見つかったら「ちょっと署まで来てもらおうか」ってすぐに言われそうなものを平気で並べて売っていたり。

一言で言うなら、とにかく治安が悪いのだ。フィーア国はそこそこ発展してる国だと勝手に思ってたから、治安は比較的良好だと思うんだけど、やっぱりいくら首都の町でも、こういうところはあるみたい。

通称裏通り。

フィーア国の闇の住人達の住处である、裏社会の社交場。半端なチンピラ程度の奴らならば、三秒で身包み全部はがされると評判の場所だ。殺し屋から、傘下の数は軽く百を超える、すさまじい勢力

を誇るやくざのトップまで。犯罪者オールスターらしい。

ヴィーザもなかなか名の知れた盗賊なので、こういった裏のことに詳しいらしいのだ。ここにも、よく来るらしいし。っていうか、こんな危険なところに何の用なの？

「ヴィーザ、此処、大丈夫なの？」

「離れなければ大丈夫だって。ただ、気をつけろよ？ いきなり殴りかかってきたり、引っ張られて犯されそうになったりするから」

「……それ、大丈夫って言えない」

私は、そのヴィーザの言葉を聞いてすごく心配になったので、ミイの手を繋いだ。よし。これで、ミイがはぐれたりする心配はない。ミイも怖いのか、繋いでいる私の手を、ぎゅ、と握った。ミイは可愛いから、連れ去られる危険は私よりも大きいもんね。

ジナは、ミイのことを睨んでいる……わけではなく、見守っているらしい。それでも。少しも目を離すことなく、じとー、と後ろから見守っている。

……悪いけど、それじゃ怖いよ、ジナ。

どう見ても睨んでるもん。ミイは気付いてないみたいだけどさ。でも、怖がられること覚悟で、そこまでしてミイを護りたいという心意気は認めよう。

「ジナ、いざとなったら宜しくね？」

「ああ。ミイに近づくバカがでたら、この辺一体吹き飛ばすから安心しろ」

「むしろ安心できないよ、それ。なんで一人を止めるためにこの辺一体吹き飛ばすの。意味分かんない、馬鹿」

「ちげーよ。一人を止めるためじゃねえ。一人を殺すためだ」

「黙れ馬鹿。お前は絶対に魔道を使うな。その思考が危険すぎる」

「ジナ君、ミイだけじゃなくて、ルイちゃんも護ってね？」

「……!! だ、誰がお前の頼みなんか聞くかよっ!」

「いや。とりあえず、そこは人としてY e sと言っておこう、ジナ」
「……………。だけど、こいつも一応女だからなー。しょーがねえから、いざとなったら助けてやるよ!」

「その言葉は嬉しいけど、『一応』ってどういうこと。あんたは素直に助けてやるって言えないの?」

すると、ヴィーザが私の肩に手を回して、「俺が護ってるよ」と、上機嫌に言った。

私はびくりと肩を跳ねさせ、咄嗟にジナの後ろに隠れた。ミイは、自分から私とヴィーザの間に身体を滑り込ませてくれたけど。

ヴィーザを睨みつけるミイ。咄嗟に盾にされて不機嫌そうなジナ。そして、少し離れたところからヴィーザの様子を窺う私。を見て、楽しそうないやらしい笑顔で笑うヴィーザ。

こいつは、本当に、私が嫌がっているところを見るが好きみたいだ。とんでもないドSで、この人のことが苦手な私に、とにかく、こいつはくつつきたがる。となると、私は当然それを必要以上に嫌がるので、その様子を見るのが、彼にとって楽しいらしいのだ。

うっわ、嫌な奴。

「ていうか、今訪ねようとしてるあんたの友人って、誰なの? アブない奴?」

「んー? まあ、言いようによっちゃ、犯罪者だけど。でも、普通の商人だよ」

「こんなところにお店構えてるのに?」

「いろいろと、あぶねー橋渡ってるからだよ。商品を手に入れるために、犯罪まがいのことやってるからな」

「それ、普通って言わない! ノット ユージュアリ!」

「ふつーだって。ふつーの情報屋なら、当然のことだよ」

「……じょうほう、や?」

「そ」

情報屋って。いや、よく聞く言葉だ。漫画とかゲームとかでね。情報を売ってる、という人たちのこと、だと思うけど。

なるほどねー。情報っていうのは、最強の盾にもなるし、武器にもなる。売る人間を間違えれば、それこそ国を脅かす問題になるかもしれない。そして、そんな情報を手に入れるためには、確かに違法なこともしなければならぬこともあるだろう。

そりゃ、表じゃ店を構えられないよなあ。

「あ、ここ、ここ」

「ここ？」

ヴィーザが指差したのは、一軒の喫茶店だった。とにかくボロイ。が、この通りにはピッタりの外見だ。薄暗く、今にもつぶれてしまいうようなレンガの家。想像した通り、レンガには、色とりどりの落書きがされてある。どれもこれも幼稚なものだ。ここの住人がしたものではないのだろう、という事くらいは想像がつく。

「さて。ここが、フィア国一番の情報屋の住処。^{すみか}カフェ、バーズ
ネスト」

ヴィーザは、改まった態度でそう言ってから、カフェと呼ばれたそのお店の、古そうな木のドアを片手で開けた。

からんからん、と乾いた音がその場に鳴る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4911h/>

世界の中天

2011年6月13日06時19分発行